

『過ぎし年月の物語』の文体と『コンスタンティノス伝』 『メトディオス伝』の言語

—対照研究の試み—¹

佐藤 昭 裕

はじめに

12世紀初めにキエフで完成した年代記『過ぎし年月の物語』の言語と、9世紀末、すなわち古教会スラブ語の時代に成立し、ロシアおよび南スラブ系の教会スラブ語文献として伝えられる聖者伝『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』の言語について、テキストの構造と言語的特徴という観点から比較したい。それにより『過ぎし年月の物語』の言語に見られる語りのスタイルの起源について考えるのが目的である。

1. 『過ぎし年月の物語』の言語²

1.1. 『過ぎし年月の物語』における4つのタイプのテキスト部分³

『過ぎし年月の物語』では、旧約聖書に述べられた世界の始まりとスラブ民族の出現から始まって、12世紀初めまでのリューリク王朝によるキエフ・ルーシ国家の統一と

1 本稿の議論は佐藤 (2007) 2章～4章の議論を次の3点で大幅に改訂したものである。すなわち、1) 『コンスタンティノス伝』のデータについて再検討し、佐藤 (2005) における『過ぎし年月の物語』のデータと同一の基準によって数え直した。2) 『メトディオス伝』を分析の対象に加えた。3) ロシア年代記としての『過ぎし年月の物語』とスラブ聖者伝としての『コンスタンティノス伝』の言語の対照という視点に加え、スラブ聖者伝の内における『コンスタンティノス伝』と『メトディオス伝』の比較という視点の分析を加えた。

2 本章の議論は主として佐藤 (2005) の1章に依る。

3 『過ぎし年月の物語』についての分析は *Lavrent'evskaja letopis'. Vyp. 1: Povest' vremennykh let.* (Polnoe sobranie russkich letopisej izdavaemoe Postojannoju istoriko-arheograficeskoj komissieju Akademii Nauk SSSR. Tom 1.) Izd. 2. Leningrad. 1926. (いわゆるカールスキー校訂版) による。

発展の過程が語られている⁴。そしてこの年代記を注意深く読むと、そのテキストが大きく、歴史的出来事について具体的に述べた部分と、この述べられた歴史的出来事について、またその叙述の対象となった人物について年代記作者がキリスト教徒としての立場から評価を下した部分との、2つのタイプのテキスト部分からなることに気付く。以下では、前者を「事実叙述」タイプのテキスト部分、後者を「コメント」タイプのテキスト部分と呼ぶことにする。模式的に見れば、この年代記全体がこの2つのタイプのテキスト部分が交互に現れることにより出来上がっていることになる⁵。次の例(1)は955年の記事で事実叙述タイプのテキスト部分、(2)はこれに直接後続するコメントタイプのテキスト部分の例である。(1)では、オリガ公妃がコンスタンティノープル(ツァリグラド)に行き、正教の洗礼を受けて帰ってきた出来事が描かれている。(2)では、彼女が洗礼を受けた意義について、年代記作者がキリスト教的立場から評価をくだしている^{6,7}。

4 シャフマトフの研究によれば、この年代記は次に示すように11世紀前半に編纂の作業が始まり、6次に亘る編纂の段階を経て最終的に12世紀初めに完成したとされる。そのうち第5の集成(svod)の系統はラヴレンチー年代記(Lavrent'evskaja letopis')、ラヂヴィル年代記(Radzivilovskaja letopis')、アカデミー年代記(Moskovsko-Akademičeskaja letopis')の前半部として残り、第6の系統はイパーチー年代記(Ipat'evskaja letopis')の前半部として伝えられる。しかし第1から第4までの集成は、今日そのままの形で見ることはできないとされる。cf. Šachmatov (1908) 特に527ff, 532。同(1916)。

1. 1039年:「最古の集成」(Drevnejšij letopisnyj svod, Drevnejšij Kievskij svod)

2. 1073年:「ニコンの集成」(Svod Nikona, Pervyj Kievopečerskij svod)

3. 1093-95年:「はじめの集成」(Načal'nyj svod, Vtoroj Kievopečerskij svod)

4. 1111-13年:ネストル編『過ぎし年月の物語』第1版(1-ja, Osnovnaja redakcija Povesti vremennych let)

5. 1116年:シリヴェストル編『過ぎし年月の物語』第2版(2-ja, Sil'vestrovskaja redakcija Povesti vremennych let)

6. 1118年:『過ぎし年月の物語』第3版(3-ja, Kievopečerskaja redakcija Povesti vremennych let.)

5 ただし実際の分量を見れば、事実叙述タイプのテキスト部分の方がはるかに多い。

6 古ロシア語および(古)教会スラブ語テキストの引用に当たっては次のように簡略化してローマナイズした: а → a, б → b, в → v, г → g, д → d, е/ѣ/ѧ → e, ж → ž, з/зъ → z, і/ї/їи → i, ѡ → o, к → k, л → l, м → m, н → n, о/ѡ → o, (ѡ → ot), п → p, р → r, с → s, т → t, у/ѹ/Ѹ → u, ф → f, ѿ → f, х → ch, ш/шъ → št, ц → c, ч → č, ѡ → š, ѣ → ѣ, ѡ/ѡи/ѡї/ѡы → y, ѡ → ѡ, ѡ → ѡ, ю → ju, ѡ/ѡ → ja, ѡ → je, ѡ → e, ѡ → a, ѡ → je, ѡ → ja, ѡ → ks, ѡ → ps, ѡ → i. 『過ぎし年月の物語』テキストに現れ

- (1) a. V lēt<o> 6463. Ide^{V1} (aor.3sg.) Oľga^{S1} vъ Greki. i pride^{V2} (aor.3sg.) C<a>rjugorodu
 bē^{V3} (impf.3sg.) togda c<a>rъ^{S3} imēnemъ Cēmьskii. i pride^{V4} (aor.3sg.) k nemu
 Oľga^{S4}. i viděvъ^{V5} (Prt.pt.) ju dobru suštju zělo licemъ. i smyslenu. udivivъsę^{V6}
 (Prt.pt.) c<a>rъ^{S6} razumu ēja. besēdova^{V7} (aor.3sg.: CompSp.aor.3sg.) k nei i rekъ^{V7}
 (Prt.pt.)⁸ ei. “podobna esi c<a>r<s>tv<ova>ti vъ grad<ě> s nami.” ona^{S8} že →

る [] 印はカールスキー校訂版でラヴレンチー年代記テキストの欠落部分が他の年代記、写本により補われた部分を示す。綴字が省略されている箇所はtitloが用いられた場合、用いられていない場合を区別せず、省略された綴字を < > 内に補った。丸titloと併用されている上付の小文字は本来の位置に書いた。語末に現れるはずのъとьは原則として補わなかった。語中に現れるときも、補うのは必要最低限の場合に限り、その際それぞれoとeに変えて補った。キリル文字のѦ、Ѧはe、aで転写したが、< > 内に補うときはja、uを用いた。『メトディオス伝』写本に現れる母音の真上のアポストロフィ風の補助記号は省略した。

地名、人名およびそれらから派生した形容詞は大文字で表記した。しかし古ロシア語および古スラブ語では現代語の文 (sentence) にあたる概念が十分に発達していたとは考えられないので、原写本で大型飾り文字が使用されている場合を除き、文頭を大文字で示すことはしなかった。また *Žitija Kirilla i Mefodija* (1986) 掲載の『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』の転写テキストではコンマとピリオドの区別がなされ、原写本でも一部コンマ風の縦長の記号が現れるが、これは区別せずすべてピリオドで統一した。また一部、原写本に現れる読点を読みに従って省いたが、これについては特に注で断ることはしなかった。

数字は、本来のキリル文字を用いた表記を算用数字に転記した。直接話法の部分は “ ” で囲み、訳文中では 「 」 で示した。聖書からの引用箇所は « » で囲み、訳文中では 《 》 で示した。『メトディオス伝』に現れる書簡の部分はテキスト、訳文とも 【 】 で囲って示した。テキストを引用の途中で部分的に省略した場合、省略部分を [...] で、訳文では [...] で示した。ただし引用の始まりあるいは終わりの部分での省略は特には示さなかった。

テキストの引用箇所は、当該の引用の最初の部分の位置を、『過ぎし年月の物語』についてはカールスキー校訂版のコラムと行で、『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』については原写本の葉と行で示した。異本の略号は本稿末尾に掲載する。

- 7 以下の例では語順についての議論に関与する述語動詞をV、その主語をSで示し、対応する主語と述語に同一の番号を付す。ただし、本来的に主語を持たなかったり、あるいは語順が固定して、語順に関する議論に関与しない動詞についてはこれを省いた。(下の注13を参照。) 動詞形式の略語については末尾の略語表を参照。主語が複数の語からなるときは例(2)の *si bl<a>ž<e>naja Oľga^{S5}* のように全体をイタリックで示す。動詞形式が複合的な場合は、例えば(4)のIに現れる *kr<e>stilasę^{V1} (l-prt.) esi^{V1} (pr.2sg.: pf.2sg.)* 「汝は洗礼を受けた」のように、複合形式を構成するそれぞれの要素をマークして説明をつけるとともに、複合形式全体の形を定動詞(助動詞)の方に記す。なお本稿では、主格で現れ動詞と数と人称が一致する名詞句の他、スラブ語に固有の存在否定をあらわす生格 (genitive) 名詞句および絶対与格構文で行為の主体を指す与格名詞句も明示的主語として扱う。

- 8 *besēdova^{V7} k nei i rekъ^{V7}* ei 「彼女に話しかけて言った」は2つの発話動詞 *besēdovati* 「語り

razuměvši^{V9} (Prt.pt.) ← reč<e>^{V8} (aor.3sg.)⁹ ko c<a>rju. “azъ pogana esmъ. da ašte

かける」とrešti「述べる」が連続して現れ、両者が合わさって一つの発話行為を表している
と理解した。ここでは、このように使用される2つの発話動詞を一つの単位として扱い、複
合的発話動詞と呼ぶことにする。その際、語順については、先に現れる方の要素（ここでは
V7のbesědova）と主語名詞との関係により、時制については定動詞の形をとる要素（同じ
くV7のアオリストbesědova）により数えることにする。このような複合的発話動詞の後項
に現れるのは通常glagolatiとreštiという2つの動詞に限られる。glagolatiが後項に現れる場
合は、前項にはchuliti「ののしる」、moliti sę「頼む、祈る」、otvěštati「答える」、
svědětelsťstvovati「証言する」、vъprosiiti「訊ねる」、vъzpiti「叫ぶ」、zaprětiti「禁ずる」
といった種々の語彙的な意味を持つ発話動詞が現れる。一方reštiが後項に現れるときは、前
項に現れるのは通常otvěštati「答える」に限られ、その際reštiはアオリストreče、rěšęの
形を取るのが一般的である。その意味でテキスト中に現れているbesědova k nei i rekъ eiと
いう形は必ずしも典型的なものとは言えない。例(3)に出てくるprisla^{V2} k nei c<a>rъ^{S2}
Grečъskii g<lago>lę^{V2}も前項prislati「(使者を)送って寄越す」、後項glagolati「言う」から
なる複合的発話動詞と考える。意味は「使者をを寄越して言う」となる。類似の意味で前項
がposlati「(使者を)送る」になる場合もある。詳細な議論は佐藤(2005)の第3章、特に
3.3を参照。

- 9 後述の通り古ロシア語では分詞と定動詞の違いは絶対的なものではなく、絶対与格構文（通
常与格の明示的主語を取る）以外でも、分詞が明示的な主語をとることは可能である。この
ona^{S8} že razuměvši^{V9} reč<e>^{S8} ko c<a>rju.「彼女は意味を悟って皇帝に言った」におけるona
も可能性としては直接後続する分詞razuměvšiの明示的主語と考える場合、定動詞reč<e>の
明示的主語と考える場合の両方が可能である。しかし、どちらを採るかは意味に頼らざるを
得ず、恣意性を避けることはできない。そこで本稿では、実際に名詞を分詞の明示的主語と
して分析するのは、あくまでもそうせざるを得ない場合、他に可能性がない場合に限ること
とする。従って、このような「名詞—分詞—定動詞」という配列の場合には、分詞を飛ばして
定動詞の主語として分析することとする。すなわち例文中に示したようにonaを
razuměvšiの主語でなくreč<e>の主語として解釈した。そして、このことを視覚的に明示す
るために、両者を矢印(→←)で結ぶことにする。ona^{V16}とstojaše^{V16}、ona^{S31}とpride^{V31}の関
係も同様である。また語順に関してSとVの関係を図式的に示す場合には(1) b.にある
S8žeV8 [V9] V10S10...、S16žeV16 [V17] V18...、S31žeV31 [V32] V33...のように、主語と述
語の連続関係を遮る要素となる動詞を[]で囲むことにする。なおこの配列の場合には、名
詞を定動詞の明示的主語と分析する場合も、仮に分詞の明示的主語とする場合も、語順に関
して統計を取る時は、VS語順1例、V語順1例となって結果に変わりはない。

一方「分詞—名詞—定動詞」という配列の場合には(注49を参照)、名詞は可能性として
は、先行する分詞の明示的主語として分析する可能性と後続する定動詞の明示的主語として
分析する可能性の両方がある。分詞が明示的主語を取り得るという事実を認めた上で、なお
実際の分析に当たってはその範囲をできるだけ限定して考えるという原則に立てば、この場
合、名詞を定動詞の主語とすべきということになる。しかしそうすると、語順について統計
を取る時、この原則に従って名詞を定動詞の主語とした場合にはV語順1例、SV語順1例に
なるのに対し、先行する分詞の主語として分析した場合にはVS語順1例、V語順1例となっ

mę chošteši kr<e>s<ti>ti. to kr<e>st<i> mę samъ. ašte li to ne kr<e>štjuse.” i
kr<e>sti^{V10} (aor.3sg.) ju c<a>rъ^{S10} sъ p<a>t<ri>arch<o>mъ. prosvěštena^{V11}
(Prt.P.pt.) že byvši^{V11'} (Prt.pt.: AnP.Prt.pt.). radovašesę^{V12} (impf.3sg.) d<u>šeju i
tělomъ. i pouči^{V13} (aor.3sg.) ju patrearchъ^{S13} o věřě. [i] reč<e>^{V14} (aor.3sg.) ei
“bl<a>g<o>s<ove>na ty v [ženach] Ruskich. jako vozljubi světъ. a tьmu ostavi.
bl<a>g<o>s<lo>v<i>ti tę chotětъ s<y>n<o>ve Rustii. [i] v poslědnii rodъ vnukъ
tvoich.” i zapověda^{V15} (aor.3sg.) ei o c<e>rk<o>vn<o>mъ ustavě. o m<o>l<i>tvě i o
postě. o mil<o>st<y>ni i o vьzderžanъi těla čista. ona^{S16} že → poklonivši^{V17} (Prt.pt.)
glavu ← stojaše^{V16} (impf.3sg.). aki guba napajajema. vnimajušti^{V18} učenyja. [i]
poklonivšiše^{V19} (Prt.pt.) p<a>tr<i>archu gl<agolju>šti^{V20} (Prt.pr.). “m<o>l<i>t-
v<a>mi tvoimi vl<a>d<y>ko. da schranena budu ot sěti neprijaznъny.”
bě^{V21} (impf.3sg.: AnP.plpf.3sg.) že reč<e>no^{V21'} (Prt.P.pt.) imę^{S21} ei vo kr<e>št<e>ny

て、数量的調査の結果に違いが生じることになる。本稿は語順の問題を扱うことが目的の一つなので、このような配列が現れる場合には語順確定不可能とし、先行する分詞、後続する定動詞、いずれも数量的調査の対象から外すことにする。ただし後述の例外的場合を除く。

実際に分詞が明示的な主語を取るとするのは、次のような場合である。分詞であっても、その前後に意味的、形態的に主語となる可能性を持つ名詞句が現れ、同時にこの名詞句を主語として取り得る定動詞が近くに存在しない場合には、この名詞句を分詞の主語と見なさざるを得なくなる。例えば、次の例で能動分詞過去のposlavъ^{V3}「送った」の行為主体はモノマコス皇帝であるがこの文脈で他にモノマコスを行為主体とするような動作を表す動詞は存在しない。従って名詞句c<a>rъ imenemъ Monomachъ^{S3}は能動分詞過去のposlavъ^{V3}の明示的主語とせざるを得ない。i) i bys<tъ>^{V1} (aor.3sg.) vēstъ^{S1} Grъkomъ. jako izbilo^{V2} (past.) more^{S2} Rusъ. i poslavъ^{V3} (Prt.pt.) c<a>rъ imenemъ Monomachъ^{S3} po Rusi. olēdii 14. Volodimerъ^{S4} že → viděvъ^{V5} (Prt.pt.) s družinoju. jako idut^{V6} (pr.3pl.) po nemъ. vьspētivъse^{V7} (Prt.pt.) ← izbi^{V4} (aor.3sg.) olēdi Grečъskyja. [154-18] 「海が^{S2}ルシを打ち滅ぼした^{V2}という報せが^{S1}グレキのもとにもたらされた^{V1}ので、モノマコスという名の皇帝が^{S3}ルシを追って14隻の船を送った^{V3}。ヴラヂミルは^{S4}（彼らが）、自分たちを追って来る^{V6}のを従士団と共に見て^{V5}引返し^{V7}、グレキの船を打ち壊した^{V4}」。さらには上で数量的調査の対象から外すとした「分詞—名詞—一定動詞」という配列であっても、名詞と後続の定動詞の間に接続詞i “and” が現れたり、あるいは先行する分詞の目的語が現れて名詞句を定動詞から引き離すときは、例外的に、この名詞句を先行する分詞の主語として解釈せざるを得なくなる。例えば、ii) prinikъši^{V1} (Prt.pt.) Olyga^{S1} i reč<e>^{V2} (aor.3sg.) imъ [56-26] 「オリガは^{S1}身を屈め^{V1}、そして彼らに言った^{V2}」、iii) slyšavъ^{V1} (Prt.pt.) že Jaroslavъ^{S1} volchvy. pride^{V2} (aor.3sg.) Suzdalju. [147-29] 「ヤロスラフは^{S1}占師たちのことを聞いて^{V1}スズダリにやって来た^{V2}」といった場合である。

- Olena. jakože i drevněja c<a>r<i>ce. m<a>ti Velikago Kostěntina. [i] bl<a>g<o>s<lo>vi^{V22} (aor.3sg.) ju p<a>tr<i>arch^{S22} i otpusti^{V23} (aor.3sg.) ju. i po kr<e>št<e>ny^{V24} (aor.3sg.) ju c<a>r^{S24} i reče^{V25} (aor.3sg.) ei “choštju tę pojati sobě ženě.” ona^{S26} že reč<e>^{V26} (aor.3sg.) “kako chočeši mę pojati kr<e>st^{V26} mę samъ. i narekъ mę tъšterъju. a [vъ] ch<r>es<ti>janechъ togo nēs<tъ> zakona a ty samъ věsi.” i reč<e>^{V27} (aor.3sg.) c<a>r^{S27} “perekljukala mę esi Oľga.” i dastъ^{V28} (aor.3sg.) ei dary mnogi zlato i srebro. pavoloki i sъsudy različnyja. i otpusti^{V29} (aor.3sg.) ju narekъ^{V30} (Prt.pt.) ju dъšterъju sobě. ona^{S31} že → chotęšti^{V32} (Prt.pr.) domovi. ← pride^{V31} (aor.3sg.) kъ patrearchu bl<a>g<o>s<lo>v<e>nъja prosešti^{V33} (Prt.pr.) na domъ. i reč<e>^{V34} (aor.3sg.) emu “ľjudъe moi pagani i s<y>nъ moi. daby mę B<og>ъ sъbljulъ ot vsękogo zla.” i reč<e>^{V35} (aor.3sg.) p<a>tr<i>arch^{S35} “čado věrhoě vo Kr<es>ta kr<e>stilasę esi i vo Kr<e>sta oblečesę. Ch<risto>sъ imatъ schraniti tę. jakože schrani Enocha v pervyja rody. i potomъ Noja v kovčezě. Avrama ot Avimelecha. Lota ot Sodomľenъ. Moiseja ot Faraona. D<a>v<y>da ot Saula 3 otroci ot pešti. Danila ot zvěrii. tako i tę izbavitъ. ot neprijazni. i ot sětii ego.” [i] bl<a>g<o>s<lo>vi^{V36} (aor.3sg.) ju patrearch^{S36}. i ide^{V37} (aor.3sg.) s miromъ vъ svoju zemľju. i pride^{V38} (aor.3sg.) Kievu. [60-25]
- b. V1S1-V2-V3S3-V4S4-V5-V6S6-V7-S8žeV8 [V9] V10S10-V11-V12-V13S13-V14-V15-S16žeV16 [V17] V18-V19-V20-V21žeS21-V22S22-V23-V24S24-V25-S26žeV26-V27S27-V28-V29-V30-S31žeV31 [V32] V33-V34-V35S35-V36S36-V37-V38.
- c. 6463 (955) 年 オリガ^{S1}はグレキ (の国) へ行き^{V1}、コンスタンティノーブルに着いた^{V2}。当時イオアンネス (1世) ツィミスケスという名の皇帝が^{S3}いた^{V3}。オリガ^{S4}は彼のもとへ行つた^{V4}。皇帝は^{S6}、彼女の顔が非常に美しく聡明であるのを見^{V5}、彼女の知恵に驚き^{V6}、彼女に話しかけて^{V7}言った^{V7}「お前は私たちと共にこの町で治めるのに相応しい」。すると彼女は^{S8}意味を悟つて^{V9}皇帝に言った^{V8}「私は異教徒です。もしあなたが私に洗礼を受けさせようとするなら、自分で私を洗礼して下さい。そうでなければ私は洗礼を受けません」。皇帝は^{S10}総主教と共に彼女を洗礼した^{V10}。(オリガは) 洗礼を受け^{V11}心も身も喜んだ^{V12}。総主教は^{S13}彼

女に信仰について教え^{V13}、言った^{V14}「お前はルシの〔女たちの〕中で祝福されている。光を愛し闇を捨てたのだから。ルシの子らはお前の孫の末までお前を祝福するであろう」。そして教会の法規について、祈りと精進について、施しと身体を清浄に保つことについて彼女に教えた^{V15}。すると彼女は^{S16}頭を垂れ^{V17}、まるで水を吸う海綿のように教えを聞きながら^{V18}立っていた^{V16}。彼女は総主教に頭を下げ^{V19}、言った^{V20}「猊下よ、あなたの祈りにより、悪魔の網から私が護られますように」。彼女の洗礼名は^{S21}、いにしへの皇后、大帝コンスタンティヌス（1世）の母のようにヘレナと呼ばれた^{V21}。総主教は^{S22}彼女を祝福し^{V22}、彼女を行かせた^{V23}。洗礼の後、皇帝は^{S24}彼女を呼び^{V24}、彼女に言った^{V25}「私はお前を自分の妻に迎えたいと思う」。すると彼女は^{S26}言った^{V26}「私に自分で洗礼し、私を娘と呼びながら、あなたが私を娶ろうというのですか。キリスト教徒の中にはそのような掟はありません。あなた自身をご存じでしょう」。皇帝は^{S27}言った^{V27}「私を（見事に）欺いたな、オリガよ」。そして彼女に多くの贈物、黄金と銀、錦と種々の器物を与え^{V28}、自分の娘と呼んで^{V30}、彼女を行かせた^{V29}。そこで彼女は^{S31}故郷に（帰ろうと）して^{V32}総主教のもとに行き^{V31}、故郷へ（の旅）の祝福を願い^{V33}、彼に言った^{V34}「私の民は異教徒で私の息子も（そうです）。神が私をあらゆる悪よりお守り下さいますように」。総主教は^{S35}言った^{V35}「信仰篤い子よ、（お前は）キリストにおいて洗礼を受け、キリストを身にまといました。キリストはお前を守って下さるでしょう。ちょうど（神が）太初にエノクを、また後に箱舟のノアを（守り）、アブラハムをアビメレクから、ロトをソドムの人々から、モーセをファラオから、ダビデをサウルから、3人の少年を炉から、ダニエルを獣から守ったように、そのようにお前を悪魔とその網から救って下さるでしょう」。総主教は^{S36}彼女を祝福し^{V36}、彼女は心安らかに自分の国に向かい^{V37}、キエフに着いた^{V38}。

- (2) a. se že bys<tb>^{V1}(aor.3sg.) jakože pri Solomaně. pride^{V2}(aor.3sg.) c<a>r<i>ca^{S2}
 Ефиопская к Solomonу. слышати хотеѣшти^{V3}(Prt.pr.) pr<e>m<u>dr<os>ti Solomani.
 i mnogu m<u>drostь vidě^{V4}(aor.3sg.) i znamenъja. takože i si bl<a>ž<e>na-

ja Olga^{S5} iskaše^{V5} (impf.3sg.) dobroě m<u>dr<o>sti B<o>žbi. no ona
 č<e>l<o>v<ě>č<e>ski. a si B<o>žja. ištjušti^{S6} bo m<u>dr<o>sti obrěštjut^{V6}
 (pr.3pl.)¹⁰. «pr<e>m<u>drostь na ischodištichъ poetsę. na putechъ že
 deržnovenie voditъ. na kraichъ že zabraľnychъ propovędaetъ. vo vratěchъ že
 gradnychъ. derzajušti g<lag>l<e>tъ. eliko bo lětъ zlobivi¹¹ deržatsę po pravdu.»¹²
 si bo ot vъzrasta bl<a>ž<e>naja Olga^{S7}. iskaše^{V7} (impf.3sg.) m<u>dr<o>s<t>ьju.
 vse vъ světě semъ. nalěze^{V8} (aor.3sg.) biserъ mnogocěnnychъ. eže estъ¹³
 Ch<ri>s<to>sъ. reč<e>^{V9} (aor.3sg.) bo Solomanъ^{S9} želanye.
 bl<a>g<o>v<e>m<y>chъ naslaženi d<u>šju. «i priložiši vъ s<e>r<d>ce tvoe v
 razumъ»¹⁴ «azъ ljubęštaja mę ljubľju. i ištjuštii mene obrěštjutъ mę.»¹⁵

- 10 Šachmatov (1916: 72) は ištjušti^{S6} bo m<u>dr<o>sti obrěštjut^{V6} の部分を「箴言」8.17の引用とする。しかし必ずしも正確な引用とは言えないので、ここでは引用としては扱わなかった。
- 11 ラヴレンチー写本では zlobivi という形が現れているが、Ip. では nezlobivii。Lichačev (1996: 30) は nezlobivii、Šachmatov (1916: 72) も nezlobivii とする。ここでも意味はこれらに従う。
- 12 「箴言」1.20-22。
- 13 関係代名詞主格で始まる従属節については構造上語順が固定していると考えられるので、語順に関する数量的な分析からは除く。これを含めて、『過ぎし年月の物語』については次の場合を語順に関するデータから除く。1. 構造上主語の位置が固定している節：a. 主語が関係節化された関係節。2. 構造上主語が存在しない節：a. 動詞が3人称複数形を取り、主語を持たない節、いわゆる不定人称文、b. 無人称文。3. 主語を持ちうるが意味的・語用論的な要因が語順に影響を与える可能性のある場合：a. 命令法、および接続詞 da と動詞直説法による合成的命令形（これらは古ロシア語では明示的主語を持ちうるが、議論を過度に複雑にしないためデータから省いた）。4. 語順を確定できない場合：a. 「分詞—名詞—一定動詞」の順で配列され、名詞が分詞の明示的主語であるか一定動詞の主語であるか確定できない場合。5. 動詞の性格が弱い分詞：a. 分詞が名詞として使用されている場合、b. 名詞の修飾語として使用されている場合、c. 化石化した表現として挿入語的に使用されている場合。6. その他の場合：a. 単独で命令法の代用として使用されている不定詞、目的を表す不定詞、supinum、b. 意味上の主語が与格で現れる不定詞構文、その他少数の不定詞を使った構文。7. a. 以上1～6の理由でデータから外した上記の諸形式に付随して現れる分詞、b. 不定詞を支配する定動詞＋不定詞からなる構造で不定詞に付随して現れる分詞。以上の理由で統計的データから外したのは、数量的調査の対象となった98コラム中で745の節である。(7) の表Iについての注36を参照。詳細は佐藤 (2005: 69ff.) を参照。また『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』に関しては、注103および139を参照。
- 14 「箴言」2.2。

G<o>s<pod>^{S10} reč<e>^{V10} «prichodeštaja ko mně ne iženutъ vonъ.»¹⁶ . [62-8]

b. V1-V2S2-V3-V4-S5V5-S6V6-S7V7-V8-V9S9-S10V10

- c. これはソロモンの時代にあったのと同じである^{V1}。エチオピアの女王が^{S2}ソロモンの知恵を聞こうとして^{V3}ソロモンのもとにやって来て^{V2}、多くの知恵と（その）証を見た^{V4}。そのようにこの祝福されたオリガ^{S5}もまた、神のよき知恵を求めている^{V5}。しかも彼女の女は人間の（知恵を求めた）が^{S6}、この女（オリガ）は神の（知恵を求めたのである）。知恵を求める者は^{S6}見出すのである^{V6}。《知恵は戸口で唱われ、通りでは大胆に声をあげ、城壁の端で教えを述べ、町の門では大声に述べる。善い人はどれほどの年月義に従って振舞っていても、恥じることがない。》この祝福されたオリガは^{S7}、成人して以来この世の中のあらゆる知恵を求めていたが^{V7}、高価な真珠、すなわちキリストを手に入れたのである。またソロモンは^{S9}言った^{V9}、信仰篤い者の願いは心を楽しませる。《あなたの心を悟りに向けて下さい。》《私は私を愛する者を愛し、私を求める者は私に会うであろう》と。主は^{S10}言われた^{V10}《私のもとに来る者を私は決して拒みはしない》。

この後再び次の (3) に示す事実叙述タイプのテキストが現れて、歴史的出来事の叙述が始まる

- (3) a. Si že Olъga^{S1} pride^{V1} (aor.3sg.) Kievu i prisla^{V2} (aor.3sg.: CompSp.aor.3sg.) k nei c<a>гъ^{S2} Grečъskii g<lago>lę^{V2'} (Prt.pr.). jako “mnogo darichъ tę. ty bo gl<agola>še ko mně. jako “ašte vozъvraštјusę v Rusъ. mnogi dary prislju ti čelędъ. vosкъ. i sъkru. i voi vъ pomošť.” otvēštavši^{V3} (Prt.pt.) Olъga^{S3} i reč<e>^{V3'} (aor.3sg.: CompSp.aor.3sg.) kъ slomъ . “ašte ty rъci takože postoiši u mene v Počaině jakože azъ v Sjudu to togda ti damъ.” i otpusti^{V4} (aor.3sg.) sly sъ rekъši^{V5} (Prt.pt.).
- b. このオリガが^{S1}キエフに着くと^{V1}、グレキの皇帝は^{S2}彼女のもとに使いを寄越して言った^{V2}「私は多くのものをお前に贈った。お前が私にこう言ったからである、

15 「箴言」 8.17。

16 「ヨハネ」 6.37。

『もし私がルシに戻ったならば、多くの贈物、すなわちチェリヤヂ、蠟、毛皮、および援軍をあなたに送らしましょうと』と」。オリガは^{s3}使者たちに答えて言った^{v3}「こう言いなさい、『もし私が金角湾（にとどまったの）と同じように、私の国のポチャイナ（川）に（来て）留まるならば、私はあなたに与えましょう』と」。 （オリガは）こう言って^{v5}使者を行かせた^{v4}。

例 (1) や (3) を見ても分かる通り、事実叙述のテキスト部分では、しばしば登場人物の言葉がそのまま引用され、描写に臨場感を与える。(1) に現れる登場人物の言葉を抜き出せば次のようになる。

- (4) a. A. “podobna esi^{v1} (pr.2sg.) c<a>r<s>tv<ova>ti vъ grad<ě> s nami.”
- B. “azъ^{s1} pogana esmъ^{v1} (pr.1sg.). da ašte mę chošēši^{v2} (pr.2sg.) kr<e>s<ti>ti. to kr<e>st<i> mę samъ. ašte li to ne kr<e>štjuse^{v3} (pr.1sg.).”
- C. “bl<a>g<o>s<ove>na^{v1} (Prt.P.pt.) ty^{s1} v [ženach] Ruskich. jako vozljubi^{v2} (aor.2sg.) svěť. a tьmu ostavi^{v3} (aor.2sg.). bl<a>g<o>s<lo>v<i>ti tę chotěť^{v4} (pr.3pl.) s<y>n<o>ve^{s4} Rustii. [i] v poslědnii rodъ vnukъ tvoich.”
- D. “m<o>l<i>tv<a>mi tvoimi vl<a>d<y>ko. da schranena^{v1} (Prt.P.pt.) budu^{v1} (pr.1sg.: AnP.ft.1sg.) ot sěti neprijazny.”
- E. “choštju^{v1} (pr.1sg.) tę pojati sobě ženě.”
- F. “kako chočeši^{v1} (pr.2sg.) mę pojati kr<e>stъ^{v2} (Prt.pt.)¹⁷ mę samъ^{s2}. i narekъ^{v3} mę tьšterъju. a [vъ] ch<r>es<ti>janechъ togo^{s4 18} nēs<tъ>^{v4} (pr.3sg.) zakonа a ty^{s5} samъ věsi^{v5} (pr.2sg.).”
- G. “perekljukala^{v1} (l-prt.) mę esi^{v1} (pr.2sg.: pf.2sg.) Olga.”
- H. “ljudъe moi pagani i s<y>nъ moi. daby mę B<og>ъ^{s1} sъbljulъ^{v1} (Prt.2pt: Cond.3sg.) ot vsěkogo zla.”
- I. “čado věrhoě vo Kr<es>ta kr<e>stilasъ^{v1} (l-prt.) esi^{v1} (pr.2sg.: pf.2sg.) i vo

17 Lichačev (1996: 29) で krestivъ、Šachmatov (1916: 70) でも krъstivъ。

18 存在否定の生格形は明示的な主語として扱うことにする。

Kr<e>sta oblečese^{v2} (aor.2sg.). Ch<isto>sъ^{s3} imatъ^{v3} (pr.3sg.) schraniti tę. jakože schrani^{v4} (aor.3sg.) Enocha v pervyja rody. i potomъ Noja v kovčezě. Avrama ot Avimelecha. Lota ot Sodomlęnъ. Moiséja ot Faraona. D<a>v<y>da ot Saula 3 otroci ot pešti. Danila ot zvěrii. tako i tę izbavitъ^{v5} (pr.3sg.). ot neprijazni. i ot sětii ego.”

b. A. V1

B. S1V1-V2-V3

C. V1S1-V2-V3-V4S4

D. V1

E. V1

F. V1-V2S2-V3-S4V4-aS5V5

G. V1

H. S1V1

I. V1-V2-S3V3-V4-V5

c. A. 「お前は私たちと共にこの町で治めるのに相応しい^{v1}」

B. 「私は^{s1} 異教徒です^{v1}。もしあなたが私に洗礼を受けさせようとするなら^{v2}、自分で私を洗礼して下さい。そうでなければ私は洗礼を受けません^{v3}」

C. 「お前は^{s1} ルシの [女たちの] 中で祝福されている^{v1}。光を愛し^{v2} 闇を捨てた^{v3} のだから。ルシの子らは^{s4} お前の孫の末までお前を祝福するであろう^{v4}」

D. 「猊下よ、あなたの祈りにより、悪魔の網から私が護られますように^{v1}」

E. 「私はお前を自分の妻に迎えたいと思う^{v1}」

F. 「私に自分で^{s2} 洗礼し^{v2}、私を娘と呼びながら^{v3}、あなたが私を娶ろう^{v1} とい
うのですか。キリスト教徒の中にはそのような掟は^{s4} ありません^{v4}。あなた自
身が^{s5} ご存じで^{v5} でしょう」

G. 「私を（見事に）欺いたな^{v1}、オリガよ」

H. 「私の民は異教徒で私の息子も（そうです）。神が^{s1} 私をあらゆる悪よりお守
り下さい^{v1} ますように」

I. 「信仰篤い子よ、（お前は）キリストにおいて洗礼を受け^{v1}、キリストを身に

まといました^{V2}。キリストは^{S3}お前を守って下さるでしょう^{V3}。ちょうど（神が）太初にエノクを、また後に箱舟のノアを（守り）、アブラハムをアビメレクから、ロトをソドムの人々から、モーセをファラオから、ダビデをサウルから、3人の少年を炉から、ダニエルを獣から守った^{V4}ように、そのようにお前を悪魔とその網から救って下さるでしょう^{V5}」

これは、当時の話し言葉の特徴を伝えると考えられるので、地の文からは区別して扱い、「直接引用」タイプと名付けることにする。一方コメントタイプのテキストでは、年代記作者の立場を補強するために、聖書からの引用が多く行われる。例文 (2) では「箴言」1.20-22.、「箴言」2.2.、「箴言」8.17.、「ヨハネ」6.37という4つの引用が見られる。これについてもコメントタイプのテキストの地の文からは区別して「聖書引用」タイプという独立のタイプを立てる必要がある。従って、全体としては (5) に示すように4つのタイプを区別することになる。この中で、聖書引用タイプについては独立性が高いので、ここでは議論の対象から外す¹⁹。

(5) 『過ぎし年月の物語』における4つのテキストタイプ

「事実叙述」タイプ

「コメント」タイプ

「直接引用」タイプ

「聖書引用」タイプ

動詞の時制に注目すると、(1) や (3) を見ると分かる通り、事実叙述タイプのテキストでは一貫してアオリストや未完了過去および大過去といった過去形が使用されている。これに対して、コメントタイプのテキストでは、現在形と過去形の両方が使用され、未来（完了体動詞現在形）も現れる²⁰。このことは上の (2) の例からは必ずしも明

19 これについては佐藤 (2005) の6章を参照。

20 その意味で、ここでの事実叙述タイプのテキストはワインリヒの言う「語りの時制群」（すなわち過去の諸形式）からなる「語りのテキスト」と一致する。しかしコメントタイプのテ

瞭ではないが、次の969年の記事の一部を見ると明らかになる。これはオリガが死んだ後のコメントである。直接引用の中に現れる例、また *ize* で導かれる従属節中に現れる例とは別に、アオリスト、未完了過去に加え、現在が6回、現在完了が1回使用されている²¹。

- (6) a. *si*^{S1} *bys<тъ>*^{V1} (aor.3sg.) *predъtekuštija kr<es>тъjanъstěi zemli. aki denъica predъ s<o>lnc<e>мъ. i aki zore predъ svѣtomъ. si*^{S2} *bo sьjaše*^{V2} (impf.3sg.) *aki luna v nošti. tako i si*^{S3} *v nevѣrnychъ č<e>l<o>v<ě>c<e>chъ svѣtѣštesę*^{V3} (Prt.pr.). *aki bisery v kalě. kalъni bo běša*^{V4} (impf.3pl.) *grěch*²². *ne omoveni*^{V5} (Prt.P.pt.) *kr<e>št<e>n<ьe>мъ s<vja>t<y>мъ. si*^{S6} *bo omysę*^{V6} (aor.3sg.) *kupělъju s<vja>toju. i sovlečesę*^{V7} (aor.3sg.) *grěchovnoju odeževъ vetchago č<e>l<o>v<ě>ka Adama. i vъ novyi Adamъ oblečesę*^{V8} (aor.3sg.) *eže estъ Ch<risto>s. my*^{S9} *že rcēmъ*^{V9} (pr.1pl.) *k nei. “rad<u>isę Ruskoe poznanъe. kъ B<og>u načatokъ primirenъju primirenъju*²³ *bychomъ* (aor.1pl.).” *si*^{S10} *pervoe vnide*^{V10} (aor.3sg.) *v c<a>rstvo n<e>b<e>snoe ot Rusi. siju bo chvaletъ*^{V11} (pr.3pl.) *Rustie s<y>n<o>ve*^{S11}. *aki načalnicju. ibo po sm<e>rti molęše*^{V12} (impf.3sg.) *B<og>a za Rusъ. pr<a>v<e>dn<y>chъ bo d<u>ša*^{S13} *ne umirajutъ*^{V13} (pr.3pl.). *jakože reč<e>*^{V14} (aor.3sg.) *Solomanъ*^{S14}. «*pochvala*²⁴ *pr<a>v<e>dn<o>mu vъzveseletsę ljudъe.*»²⁵ *b<e>ssm<e>rtъe bo estъ*^{V15} (pr.3sg.) *pamętъ ego*^{S15}. *jako ot B<og>a poznavаетсę*^{V16} (pr.3sg.) *i ot č<e>l<o>v<ě>kъ. se bo vsi č<e>l<o>v<ě>ci*^{S17} *proslavljętъ*^{V17}

クストは「説明の時制群」(すなわち現在の諸形式)だけでなく「語りの時制群」をも同じように含み、彼の言う「説明のテキスト」とは一致しない。cf. Weinrich (1977: 翻訳書20)。それゆえ、ここで新たにコメントタイプという名称を提案した。

21 分詞はいずれのタイプにも現れる。

22 Ip. にある *grěchom* という形に従って読む。

23 *primirenъju* が2回書かれているが、これはラヴレンチー写本における写し間違いである。

24 カールスキー校訂版の脚注には「意味的には Ip. および Chl. にある *pachvaljaemu* という形が要求される」とある。Lichačev (1996: 32)、Šachmatov (1908: 549)、同 (1916: 80) も同じ形を示す。ここでの訳もこれに従った。

25 「箴言」29.2

(pr.3pl.) viděšta^{V18} (Prt.pr.) ležastaja²⁶ v tělē na mnoga lēt<a>. reč<e>^{V19} (aor.3sg.)
 bo pr<o>r<o>kъ^{S19} «proslavlejuštaja mę proslavlju.»²⁷ o sękovych bo D<a>v<y>dъ^{S20}
 gl<agola>še^{V20} (impf.3sg.) «v pamęt<ъ> [večnuju]. pr<a>v<e>dn<i>kъ budetъ.²⁸ ot
 slucha zla ne uboitse. gotovo s<e>r<d>ce ego upovati [na] G<o>s<pod>a.
 utverdisę s<e>r<d>ce ego i ne podvižetse.»²⁸ Solomanъ^{S21} bo reč<e>^{V21} (aor.3sg.)
 «pr<a>v<e>dn<i>ci vъ vęki žiutъ²⁹ i ot G<ospod>a mъzda imъ estъ. i stroenie ot
 Vyšnego. sego rad<i> priimutъ c<a>rstvie krasotě. i vęnecъ dobrotě ot
 ruki G<o>s<od>neę. jako desniceju pokryetъ ja. i myšceju zaštititъ ja.»³⁰ zaštititъ^{V22'}
 (l-prt.)³¹ bo estъ^{V22} (pr.3sg.: pf.3sg.) siju bl<a>ž<e>nu Volъgu. ot protivnika i
 supostata dъjavola. [68-2]

b. S1V1-S2V2-S3V3-V4-V5-S6V6-V7-V8-S9V9-S10V10-V11S11-V12-S13V13-V14S14-
 V15S15-V16-S17V17-V18-V19S19- S20V20-S21V21-V22

c. この女（オリガ）は^{S1}日の出前の明星のように、夜明け前の空焼けのようにこの
 キリスト教の国にとっての先駆者であった^{V1}。この女は^{S2}ちょうど夜の月のよう
 に輝いていた^{V2}。この女は^{S3}神を信じない人々の中であって泥の中の真珠のよう
 に光を放っていた^{V3}が、（人々は）罪にあって泥にまみれていて^{V4}、聖なる洗礼
 によって罪から清められていなかった^{V5}。この女こそは^{S6}聖なる洗礼盤によって
 清められ^{V6}、古き人アダムの罪深い衣を脱ぎ^{V7}、キリストである新しいアダムを
 身にまとった^{V8}のである。我々は^{S9}彼女に向かって言おう^{V9}、「喜びなさい、ルシ
 が神を知ったことを。（私たちが）神との和解の始まりとなったのです」と。こ
 の女は^{S10}初めてルシから天国に入った^{V10}。この女をルシの子たちは^{S11}先達とし
 て讃えている^{V11}。死後も（彼女が）ルシのために神に祈っている^{V12}からである。

26 Lichačev (1996: 33), Šachmatov (1916: 82) はともに ležastju という形を示す。これに従って読む。

27 「サムエル記上」2.30。

28 「詩篇」112.6-8 (70人訳111.6-8)。

29 R. A. にある živutъ という形に従って読む。

30 外典「ソロモンの知恵」5.15-16。

31 zaštititъ はそのまま読めば pr.3sg. であるが、R. A.: zaštitilъ, Lichačev (1996: 33): zaštitilъ, Šachmatov (1916: 81): zaštitilъ に従って l-prt. として理解する。.

正しい者の魂は^{S13}死なない^{V13}。ソロモンは^{S14}言った^{V14}《讃えられる正しい者を人々は喜ぶ》。神と人々によって認められる^{V16}のであるから、その思い出は^{S15}不死である^{V15}。永年にわたり肉体の中に（正しい者の心）があるのを見^{V18}、このことをすべての人は^{S17}讃えている^{V17}。預言者は^{S19}言った^{V19}《私を尊ぶ者たちを私は尊ぶ》。このような者たちについてダビデは^{S20}言っている^{V20}《正しい者は〔永遠に〕記憶されるであろう。彼は悪いおとずれを恐れず、その心は主に信頼してゆるがない。その心は落ちついて恐れることがない》。またソロモンは^{S21}言った^{V21}《正しい者は永遠に生き、彼らには主の報いといと高き者の助けがある。この故に（正しい者は）美しい天国と善の冠を主の手より受ける。（主は）右手で彼らを覆い、腕で彼らを守られる》。（神は）この至福なオリガを、敵であり対抗者である悪魔から守られた^{V22}のである。

このようにコメントタイプのテキストでは優勢な時制は存在しない。

1.2. 事実叙述タイプとコメントタイプのテキスト部分の特徴

上のように、時制形式の分布により事実叙述とコメントタイプという2つの主要なタイプを分けた上で、それぞれを注意深く観察してみると、語順と指示代名詞といった筋道の通った談話、結束的なテキストを作るための言語手段の使用についても、この2つのタイプのそれぞれが固有の特徴を持っていることに気付く。

1.2.1. 語順について

まず語順については、事実叙述タイプでは(1)のbを見て分かる通り、主語が省略されVだけになる節を別とすれば、VS語順の節が圧倒的に多い。現代ロシア語の基本語順がSVであるのに対し、このタイプのテキストではVSが基本語順であるかのように見える。そして時折現れるSV語順の節では、ona^{S8} že ... reč<e>^{V8}「彼女は…言った」ona^{V16} že ... stojaše^{V16}「彼女は…立っていた」、ona^{S31} že ... pride^{V31}「彼女は…行った」のように、すべて主語に小詞žeが付加されている。žeはそれが付加された要素を強調する。結果としてここでは主語の交替が強調されることになる。このようなSV語順の節を、žeを伴わない単純なSV語順の節と区別してSzeV構文と呼ぶことにする³²。単純

なVS語順の節、および主語が省略されたVだけからなる節が連続して現れることにより事件の流れがスピーディーに語られる。そして、そこにSzeV構文が適当な間隔をおいて現れ、その流れを止めることにより語りにアクセントを与え、リズム感のある語りを作っていくのである³³。

ここでは語順は、現代語のように談話の情報構造あるいは文のテーマ・レーマ構造によって決まるのではなく、いわば様式化された「語りのスタイル」によって規定されていることになる。一方、コメントタイプのテキストでは現代語と同じ単純なSVが基本語順である。(2) b. や (6) b. を見ると分かるように、事実叙述タイプに頻出したSzeV構文はほとんど現れない。ここでは語順は、現代語と同じく機能的に選択され、決定していると推定される。すなわちコメントタイプのテキストは、語順に関して言えば、特別な文体ではなく、ごく普通の日常的言語に近い言葉で書かれているように見える。以上の観察は後述の数量的調査によっても裏付けられる。

1.2.2. 指示代名詞の使用について

指示代名詞³⁴については、事実叙述タイプの特徴として(1)の例にも見える通り、遠称の指示代名詞 *онъ* のSzeV構文での使用が注目される。*онъ* は事実上SzeV構文の主語として現れる場合に限られる。そのことから *онъ* の使用はこの様式化した語りのスタイルを構成する要素となっていると考えられる。SzeV構文は主語の交代を示す。その構文に主語として現れる代名詞 *онъ* の「遠称」という意味は、直前の節の主語ではな

32 ここには現れないがVS語順でかつVの直後に小詞 *že* が現れる節を単純なVS語順の節から区別してVzeS構文と呼ぶことにする。

33 Borkovskij (ed.) (1983: 132) によれば、この *že* はそれぞれの節の先頭の語の後に付加されて「(この語を) 強調し、この *že* を含む当該の節と先行するテキストの間の意味的(テキスト的)関係がどのようなものであるかを明確にすることを助ける。通常 *že* は、この位置で行為の主体、時、場所といったテキストの連結性 (*tekstovye svjazi*) に関与する意味上の連続性が壊れる(中断される)ことを示す。これにより、*že* によって結び付けられた節とこれに先行するテキストの間の意味上の対立が生じる」という。

34 現代ロシア語では照応形として3人称の人称代名詞 (*он/ono/она* 「彼/それ/彼女」)、および指示代名詞 (*этот/это/эта* 「この(単数・男性/中性/女性)」) が使用される。一方、古ロシア語では3人称の人称代名詞は十分に発達しておらず、代わりに指示代名詞が使われていた。これには近称 (*сѣ/se/si* 「この(単数・男性/中性/女性)」) と遠称 (*онъ/ono/она* 「あの(単数・男性/中性/女性)」) 、そして中立的な指示代名詞 (*тѣ/to/та* 「その(単数・男性/中性/女性)」) の3種類がある。*онъ* 系列の遠称の指示代名詞が現代語の人称代名詞の起源である。

く、先行文脈の中でより遠くにある節の主語を承けるという意味で、テキスト上の距離の遠さを示すことになる³⁵。

一方コメントタイプのテキストでは近称の指示代名詞 *sb* の使用が特徴的である。ここではコメントの対象となる人物、すなわち当該の文脈における最も重要な登場人物をこの *sb* で指示する。例 (2) の *si bl<a>ž<e>naja Olga*^{S5} *iskaše*^{V5} (impf.3sg.) *dobroě m<u>dr<o>sti B<o>žbi*. 「この祝福されたオリガもまた、神のよき知恵を求めている」、*si bo ot vžrasta bl<a>ž<e>naja Olga*^{S7} *iskaše*^{V7} (impf.3sg.) *m<u>dr<o>s<t>ju*. 「この祝福されたオリガは、成人して以来…知恵を求めているが」に現れる *Olga* を修飾する *si*、例 (6) の *si*^{S1} *bys<tb>*^{V1} 「この女は…であった」、*si*^{S2} *bo sbjaše*^{V2} 「この女は…輝いていた」、*si*^{S3} *v nevěrychъ č<e>l<o>v<ě>c<e>chъ svěťšesě*^{V3} 「この女は神を信じていない人々の中であって…光を放っていた」、*si*^{S6} *bo omysě*^{V6} 「この女こそは…清められ」、*si*^{S10} *pervoe vnide*^{V10} 「この女は初めて…入った」において名詞を伴わず単独で主語として現れる *si* (女性・単数) である。一方、もし遠称の *onъ* が現れた場合には、これはコメントの対象となる人物以外の副次的登場人物、あるいはコメントの文脈中でこれと比較・対照される他の人物—例えば聖書上の人物等—を指示するために使用される。例 (2) で動詞を持たない不完全な文 *no ona č<e>l<o>v<ě>č<e>ski. a si B<o>žja*. 「しかし彼の女は人間の (知恵を求めた) が、この女 (オリガ) は神の (知恵を求めたのである)」の中で使用されている *ona* (女性・単数) は聖書に現れるシバの女王を指し、*si* の方はコメントの対象たるオリガを指している。指示代名詞の近称、遠称の違いはテキスト上の距離ではなく、話者あるいは聞き手と指示対象の心理的な距離の違いを表す。その意味で、コメントタイプのテキスト中における指示代名詞の使用は、むしろ直示的な使用に近いと言えよう。

1.2.3. 数量的調査

このような事実叙述とコメントタイプのテキストの違いは、数量的な調査によって

35 Borkovskij (1968: 197) も、イパーチ一年代記においてこの遠称の指示代名詞が、直前に挙げられた名詞ではなく、より離れたところにある名詞を代用する例があることを指摘している。この遠称の指示代名詞の、直前の節の主語名詞句を代用するという用法、すなわち現代語の3人称人称代名詞と同じ用法が広まったのは15～16世紀のことであったという。

も確かめられる。次の (7) の表は『過ぎし年月の物語』全体の約3分の1について³⁶、語順と指示代名詞の使用を調べた結果である。事実叙述、コメントおよび直接引用という3つのタイプに分けて、明示的な主語を持つ5つの語順、構文 (SV、SzeV、aSV、VS、VzeS) の出現について調べた結果である。その際、主語として遠称の指示代名詞 *онѣ* が現れる場合と近称の *сѣ* の現れる場合についても調査した。すなわち、それぞれの数字の右肩の小数字は主語として遠称の *онѣ* が使用されている場合 (内数)、左下的小数字は近称の *сѣ* が使用されている場合 (内数) を示す。

(7) 表 I. 『過ぎし年月の物語』における語順、指示代名詞とテキストタイプ

	事実叙述		コメント		直接引用			
					1/2 人称		3 人称	
	主節	従属節	主節	従属節	主節	従属節	主節	従属節
	グラフ A		グラフ B		グラフ C		グラフ D	
SV	₂ 104 ¹	₁ 34	₁₁ 75	₈ 68 ¹	29	15	₄ 47	₁ 22
SzeV	₁₁ 257 ⁴³	1	₇ 23	2	2	0	₁ 2	0
aSV	₁ 42	0	11	0	12	0	10	0
VS	₃ 370	₁ 57 ¹	₂ 46	₁ 55	5	2	₁ 30 ¹	₁ 40
VzeS	₁ 33	0	7	0	0	0	0	0
小計	₁₈ 806 ⁴⁴	₂ 92 ¹	₂₀ 162	₉ 125 ¹	48	17	₆ 89 ¹	₂ 62
V	1034	66	285	85	174	74	55	18
計	₁₈ 1840 ⁴⁴	₂ 158 ¹	₂₀ 447	₉ 210 ¹	222	91	₆ 144 ¹	₂ 80

機能的な要因、あるいは文体的な要因によって様々な語順が現れるとすれば、それはまず主節に現れるはずである。そこで主節と従属節を分けて数えた。さらに直接引用タイプについては1/2 人称と3 人称の場合を分けて調べた。1 人称、2 人称で現れる明示的な主語とは人称代名詞 *азъ* 「私 (1sg.)」や *ты* 「汝 (2sg.)」であり³⁷、これらが語順について特異的な振る舞いを見せる可能性も否定できないからである。

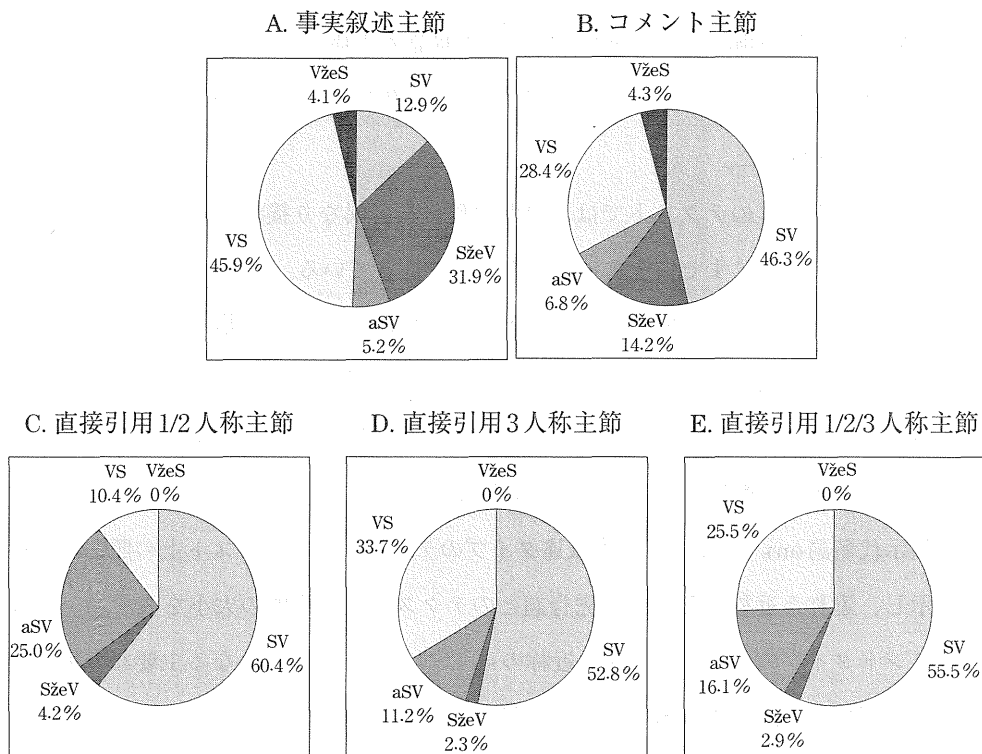
この表のなかから主節で明示的な主語を持つ場合について、その使用の内訳を図示

36 カールスキー校訂本テキストの中から14箇所、全286コラムの約3分の1、98コラムを抜き出して調査した。

37 ただし代名詞 *самъ* 「自ら」、*всѣ* 「すべて」が現れる場合も明示的な主語として扱った。

したのが(8)のグラフA～Dである。直接引用タイプのCとDを比べると、1/2人称のCと3人称のDは並行的なパターンを示しており、両者に本質的な違いは見られない。そこで直接引用についても人称による区別をしないこととし、1～3人称すべての場合を合計した数字にもとづいて描いたのがEのグラフである。

(8) 図I.『過ぎし年月の物語』における語順とテキストタイプ—主節の場合



この表およびグラフにより、語順と指示代名詞の使用について、上で文脈に基づいて観察した事実叙述タイプとコメントタイプの違いが統計的にもはっきりと確認できる。すなわち事実叙述タイプではVSが基本語順となり、次いでSzeVが現れる。現代語の基本語順と考えられるSVが現れる比率は低い。表Iから遠称の指示代名詞 *онъ* が使用されるのはSzeV構文の主語として現れる場合に限られることも確認できる。一方コメントタイプでは、現代語と同じSVが基本語順となっている。主語として現れる近称の指示代名詞 *sb* は、特に語順を選ぶことなく、好んで使われている。グラフA、BとEを比べると、語順に関してコメントタイプは、あたかも事実叙述タイプと直接引

用タイプの中に位置していることが分かる。

1.3. 1章の議論のまとめ

この章の議論は次のようにまとめることができる。

(9) 1章の議論のまとめ

- 1) 『過ぎし年月の物語』の言語をテキストの構造を考慮に入れて分析することとし、
a) 事実叙述、b) コメント、c) 直接引用、d) 聖書引用という4つのタイプのテキスト部分を区別した。
- 2) 事実叙述タイプのテキストでは、語順は現代語と異なり機能的に選択されるのではなく、文体的にすでに決まったパターンに従っている。VS語順の節が連続して起こりスピーディーに事件の生起を語るとともに、適宜SzeV構文が現れてその流れを中断し、語りにアクセントを付けるという様式化された語りのスタイルが見られる。一方、コメントタイプのテキストでは語順は自由であり、現代語と同じように機能的に選択されていると推定される。
- 3) 指示代名詞 *онъ* と *сѣ* は、事実叙述タイプのテキストではテキスト上の照応関係を示し、遠称と近称はそれぞれ先行詞とのテキスト上の距離の大小を表す。一方コメントタイプのテキストでは、近称の *сѣ* はコメントの対象となる主要な登場人物を直接指し、遠称の *онъ* はそれと対照される副次的な人物を指す。コメントタイプのテキストでは遠称と近称は心理的な場面における遠近を直接表すという意味で、直示的な指示に近い。
- 4) 事実叙述とコメントタイプのテキストはともに書き言葉であって、話し言葉の特徴を反映すると考えられる直接引用タイプのテキストと対立する。しかし、この3つのタイプを比べると、コメントタイプのテキストは事実叙述と直接引用タイプのいわば中間に位置する。

語彙的な特徴に着目すれば、具体的な人物、事件について述べた事実叙述タイプのテキスト部分は、本来の古ロシア語、共通東スラブ語で書かれている筈である。一方

コメントタイプは、聖書からの引用を多く含み、それゆえ全体として見れば、教会スラブ語的な要素を多く含む部分ということになる。しかし、ここで見た語順についての調査は、これとは反対の結果を示している。すなわち、事実叙述タイプのテキストは、直接引用タイプに見える東スラブの話し言葉とはもっとも異なっており、一方コメントタイプのテキストは、教会スラブ語からの影響にも拘わらず、地の文を取ってみれば東スラブの話し言葉により近いのである。事実叙述タイプのテキストにおけるVS語順の節とSzeV構文の交替による語りは東スラブ語本来の特徴を反映したものではなく、いわば様式化されたひとつの「語りのスタイル」ということになる。

2. 『コンスタンティノス伝』における語順と指示代名詞の使用³⁸

前章で見た『過ぎし年月の物語』のテキストの構造は他のスラブの文献にも見ることができののだろうか、そしてその事実叙述テキストにおける様式化された「語りのスタイル」は、どこにその起源を求めることができるのだろうか。この問いに答えを見つけることは決して容易ではないが、そこに至る一つの過程として、9世紀末に成立し、スラブ語で自由に書かれた著作の中で最も古い文献としての『コンスタンティノス伝』(Vita Constantini)³⁹、『メトディオス伝』(Vita Methodii)⁴⁰の言語について考えてみたい⁴¹。これはスラブ語を書き表すために文字を作り、聖書をスラブ語に翻訳して

38 本章の議論は *Žitija Kirilla i Mefodija* (1986). pp.41-134 所載 (ファクシミリ版: 43-92、転写テキスト: 94-130) の GBL (旧国立レーニン図書館) 所蔵 MDA (モスクワ神学アカデミー) 本 No.19 中の *Prostrannoje žitie Konstantina-Kirilla filosafo* にもとづいて行った。この写本は 15 世紀第 4 四半世紀のものでされ、伝統的により正しいテキストとされてきた。転写テキストの方にはかなりの誤記があるが、引用に際してはファクシミリ版によって確認、訂正した。

39 GBL 所蔵 MDA 本 No.19 (15 世紀後半) と Barsov 旧蔵本 No.619 (15 世紀初め) を始めとするロシア系の写本グループと Vladislav Grammatik による 2 つの写本 (1469 年、1479 年) を始めとする南スラブ系の写本グループ、計 48 点で伝えられる。Slovar' (1987: 155) 参照。邦訳注に木村・岩井 (1984)、同 (1985) がある。

40 *Uspenskij sbornik 12-13 vv.* 中の写本を代表とするロシア系 16 点の写本で伝えられる。Slovar' (1987: 162) 参照。邦訳注に木村・岩井 (1986) がある。

モラヴィア、パンノニアに伝道旅行をし、スラブ世界にキリスト教を伝えたテッサロニケ出身の2人のギリシア人、弟コンスタンティノス・キュリロス (Kōnstantinos Kyrillos)⁴² と兄メトディオス (Methodios) の生涯を記した伝記、聖者伝である。本章では『コンスタンティノス伝』、第3章では『メトディオス伝』について論じる。

『コンスタンティノス伝』は9世紀末、869年のキュリロスの死後比較的早い時期に成立したと考えられる。現存する写本の成立時期と場所により、厳密な意味での古教会スラブ語文献には含められないが⁴³、古スラブ語で書かれた資料として言語的にも、またその内容から言っても非常に重要である。著者は不詳であるが、スラブ人でキュリロスとメトディオスの弟子の一人と推定される⁴⁴。19世紀半ばに『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』の研究が始まった頃は、それらが当初ギリシア語で書かれ(そのテキストは現存しない)次いでスラブ語に翻訳されたという説が行われたが、その後、最初からスラブ語オリジナルの文献として成立したという説が次第に有力になってきた。またギリシア語オリジナル説を採る人の中にも A. D. Voronov のようにスラブ語テキストがギリシア語のかなり自由な訳であったと考える人もいる⁴⁵。また成立

41 近代以降『コンスタンティノス伝』の研究が始まったのは A. V. Gorskij が 1843 年に Moskvitjanin 誌にその解説とテキストの抜書き(『コンスタンティノス伝』と『メトディオス伝』からテキストの要所を抜き出し、適宜 Gorskij 自身の言葉で補って全体を通して読めるようにしたもの)を掲載したことによる。その後 1851 年に P. J. Šafařík が、『コンスタンティノス伝』については Vladislav Grammatik による 1479 年写本を中心に 5 つの写本を用い、また『メトディオス伝』については Moskovskaja Duchovnaja Akademija 所蔵 16 世紀写本に依って校訂テキストを公刊したことにより、本格的な学術的研究が始まった。

42 コンスタンティノスは世俗名、キュリロスはローマで修道士となった際に受けた名前。

43 12 世紀以前に主としてブルガリア、マケドニアで成立したと推定される写本を古教会スラブ語の規範的な文献(カノン)とし、その言語を厳密な意味での「古教会スラブ語」と呼ぶ。

44 具体名としては、当初からの 2 人の弟子で後にブルガリアの大司教となった Kliment の名が挙がっているが、兄メトディオスその人とする説もある。ギリシア人によるスラブ語での著作説をとる Wytrzens はメトディオスの名を挙げる。cf. Wytrzens (1968: 50)。注 146 参照。

45 Lavrov (1928: 88)、Lehr-Splawinski (1959: XXVIII) によれば、ギリシア語からの翻訳説は Dümmler、Viktorov、A. D. Voronov によって比較的初期の時代から支持され、I. V. Jagić、V. Vondrák 等もギリシア語のオリジナルの存在を認めていた。一方 A. Lavrov、A. Brückner、さらに後の A. Pogorelov、M. Weingart、G. Grivec 等はスラブ語オリジナル説を採っていた。Voronov (1877: 16 n.2, 16-19) によればギリシア語からの翻訳説は Dümmler が 1854 年に *Archiv für Oestereichischer Geschichtsquellen* B. XIII. 147-155 に掲載した『メトディオス伝』についての論文で Miklošič の意見を入れ、『メトディオス伝』はメトディオスからギリシア

地についてはモラヴィア説、パンノニア説、ブルガリア・マケドニア説がある。

『過ぎし年月の物語』の言語について考えるとき、それより250年前に成立し、かつギリシア語聖書の忠実な翻訳テキストとしての古教会スラブ語聖書本文でなく、このいわば自由に創作された文献の言語の特徴について明らかにしておかなければならない。『過ぎし年月の物語』の特徴であると考えたものが、実は最初期のスラブ語の書き言葉の特徴であった可能性、それが『過ぎし年月の物語』の言語に直接あるいは間接に影響を与えた可能性について考えておく必要があるからである⁴⁶。

語を習ったパンノニア人の弟子によってギリシア語で書かれたという説を提唱したのが始まりとされる。Voronov自身も、オリジナルのテキストはギリシア語で書かれ、スラブ語のテキストはその翻訳であること、同時にスラブ語のテキストはオリジナルから離れることもあり、あるいはオリジナルを補うこともあるという自由な訳であったことを主張している。cf. Voronov (1877: 47-70)。スラブ語オリジナル説を採るLavrov (1928: 88-93) は「今日我々が知るような姿の2つの聖者伝は、その著者たちが教会スラブ語で書いたものである」(88) とする。そして「ギリシア語あるいはラテン語で書かれた『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』が存在しなかったと確信することはできない」(88) としながらも、「最も古い『コンスタンティノス伝』テキストが、ギリシア語で書かれていたかスラブ語で書かれたかは別として、それが現在我々に知られているものと非常に異なっていたということは疑わしい」(89) とする。Pogorĕlov (1932) は『コンスタンティノス伝』に引用される聖書の箇所を古教会スラブ語の詩篇、福音書と綿密に対照し、そこに見られる古教会スラブ語テキストとの逸脱に注目し、これは著者がいずれかの聖書テキストを手元において参照したのではなく、自らの記憶にもとづいて引用したためにこのような逸脱が生じたからであるとする。さらに決定的な証拠としてV章のヨーアンネースとの争論がスラブ語訳の聖書の間違いにもとづいて行われていることを示したうえで、『コンスタンティノス伝』がスラブ語で書かれたことを結論づける。(特に19-20を参照)。Weingart (1935) も「これらはオリジナルの作品であり、ギリシア語からの翻訳でもなければ、ギリシア語で書かれたオリジナルに依るものでもない」(105)、「2つの伝記は作者がスラブ人であることをはっきりと明瞭に示している」(105) としている。なお最近ではVaillant (1968a, b) は翻訳説を採り、Lehr-Splawinski (1959) はスラブ語オリジナル説を採る。Vaillant (1968b) の訳注では「ギリシア語原テキスト」に言及し、その形を「再構成」した箇所もある。

- 46 『過ぎし年月の物語』の898年の項にはキュリロスとメトディオスのモラヴィア伝道の記事がある。このことから『過ぎし年月の物語』の編纂者は2人の事績を知っており、何らかの形で『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』のテキストにも触れていたと見ることができる。ただしŠachmatov (1940: 79-92) によれば、この記事は『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』から直接取られたというより、「聖書のスラブの言葉への翻訳についての物語」(Skazanie o preloženii knig na Slovenskij jazyk) という独立の現存しない文献から抜粋して引かれたという。そしてこの「聖書の…」は『メトディオス伝』を元に編まれているという。

2.1. 『コンスタンティノス伝』におけるテキストのタイプ

動詞が過去形に限られるか、現在形も使用されているかということを基準にすれば、『コンスタンティノス伝』においても、事実叙述とコメントという2つのタイプのテキスト部分を区別することができる。また、直接引用タイプのテキスト、聖書引用タイプのテキストも当然存在する。しかし、実際には『コンスタンティノス伝』では、事実叙述タイプとコメントタイプのテキスト部分の差異は、必ずしもはっきりしない。一貫して動詞の過去形が使用されていることから事実叙述タイプと見なし得るテキスト部分も、内容的に見ると『過ぎし年月の物語』に比べ物語的要素が少なく、神学的論争の記録という性格が強い。聖書本文からの引用も、コメントタイプのテキスト中で著者の考えを裏付けるために行われるというより、この事実叙述タイプのテキスト中に現れるキュリロスの言葉、すなわち直接引用タイプのテキスト中に現れる。つまり二重の引用の形で現れることになる。そして何より、現在形と過去形の両方が使用されコメントタイプと見なしうる部分の量は、下の(24)の表Ⅱに示される通り極めて限られており、実際には分析の対象から除かざるを得ない。従ってコメントタイプのテキストにおける近称の指示代名詞 s_b の使用についても確かめることはできなかった。このように考えると、『コンスタンティノス伝』で事実叙述タイプとコメントタイプのテキストを分ける内在的な理由は必ずしも存在しないようにも見える。しかし、ここでは、『過ぎし年月の物語』との比較という観点から、次のように『コンスタンティノス伝』においても4つのタイプのテキストを分けて考えることにする。この中で聖書引用タイプについては、ギリシア語原典の忠実な引用である可能性も考え、本稿の分析では扱わない。(24)に示した統計からも除いてある。

(10) 『コンスタンティノス伝』におけるテキストのタイプ

- 1) 事実叙述タイプ：時間軸にそって、物語的に事件の連続的な生起が述べられる部分。必ずしも物語的とは言えないが、キュリロスと他の登場人物・他の宗教の代表者との対話・論争が時間の経過を追いつつ記録されている部分も含む。
- 2) コメントタイプ：冒頭の部分など、現在形を含む部分。「著者の1人称」が現れる。キュリロスその人についてコメントするというより、広く神と著者、読者の関係

が述べられる。

- 3) 直接引用タイプ：キュリロスをはじめ、登場人物の語った言葉が直接引用されている部分。事実叙述タイプのテキスト中に現れる。日常的な会話も含まれるが、宗教的内容、教理的な議論の方が多い。
- 4) 聖書引用タイプ：聖書本文からの引用と見なされる部分。事実叙述タイプのテキスト中に現れるキュリロスの言葉、すなわち直接引用タイプのテキスト中に現れる。聖書本文にどの程度忠実であるかは個々の例により異なる。

2.2. 事実叙述タイプのテキストにおける語順と指示代名詞の使用について

2.2.1. 語順と指示代名詞の使用

『コンスタンティノス伝』においても、『過ぎし年月の物語』と同様SzeV構文の使用が観察される。『コンスタンティノス伝』の事実叙述タイプのテキスト部分は、内容的に物語的な要素の強い部分と、キュリロスと他の宗教の代表者たちの宗教的論争について描いた部分に分けられる。その中で次の(11)はIV章⁴⁷の全体であるが、『コンスタンティノス伝』の中でも比較的物語的な要素の強い部分に属する。キュリロスがコンスタンティノープル（ツァリグラド）に着いて学問に励み、才能を示して宮廷の高官（ロゴテテス）に愛されたことが述べられている。ここでは主語を省略したVだけの節が多く使用され、SzeV構文も3回現れる（S20žeV20、S23žeV23、S30žeV30）。それらの主語はすべて遠称の指示代名詞 *онъ* である。これは、一見すると『過ぎし年月の物語』におけるのと全く同じであるかのようにも見える⁴⁸。

しかしよく見ると、『過ぎし年月の物語』における事実叙述タイプとの違いにも気づ

47 1851年にŠafaříkが『コンスタンティノス伝』と『メトディオス伝』の校訂テキストを出版した。cf. Šafařík (1851)。この時『コンスタンティノス伝』については18章（ただしルボフ写本IIに基づいてXIX、XXが補われている）、『メトディオス伝』については17章の章分けが行われた。そしてこの章分けがMiklošič等によって受入れられ、今日に至るまで使用されることになる。Žitija Kirilla i Mefodija (1986) 掲載の現代語訳、Vaillant (1968a, b), Lehr-Spławiński (1959) 掲載のテキストおよび翻訳もこの章分けに従っている。

48 ここで本文および訳文中の // という印は本稿のデータとして用いた Žitija Kirilla i Mefodija (1986). 掲載のGBL所蔵MDA本No.19中の『コンスタンティノス伝』の現代ロシア語訳に見られる各章の下の小パラグラフの境界を示す。下の3.5における議論に関係する。

く。まず、『過ぎし年月の物語』で基本語順と考えられた単純なVS語順の節はここでは一つも現れない。さらにSzeV構文と並んで単純なSV語順の節やVzeS構文も多く見られる(SV:3回、VzeS:2回)。ここではSzeV構文に限らず、むしろどの語順も自由に使用されているように見える。VS語順の節が連続するなかで、適宜SzeV構文が現れて語りにリズム感を与えるという、『過ぎし年月の物語』における様式化された語りのスタイルは存在しない。

- (11) a. egda že priide^{V1} (aor.3sg.) kъ C<ěsa>rjugradu. vьdaša^{V2} (aor.3pl.) i učitelemъ. da se učitъ^{V3} (pr.3sg.). i vъ 3 m<e>s<ja>ci navykъ^{V4} (Prt.pt.) vъsju gramotikiju. i po pročaa se jatъ^{V5} (aor.3sg.) učenia. nauči^{V6} (aor.3sg.) že se Orimu i geometrii u Lъva. i u Fotě. dijaleksice. i vsěm filosofskym učeniemъ. kъ sim že i ritorikii i arifmitikii. i astronomii. i musikii. i vsěm pročimъ ellinъskym učeniemъ. takože e navyče^{V7} (aor.3sg.) vъse. jakože ni edinъ ot nich navyče^{V8} (aor.3sg.). skorostъ^{S9} bo se sъ prilěžaniemъ sъključi^{V9} (aor.3sg.) i druga^{S10} drugu prispějušti^{V10} (Prt.pr.). imže se učenia i chudožьstva^{S11} sъvrъšajutъ^{V11} (pr.3sg.). bolě že učenia tichyi obrazъ na sebě javleja^{V12} (Prt.pr.). s těmi besědovaše^{V13} (impf.3sg.). sъ nimiže běaše^{V14} (impf.3sg.) polezněe. uklaneasъ^{V15} (Prt.pr.) ot uklanejuštichse vъ stroprъty. kako by zemnymi n<e>b<e>snaa preměňšu^{V16} (Prt.pt.). izlětěti. isъ telesi sego. i sъ B<o>gomъ žiti. // uzrěvъ^{V17} (Prt.pt.) že i tako sušta. logofet^{S17/18} dastъ^{V18} (aor.3sg.) emu vlastъ na svoemъ domu⁴⁹ i vъ c<ěsa>r<e>vu polatu sъ

49 波線部 uzrěvъ^{V17} (Prt.pt.) že i tako sušta. logofet^{S17/18}. dastъ^{V18} (aor.3sg.) emu vlastъ na svoemъ domu. 「彼のこのような様子を見て、ロゴテテスは彼に自分の家（を治める）権利を与え」は「分詞—名詞—一定動詞」の配列になっている。訳文はlogofetをdastъの明示的な主語とする解釈に依った。しかし実際には、分詞 uzrěvъ の明示的主語としての解釈、定動詞 dastъ の明示的主語としての解釈、いずれも可能である。句読法も読みの絶対的な基準とはならない（なお sušta と logofet の間の点は写本では少し縦長のコンマ風に見え、転写テキスト (98) でもコンマで写されている）。Lehr-Spławiński (1959: 11) はこの箇所で Uzrěvъ že jego takova sašta logofetъ, dastъ jemu vlastъ nadъ svoimъ domomъ i vъ cěsarjevą polatą sъ drъznovenъjemъ vъchoditi. というように logofetъ と dastъ の間にコンマを入れあたかも logofetъ が分詞 uzrěvъ の明示的主語であるような扱いをしている。これに対して Vaillant

drъznoveniemъ vъchoditi. i vъprosi^{V19} (aor.3sg.) ego edinoju g<lagο>le^{V19'}
 (Prt.pr.). “filosofe chotěľ bych uvěděti. čto estъ filosofia.” onъ^{S20} že chytrym
 umomъ reč<e>^{V20} (aor.3sg.) togda “B<o>žiamъ. i čl<ově>čēmъ veštemъ razumъ
 eliko možet čl<ově>kъ. približitise b<o>dzě. jako děteliju učiti čl<ově>ka. po
 obrazu i po podobiju byti sъtvoršemu ego.” ot sego že pače vъzljubi^{V21} (aor.3sg.) i
 pr<i>sno vъprašaše^{V22} (impf.3sg.) i o vsemъ. tolíkъ mužъ velikъ i čestenъ. onъ^{S23}
 že sъtvori^{V23} (aor.3sg.) emu učenie filosofsko vъ malěch slovesěch velii umъ
 skazav^{V24} (Prt.pt.). // vъ čistotě že prebyvaa^{V25} (Prt.pr.). velъmi ugažaše^{V26}
 (impf.3sg.) B<o>gu. toliko ljubimъ^{V27} (Prt.P.pr.) vsēmъ byvaše^{V27'} (impf.3sg.: AnP.
 impf.3sg.). i logofetъ^{S28} → vsěku č<e>stъ tvore^{V29} (Prt.pr.) emu gověinu. ← zlato
 mnogo dajaše^{V28} (impf.3sg.) emu. onъ^{S30} že ne primaše^{V30} (impf.3sg.). edinoju že
 reč<e>^{V31} (aor.3sg.) kъ nemu. “tvoa krasota i m<u>drostъ nudit mę izliča ljubiti
 tę. iměju dšterъ d<u>chovnuju. juže esmъ kr<e>stilъ. krasnu i bogatu. roda
 dobra i velika. ašte chošteši podružiju. siju ti damъ. ot c<ě>sa>rę že veliju čestъ i
 kněženie primъ. bolъša počai. vъskorě bo stratigъ budeši.” otvēstavъ^{V32} (Prt.pt.)
 že emu filosof^{S32}. “darъ ubo velii chotěštīm ego. a mně bolě učenia nēs<tъ>
 ničtože. imže razumъ sъbravъ pradědnęa čъsti i bogatstva choštu iskatī.”
 slyšavъ^{V33} (Prt.pt.) že logofet^{S33} otvētъ ego. šed^{V34} (Prt.pt.) kъ c<ě>sa>r<i>ci i
 reče^{V35} (aor.). “se filosof unyi ne ljubit žitia sego. to ne otpustimъ ego ot obštiny.
 no postrigše i na popovъstvo. vъdadimъ emu službu. da budet vivlotikarъ u

(1968a: 5) はUzrěvъ že i tako sušta logofet dastъ emu vlastъ na svoemъ domu i vъ cēsarevu
 polatu sъ drъznoveniemъ vъchoditi. というように間にコンマを挟まず、句読法からは彼の
 読みが分からない。一方でそれぞれの訳を見ると、Lehr-Spławiński (1959: 10) “Poznawszy
 te jego przymioty, logotet dał mu władzę nad domem swoim i (przyznał) swobodny dostęp
 do cesarskiego pałacu.”、Vaillant (1968b: 3) “Le voyant tel, le logothète lui donna pouvoir sur
 sa propre maison et d’entrer sans crainte dans le palais de l’empereur.” というように問題の箇
 所は両者とも同じ訳し方で、ともにlogofetをdastъの明示的主語としているように見える。
 このように、「分詞—名詞—一定動詞」という配列では名詞をいずれの主語とするかは恣意的
 にならざるを得ない。そのため、本稿ではこのような場合分詞uzrěvъ、定動詞dastъのいず
 れの節もデータから外すことにする。この例では説明のため2つの動詞に番号を振ったが、
 以降の例では番号も振らない。

patriarcha. vъ s<vja>těi Sofii. negli pone tako udrъžimъ ego.” i sъtvoriša^{V36}
 (aor.3pl.) emu to. // malo že s nimi vъ tom pobyvъ^{V37} (Prt.pt.). na uskoe more
 šedъ^{V38} (Prt.pt.) sъkryse^{V39} (aor.3sg.) otai vъ monastyri. iskaša^{V40} (aor.3pl.) že ego 6
 m<ě>s<ja>cъ. i edva obrětoša^{V41} (aor.3pl.) i. i ne mogoša^{V42} (aor.3pl.) eg<o>
 unuditi. na to že služenie. umoliša^{V43} (aor.3pl.) i učitelnyi sanъ prijati. učiti
 filosofii. svoę zemčę i strannya. sъ vsekoju služboju i pomoštiju. i po to se jatъ^{V44}.
 [367-21]

- b. V1-V2-V3-V4-V5-V6-V7-V8-S9V9-S10V10-S11V11-V12-V13-V14-V15-V16-
 V17-S17/18-V18-V19-S20žeV20-V21-V22-S23žeV23-V24-V25-V26-V27-
 S28V28 [V29] S30žeV30-V31-V32žeS32-V33žeS33-V34-V35-V36-V37-V38-
 V39-V40-V41-V42-V43-V44.

- c. (彼が^s) コンスタンティノーブルに着くと^{V1}、(人々は) 彼を教師につかせ^{V2}、勉強させた^{V3}。(彼は) 3月のうちに文法学をすべて学び^{V4}、他の学問にとりかかった^{V5}。すなわちホメロスを修め^{V6}、また幾何学をレオンのもとで、またポティオスのもとで弁論術と哲学のすべての分野を学び、これに加えて修辞学と算術、そして天文学、さらに音楽を(学び)、他のギリシアの学問をすべて(学んだ)。このようにして(彼は) これらすべて(の学問)を修得し^{V7}、まるでそれらのうちの一つとして修得しなかった^{V8}かのようにであった。(彼の) 俊敏さが^{s9}勤勉さと一つになり^{V9}、一方が^{s10}他方を急がせた^{V10}のである。そのことによって学問と芸術は^{s11}完全なものになる^{V11}のである。(彼は) 学問(の能力)以上に、自分の穏やかな性格を(人々に)示し^{V12}、共にいて有益である^{V14}人々と(のみ)、そのような(人々とのみ)語り合い^{V13}、障害の中へと逸れてしまった者たちを避け^{V15}、何とかして地上のものを天上のもので代えて^{V16}、この肉体から飛び出して神とともに生きることを(望んだ)。// 彼のこのような様子を見て^{V17}、ロゴテテスは^{s17/18}彼に自分の家(を治める)権利を与え^{V18}、皇帝の宮殿に憚ることなく入ることを許した。そして、ある時(ロゴテテスは)彼に尋ねて言った^{V19}「哲人よ、哲学とは何であるのか、(私は)知りたいものだ」。彼は^{s20}この時巧みな知恵をもって言った^{V20}「(それは)神(のこと)と人のことの知識であり、人が神に近づきうる

範囲においての（ことです）。これは、（その）行いによって、人に、彼をつくられた方のかたち、姿に似るようにと教えるのです」。この時以来、（ロゴテテスは）益々彼を愛するようになり^{V21}、このように偉大で尊敬すべき人物が、常にあらゆることについて彼に尋ねるのであった^{V22}。（すると）彼は^{S23}彼に哲学の教えを行い^{V23}、少ない言葉で大きな知恵を語った^{V24}。 // （彼は）清らかさのうちにあって^{V25}、大いに神に喜ばれるとともに^{V26}、ますますすべての人に愛された^{V27}。そしてロゴテテスは^{S28}彼にしかるべきあらゆる敬意を払い^{V29}、多くの黄金を彼に与えようとした^{V28}。しかし彼は^{S30}受け取ろうとはしなかった^{V30}。ある時（ロゴテテスは）彼に言った^{V31}。「あなたの美しさと賢さは、私をして益々あなたを愛させる。私には霊の娘がおり、（私が）洗礼を行ったが、（彼女は）美しく富があり、立派で富裕な家の出である。もし（あなたが）望むなら、妻としてこの娘を与えよう。（あなたはすでに）皇帝から大きな名誉と力を受けているが、さらにそれ以上を期待しなさい。（あなたは）間もなく（軍管区）長官になるであろう」。哲人は^{S32}彼に答えて言った^{V32}「（これは）それを望む者にとっては、大きな贈り物です。しかし私にとっては、学問より大きなものは、何もありません。それによって知恵を集め、父祖たちの名誉と富を探したいと望むのです」。ロゴテテスは^{S33}彼の返事を聞くと^{V33}、皇后のところに行き^{V34}、言った^{V35}「見よ、（あの）若い哲人は此の世の生活を嫌っています。それなら、（我々は）彼を（この）社会から手放さず、彼を剃髪して僧にし、彼に仕事を与え、聖ソフィアで総主教のもとで文書館長にしましょう。そうすれば、せめて彼を引き留めておけます」。こうして、彼にその通りに行った^{V36}。 // （しかし彼は）しばらくの間彼らとともに（あって）その地位に留まった^{V37}ものの、狭い海に行き^{V38}、密かに修道院に隠れた^{V39}。（人々は）6カ月の間彼を捜し^{V40}、そしてついに彼を見つけだしたが^{V41}、彼にこの（以前と）同じ地位（に戻ることを）強いることはできなかった^{V42}。（人々は）彼に教師の地位を受け入れるよう（強く）要請し^{V43}、哲学を、あらゆる支持と援助を受けて自分の同国人と他国の人々に教えるよう（要請した）。そして彼はこれを受け入れた^{V44}。

次の (12) はV章の全体である。キュリロスと追放された総主教・偶像破壊主義者ヨアンネース7世グラマティコスの論争の場面である。ここで、ヨアンネースとの対話が始まるS7žeV7の部分以下は殆どすべての動詞がSžeVの形をとっている。また主語としてонъも現れる。posramlъ^{V20} že se tako starecъ^{S20}. inamo obrati^{V21} besědu. i reč<e>^{V22} starecъ^{S22}「そこで老人は（すっかり）恥じ入り、会話の（向き）を変えた。そして老人は言った」のところでいわば小休止のようにVS語順の節が入るが、その前後は対話に参加するいずれの側の話者が主語となる場合もSžeV構文が使用されている。このことは、『過ぎし年月の物語』の例 (1) でSžeV構文が現れたのが一方の側（すなわちオリガ）を主語とする場合のみであったことと、著しく対照的である。また動詞はすべてrešti「言う」、posъlati + rešti「使者を送って言う」⁵⁰、otъvēstatī「答える」という発話動詞である。『コンスタンティノス伝』全体を通して、このような対話の文脈で発話動詞が使用されるときは、SžeV構文が現れる割合が極めて高いように感じられる⁵¹。SžeVの使用はこの文脈では無標となり、文体上の特別な価値を持つことができないように見える。

- (12) a. Bě^{V1}(impf.3sg.) že *Annii patriarchъ*^{S1}. eresъ vъzdviglъ^{V1'}(l-prt.: plpf.3sg.). g<lago>le^{V2}(Prt.pr.). ne tvoriti česti s<vja>tymъ. i sъbravše^{V3}(Prt.pt.) sъnemъ obličiša^{V4}(aor.3pl.) i jako nepravo g<lago>letъ^{V5}(pr.3sg.). i sъgnaša^{V6}(aor.3pl.) i sъ stola. онъ^{S7} že reč<e>^{V7}(aor.3sg.). “nasiliemъ mę sъgnaša. a ne preprěvše mene. ne možet bo niktože protivitisę. slovesem moimъ.” c<ěsa>rъ^{S8} že sъ patrikiemъ. → ustroivъ^{V9}(Prt.pt.) filosofa. ← posla^{V8}(aor.3sg.: CompSp.aor.3sg.) k nemu rekъ^{V8'}(Prt.pt.) tako. “ašte možeši unošu sego preprěti to paky stolъ svoi priimeši.” онъ^{S10} že → uzrěvъ^{V11}(Prt.pt.) filosofa. una tělomъ. a ne vědyi^{V12}(Prt.pr.) stara uma vъ nemъ. i iže bęchu poslani sъ nimъ. ← reče^{V10}(aor.3sg.) kъ nimъ. “vy podnožia moego něste dostoini. to kako azъ s vami se prěti choštu.” filosof^{S13} že kъ nemu reče^{V13}(aor.3sg.). “ne ljudskago obyčaa drъži. no B<o>žiihъ zapovědi zri.

50 posъlati「(使者を) 送る」とrešti「言う」からなる複合的発話動詞と考える。

51 後述の2.2.2における(14)、(15)についての数量的議論を参照。

jako že bo ty esi ot země. a d<u>ša B<o>gomъ sъstavlena. tako i my vъsi. to na zemlju zrę čl<ovę>če ne grъdisę.” paky že Annii^{S14} otvěšta^{V14} (aor.3sg.). “nepod<o>bno estъ vъ osenъ cvětce iskatі. ni starca na voinu gnati. jakože někoego unošu Nestera.” filosof^{S15} že otvěšta^{V15} (aor.3sg.) emu. “samъ na sę viny obrętaeši. rъci mi vъ ktoruju vrъstu estъ. silněiši d<u>ša telesi.” onъ^{S16} že reč<e>^{V16} (aor.3sg.) “na starostъ.” filosof^{S17} že reč<e>^{V17} (aor.3sg.). “to na kuju tę branъ gonimъ. na telesnuju li. ili na d<u>chovnuju.” onъ^{S18} že reč<e>^{V18} (aor.3sg.). na d<u>chovnuju. filosofъ^{S19} že otvěšta^{V19} (aor.3sg.). “to ty n<y>ně silněi chošteši byti. da ne gl<agol>i namъ tacěch pritočъ. ne bezъ vremeni bo ni cvětce išem. ni na voinu tebe gonim.” posramlъ^{V20} (Prt.pt.) že sę tako starecъ^{S20}. inamo obrati^{V21} (aor.3sg.) besędu. i reč<e>^{V22} (aor.3sg.) starecъ^{S22}. “rъci mi unoše. kako kr<e>stu razorenu suštu. ne klanęemse emu. ni lobyzaemъ ego. a vy. ašte lice do prъsii tokmo budet. ikonnuju. čestъ emu tvoręšte. ne styditesę o kr<e>stě.” Filosof^{S23} že otvěšta^{V23} (aor.3sg.). “4 bo čęsti kr<e>stъ imęetъ. i ašte edina ego čęstъ ubudet. to uže svoego obraza ne imęetъ. i podobie togo ego že radi pisana. a ikona ot lica obrazъ javlęetъ. i podobae bo ego že radi budet pisano. ne lъvova bo lica. ni rysъa zritъ. iže vidit.” paky že starecъ^{S24} reč<e>^{V24} (aor.3sg.). “kako sę ubo klanęem kr<e>stu bezъ napisania. a byvšim iněmъ kr<e>stomъ. ikona že. ašte ne budet napisano imeni. egože budet obrazъ. to ne tvorite ei čъsti.” filosof^{S25} že otvěšta^{V25} (aor.3sg.). “vsękъ bo kr<e>stъ pod<o>benъ obraz imęetъ. Ch<risto>vu kr<e>stu. a ikony ne imęjutъ vse obraza edinogo.” starecъ^{S26} že reč<e>^{V26} (aor.3sg.). “B<og>u rekšu kъ Moiseovi. «ne sъtvořiši vsękogo podobia.»⁵² kako vy tvoręšte klanęetesę.” filosof^{S27} že protivu semu otvěšta^{V27} (aor.3sg.). “ašte by reklъ. “ne sъtvořiši nikakova že podobia.” to pravo priši. no estъ reklъ. “ne vsękogo. sirěč dostoinoe.” protivu že semu ne može^{V28} (pr.3sg.) přetise starecъ^{S28}. umlъčę^{V29} (aor.3sg.) posramlesę^{V30} (Prt.pt.).

368-21] (b) V1zeS1-V2-V3-V4-V5-V6-S7zeV7-S8zeV8 [V9] S10zeV10 [V11-V12] S13zeV13-

S14V14-S15zeV15-S16zeV16-S17zeV17-S18zeV18-S19zeV19-V20S20-V21-

V22S22-S23zeV23-S24V24-S25zeV25-S26zeV26-S27zeV27-V28S28-V29-V30.

c. (かつて) 総主教ヨーアンネースは^{S1}、異端の説をなして^{V1}、(こう) 言っていた^{V2}。聖像に対して礼拝してはいけない。そこで (人々は) 集会を開き^{V3}、彼 (の誤り) を暴き立て^{V4}、正しくないことを言っている^{V5}とした。そして彼を (総主教の) 座から追放した^{V6}。彼は^{S7}言った^{V7}「(彼らは) 力をもって私を追いました。しかし私を論破することは (でき) ませんでした。誰も私のことばに反駁することはできないのです」。皇帝は^{S8}貴族たちと (相談し)、哲人を用いる^{V9}ことにし、彼のもとに送ってこう言った^{V8}「もし、(あなたが) この若者を論破することができるなら、そのときは再び、(かつての) 自分の (総主教の) 座についてもよい」。彼は^{S10}哲人を見^{V11}、(その) 肉体の若さを (見たが、その内面の成熟した知性を知ることはなく^{V12}、また彼とともに送られた人々 (の若さ) を (見て)、彼らに言った^{V10}「あなた方は私の足台にも値しません。それなのにどうして (この) 私があなた方と論争などでしょうか」。哲人は^{S13}彼に向かって言った^{V13}「人間的な習慣に頼らず、神の教えを見なさい。それというのも、あなた (の肉体) は土から (作られた) ものですが、(あなたの) 精神は神によって作られたのです。私たちもみなそのように (神によって) 作られているのです。だから土を見て、人よ、傲慢になってはいけません」。すると再びヨーアンネース^{S14}は答えた^{V14}「秋に花を捜すこともすべきではないし、老人を、ネストルをどこかの若者と同じように戦争に追い立てることも (すべきではない)」。

哲人は^{S15}彼に答えた^{V15}「(あなた自身) 自らの罪を見つけようとしています。どの年齢において、霊が肉体よりも強いと言って下さい」。彼は^{S16}言った^{V16}「老年において (です)」。哲人は^{S17}言った^{V17}「それなら、どのような戦いに (私たちは) あなたを追い立てるのでしょうか。肉の戦いでしょうか、それとも霊の戦いでしょうか」。彼は^{S18}言った^{V18}「霊の戦いです」。哲人は^{S19}答えた^{V19}「それならいまや (あなたは) より強くなろうとしている (とき) ではありませんか。私たち

にそのようなたとえ話しをしないでください。(その)時でないのに花を捜しているわけでもなければ、戦争に(老人の)あなたを追い立てているわけでもないのですから」。そこで老人は^{S20}(すっかり)恥じ入り^{V20}、会話の(向き)を変えた^{V21}。そして老人は^{S22}言った^{V22}「私に言ってみなさい。若者よ。十字架が破壊されているとき、(私たちは)これに対して跪かないし、これに口づけすることはありません。ところがあなた方は、もし像が胸までしか(描かれて)いなくても、これに対して聖像(へ)の敬意を払います。(あなた方は)十字架に対して恥ずかしくないのですか」。哲人は^{S23}答えた^{V23}「なぜなら、十字架は4つの部分を持っています。そしてもし、その一つの部分でも小さくなれば、(十字架は)もはや自分の(あるべき)姿を持っていないことになります。その人のために描かれたところの、その人の似姿、つまり聖像は、(その人の)顔の姿を表すものです。そして、その人のために描かれるものなのですから、(その人に)似る(のが当然であり)、(これを)見る人は、獅子の顔もオオヤマネコの顔も見ることはありません」。老人は^{S24}再び言った^{V24}「他にも多くの十字架があったというのに、どうして(私たちは)銘文のない十字架に跪くのか。しかるに聖像(について)は、その(人のために描かれた)像であるところの(その人物の)名前が書いてなければ、(あなた方は)それに対して敬意を払おうとしない」。哲人は^{S25}答えた^{V25}「なぜなら、すべての十字架は同じ形、すなわちキリストの十字架に似た形をしているが、聖像はみな一つの姿をしているわけではありません」。老人は^{S26}言った^{V26}「神はモーセに言った《あらゆる種類の像を作ってはならない。》(それなのに)どうしてあなた方は(像を)つくって、(これに)跪くのか」。哲人は^{S27}これに反論して答えた^{V27}「もし(神が)『いかなる似姿もつくるな』と言われたなら、(あなたは)正しく反駁したことになります。しかし(神が)言われたのは、『いかなる(似姿)でも(良い)ということではなく、すなわち、ふさわしい(似姿)を(作りなさい)』ということなのです」。これに対して老人は^{S28}反駁することができず^{V28}、恥じて^{V30}、黙り込んだ^{V29}。

一方で、対話の文脈なら常にSzeV構文が使用されるかという、そういうわけでも

ない。次の (13) はX章の後半、ハザールとの論争の続きの部分である。同じ対話の場面であるが、ここではSžeV構文の使用は極めて限られ (S3žeV3、S16žeV16の2回)、その代わりにVS語順 (V2S2、V4S4、V6S6、V14S14、V18S18、V20S20、V21S21、V22S22) やžeを伴ったVžeS構文 (V1žeS1、V15žeS15、V19žeS19、V23žeS23) が多く使用されている。また単純なSV語順の節 (S7V7、S12V12、S25V25) も現れる。さらに、『過ぎし年月の物語』ではSžeV構文に特徴的であった遠称の指示代名詞онъがVS語順の節 (V2S2、V4S4) やVžeS構文 (V15S15、V19S19) の主語としても現れている。このことは、語順が自由であり、またонъの使用もテキスト上の遠い先行詞を指すという条件さえ合えばそれ以上制限がないことを意味している。

- (13) a. reče^{V1} (aor.3sg.) že filosof^{S1}. [A] “tako Moissii g<lagο>letъ «ašte poslušajušte mene po vъsemu chraniti zakonъ.»⁵³ «budutъ preděli vaši. ot morę Črъmnago. do morę Filistimъska. i ot pustynę. do rěky Efrata.»⁵⁴ i my jazyci ot sěmeni Avraamlę bl<ago>s<lo>vimseъ.⁵⁵ «i ot Ieseeva korene išsedšimъ»⁵⁶ [...] ⁵⁷ koe že li vy sę mnitъ želěznoe c<ěsa>rstvo. eže Danilъ vъměni vъ ikoně.” otvěštaša^{V2} (aor.3pl.) oni^{S2}. “Rimъskoe.” filosof^{S3} že vъprosi^{V3} (aor.3sg.) є. «kamenъ utorgъse ot gory bez rukъ čl<ově>českъ.»⁵⁸ kto estъ.” otvěštaša^{V4} (aor.3pl.) oni^{S4}. “pomazanyi.” paky že rekoša^{V5} (aor.3pl.). “to ašte sego skazaemъ. pr<o>roky inymi veštъmi. uže prišedša. jako že g<lagο>leši. kako Rimъskoe c<ěsa>rstvo doselě drъžitъ

53 「申命記」11.22。Vaillant (1968b: 注X-35) では「申命記11.22を自由に訳した」とある。

54 「申命記」11.24、「出エジプト記」23.31。Vaillant (1968b: 注X-36) では「申命記11.24だが出エジプト記23.31で置き換えられた」とある。すなわち、全体の枠（ただしテキストでは最初の部分）は「申命記」だが、「紅海から…エウフラテス川まで」の部分が「出エジプト記」から採られ埋め込まれている。

55 Vaillant (1968b: 注X-37) では「創世記22.18」に基づくとしたうえで、スラブ語のテキストが混乱し、写本間で異同が見られることを指摘する。彼はその理由をギリシア語のオリジナルのテキスト（すなわち『コンスタンティノス伝』のギリシア語版）が錯綜していることに求め、そのギリシア語テキストの再構形を提示している。

56 「イザヤ」11.1。「ローマ」15.12の可能性もある。

57 以下写本の行数にして15行分を省略した。

58 「ダニエル」2.34あるいは「ダニエル」2.45。

vl<a>d<y>čystvo.” otvěšta^{v6} (aor.3sg.) filosof^{s6}. [B] “ne držít se uže. mimo šlo bo
 estь. jakože i pročae po obrazu ikonnomu. naše bo c<ěsa>rstvo něs<ť>
 Rimьsko. no Ch<risto>vo. jakože řeč<e> pr<o>rokь. [...]”⁵⁹ Isaija bo řeče. «preže
 daže boleštija ne rodi. i preže daže ne pride r<o>ž<de>stvo. bolězni izběža. i rodi
 mužeskь pol.»⁶⁰ paky že Ijuděi^{s7} řeša^{v7} (aor.3pl.). “my esmy ot Sima
 bl<a>g<o>s<lo>venoe sěmę. blagosloveni otc<e>mь našimь Noemь. vy že
 něste.” skazavь^{v8} (Prt.pt.) že imь o semь. i řeče^{v9} (aor.3sg.) “bl<ago>s<lo>venie
 otca našego⁶¹ ino ničtože něstь. tokmo chvala B<o>gu. onogo že ničtože ne
 budetь. se bo estь. «bl<ago>s<lo>venь G<o>s<pod>ь B<og>ь Simovь.»⁶² a ko
 Afetu g<lago>lę. ot negože my esmy. «Da rasprostranitь G<o>s<pod>ь B<og>ь
 Afeta. i da se vselitь v sela Simova.»⁶³ I ot pr<o>rokь že i ot iněchь knigь
 skazaja^{v10} (Prt.pr.). ne ostavi^{v11} (aor.3sg.) ichь. dondeže sami^{s12} řeša^{v12} (aor.3pl.).
 jako “tako estь jakože g<lago>leši.” Rekoša^{v13} (aor.3pl.) že paky. “Kako vy imušte
 upovanie na čl<ově>ka. i tvorite s<ę> bl<ago>s<lo>veni byti. a knigy
 proklinajutь takovago.” otvěšta^{v14} (aor.3sg.) filosofь^{s14}. “to prokletь li estь
 D<a>v<y>dь ili bl<ago>s<lo>venь.” rekoša^{v15} (aor.3pl.) že oni^{s15}. “I dzělo
 bl<ago>s<lo>venь.” filosofь^{s16} že řeče^{v16} (aor.3sg.). “to i my na togo upovaemь.
 na negože i onь. řeče bo vь psalměchь. «ibo čl<ově>kь mira moego. na nь že
 upovachь.»⁶⁴ čl<ově>kь že toi estь Ch<risto>s B<og>ь. a iže upovaetь na
 prostь čl<ově>kь. to my i togo prokleta tvorimь.” paky že inu pritěju
 předložiša^{v17} (aor.3pl.: CompSp.aor.3pl.) g<lago>ljušte^{v17} (Prt.pr.). “kako vy

59 以下写本の行数にして29行分を省略した。

60 「イザヤ」66.7。

61 行上に後世の筆跡でvと書き込みがある。Vaillant (1968: 21)、Lehr-Spławiński (1959: 49) と
 も vašego となっている。ここでも意味の解釈に際してはこれに従って vašego と読む。

62 「創世記」9.26。

63 「創世記」9.27。

64 「詩篇」41.9 (70人訳40.10)。Vaillant (1968b: 注X-75) は『コンスタンティノス伝』編纂者
 が詩篇の意味を取り違えて引用したとする。

65 このaは写本では一旦書き手によって消されているが、Vaillant (1968a) はこのaを採用する。
 ここでもそれにならった。

14112 chr<i>stýjane obrězanie otmeštete. a⁶⁵ Ch<rist>u ne otverǵšu ego. nъ po
 14113 zakonu skončevšju.” otvěšta^{V18} (aor.3pl.) filosofъ^{S18}. “iže bo reče prъvѣe kъ
 14114 Avraamu. «se budi znamenie mežju toboju i mnoju.»⁶⁶ toi sverši e. prišedъ. i ot
 14115 togo deržavše do sego. a proče ne dastъ emu mimo iti. no kr<e>štenie namъ
 14116 podastъ.” rekoša^{V19} (aor.3pl.) že oni^{S19} “to čto radi inii pervѣi ugodišę B<o>gu. togo
 14117 znamenija ne priimše. nъ Avraamle.” otvěšta^{V20} (aor.3sg.) filosofъ^{S20}. “nikotoryi že
 14118 bo ot tѣchъ javlęetse. dvѣ ženѣ imѣvъ. no tokmo Avraamъ. i sego radi uda togo
 14119 urězaetъ. predělъ radi daja ne prestupati ego dale. [...]”⁶⁷ Avraamъ že togo ne
 14120 razumѣ.” paky že vъprosiša^{V21} (aor.3pl.) i Ijudѣi^{S21}. “kako vy idolom sę klanęjušte.
 14121 tvoritesę B<o>gu ugažati.” o ikonѣ. otvěšta^{V22} (aor.3sg.) filosofъ^{S22}. “Pervoe sę
 14122 naučite razdělęti imena. čto estъ ikona. i čto estъ idolъ. i tako smotręšte. ne
 14123 postupajte na chr<e>stýjany. [...]”⁶⁸ chulęť bo knigy. žruštaja s<y>ny svoja i
 14124 dšteri. i gněvъ B<o>žii propovędajutъ. takožde drugę chvalęť žruštaję s<y>ny
 14125 svoa. i dšteri.” rekoša^{V23} (aor.3pl.) že paky Iudei^{S23}. “kako vy svininu. i zajačinu
 14126 jadušte. ne protivitesę B<o>gu.” otvěšta^{V24} (aor.3sg.) že kъ nimъ. “prъvomu
 14127 zavętu zapovędajuštu. vsę sъněste jako zelię travnoe. «vsę» bo «č<i>staa čistym
 14128 sut. a skvernym i sъvēstъ sę estъ oskvernila.»⁶⁹ i B<o>gъ bo vъ tvari g<lago>letъ.
 14129 «se vsę dobra dzělo.»⁷⁰ vašego radi lakomъstva. malo i někoe ot nich otjatъ.
 14130 «sъněstъ» bo. reč<e> «Iakovъ i nasytisę. i otvręžesę vъzljublennyi.»⁷¹ I paky.
 14131 «sědoše Ijudie jasti i piti. i vъstaša igratъ.»⁷² †⁷³ ot mnoga že my se ukračšę

14132 14133 14134 14135 14136 14137 14138 14139 14140 14141 14142 14143 14144 14145 14146 14147 14148 14149 14150 14151 14152 14153 14154 14155 14156 14157 14158 14159 14160 14161 14162 14163 14164 14165 14166 14167 14168 14169 14170 14171 14172 14173 14174 14175 14176 14177 14178 14179 14180 14181 14182 14183 14184 14185 14186 14187 14188 14189 14190 14191 14192 14193 14194 14195 14196 14197 14198 14199 14200 14201 14202 14203 14204 14205 14206 14207 14208 14209 14210 14211 14212 14213 14214 14215 14216 14217 14218 14219 14220 14221 14222 14223 14224 14225 14226 14227 14228 14229 14230 14231 14232 14233 14234 14235 14236 14237 14238 14239 14240 14241 14242 14243 14244 14245 14246 14247 14248 14249 14250 14251 14252 14253 14254 14255 14256 14257 14258 14259 14260 14261 14262 14263 14264 14265 14266 14267 14268 14269 14270 14271 14272 14273 14274 14275 14276 14277 14278 14279 14280 14281 14282 14283 14284 14285 14286 14287 14288 14289 14290 14291 14292 14293 14294 14295 14296 14297 14298 14299 14300 14301 14302 14303 14304 14305 14306 14307 14308 14309 14310 14311 14312 14313 14314 14315 14316 14317 14318 14319 14320 14321 14322 14323 14324 14325 14326 14327 14328 14329 14330 14331 14332 14333 14334 14335 14336 14337 14338 14339 14340 14341 14342 14343 14344 14345 14346 14347 14348 14349 14350 14351 14352 14353 14354 14355 14356 14357 14358 14359 14360 14361 14362 14363 14364 14365 14366 14367 14368 14369 14370 14371 14372 14373 14374 14375 14376 14377 14378 14379 14380 14381 14382 14383 14384 14385 14386 14387 14388 14389 14390 14391 14392 14393 14394 14395 14396 14397 14398 14399 14400 14401 14402 14403 14404 14405 14406 14407 14408 14409 14410 14411 14412 14413 14414 14415 14416 14417 14418 14419 14420 14421 14422 14423 14424 14425 14426 14427 14428 14429 14430 14431 14432 14433 14434 14435 14436 14437 14438 14439 14440 14441 14442 14443 14444 14445 14446 14447 14448 14449 14450 14451 14452 14453 14454 14455 14456 14457 14458 14459 14460 14461 14462 14463 14464 14465 14466 14467 14468 14469 14470 14471 14472 14473 14474 14475 14476 14477 14478 14479 14480 14481 14482 14483 14484 14485 14486 14487 14488 14489 14490 14491 14492 14493 14494 14495 14496 14497 14498 14499 14500 14501 14502 14503 14504 14505 14506 14507 14508 14509 14510 14511 14512 14513 14514 14515 14516 14517 14518 14519 14520 14521 14522 14523 14524 14525 14526 14527 14528 14529 14530 14531 14532 14533 14534 14535 14536 14537 14538 14539 14540 14541 14542 14543 14544 14545 14546 14547 14548 14549 14550 14551 14552 14553 14554 14555 14556 14557 14558 14559 14560 14561 14562 14563 14564 14565 14566 14567 14568 14569 14570 14571 14572 14573 14574 14575 14576 14577 14578 14579 14580 14581 14582 14583 14584 14585 14586 14587 14588 14589 14590 14591 14592 14593 14594 14595 14596 14597 14598 14599 14600 14601 14602 14603 14604 14605 14606 14607 14608 14609 14610 14611 14612 14613 14614 14615 14616 14617 14618 14619 14620 14621 14622 14623 14624 14625 14626 14627 14628 14629 14630 14631 14632 14633 14634 14635 14636 14637 14638 14639 14640 14641 14642 14643 14644 14645 14646 14647 14648 14649 14650 14651 14652 14653 14654 14655 14656 14657 14658 14659 14660 14661 14662 14663 14664 14665 14666 14667 14668 14669 14670 14671 14672 14673 14674 14675 14676 14677 14678 14679 14680 14681 14682 14683 14684 14685 14686 14687 14688 14689 14690 14691 14692 14693 14694 14695 14696 14697 14698 14699 14700 14701 14702 14703 14704 14705 14706 14707 14708 14709 14710 14711 14712 14713 14714 14715 14716 14717 14718 14719 14720 14721 14722 14723 14724 14725 14726 14727 14728 14729 14730 14731 14732 14733 14734 14735 14736 14737 14738 14739 14740 14741 14742 14743 14744 14745 14746 14747 14748 14749 14750 14751 14752 14753 14754 14755 14756 14757 14758 14759 14760 14761 14762 14763 14764 14765 14766 14767 14768 14769 14770 14771 14772 14773 14774 14775 14776 14777 14778 14779 14780 14781 14782 14783 14784 14785 14786 14787 14788 14789 14790 14791 14792 14793 14794 14795 14796 14797 14798 14799 14800 14801 14802 14803 14804 14805 14806 14807 14808 14809 14810 14811 14812 14813 14814 14815 14816 14817 14818 14819 14820 14821 14822 14823 14824 14825 14826 14827 14828 14829 14830 14831 14832 14833 14834 14835 14836 14837 14838 14839 14840 14841 14842 14843 14844 14845 14846 14847 14848 14849 14850 14851 14852 14853 14854 14855 14856 14857 14858 14859 14860 14861 14862 14863 14864 14865 14866 14867 14868 14869 14870 14871 14872 14873 14874 14875 14876 14877 14878 14879 14880 14881 14882 14883 14884 14885 14886 14887 14888 14889 14890 14891 14892 14893 14894 14895 14896 14897 14898 14899 14900 14901 14902 14903 14904 14905 14906 14907 14908 14909 14910 14911 14912 14913 14914 14915 14916 14917 14918 14919 14920 14921 14922 14923 14924 14925 14926 14927 14928 14929 14930 14931 14932 14933 14934 14935 14936 14937 14938 14939 14940 14941 14942 14943 14944 14945 14946 14947 14948 14949 14950 14951 14952 14953 14954 14955 14956 14957 14958 14959 14960 14961 14962 14963 14964 14965 14966 14967 14968 14969 14970 14971 14972 14973 14974 14975 14976 14977 14978 14979 14980 14981 14982 14983 14984 14985 14986 14987 14988 14989 14990 14991 14992 14993 14994 14995 14996 14997 14998 14999 15000

66 「創世記」17.11。

67 以下写本の行数にして7行分を省略した。

68 以下写本の行数にして17行分を省略した。

69 「テトス」1.15。

70 「創世記」1.31。

71 「申命記」32.15。

72 「出エジプト記」32.6、「Iコリント」10.7。

73 †↑↑↑の部分 (ot mnoga že ... jako i plamenъ palęstъ na protivnyę. 「(そこで語られた) 多くのことから…燃え上がる炎のような (言葉の力を) 知るのである」) は、コメントタイプのテキストに分類した。

(Prt.pt.). vъ malě položichomъ(aor.1pl.). seliko paměti radi. a iže choštete sъvъrъšenych besědъ. sich s<vja>tych iskati vъ knigach ego. obrěštete(pr.2pl.) ę. eže preloži(aor.3sg.) učitelъ naš i archiep<i>s<ku>pъ Mefodii. bratъ Konstantina filosofa. razděli(aor.3sg.) e na osmъ slovesъ. i tu uzrěvъ(Prt.pt.) slovesnuju silu ot B<o>žia bl<a>godati. jako i plamenъ palěštъ na protivnyę. †† si že vъsę kaganъ Kazareskъ. sъ načęlnymi mužī^{S25} sladkaa i podobnaa ego slovesa slyšavše^{V25} (Prt.pt.). rekoša^{V26} (aor.3pl.) kъ nemu. “B<o>gomъ esi sěmo poslanъ. na sъzdanie naše. i vsę knigy uměeši ot nego. vъse esi po činu gla<gola>lъ dosyti. naslaždъ vsę ny medvenya sladosti. slovesy s<vja>tych knigъ. no my esmy nekniznaa čędъ. semu že věru imemъ. jako se tako estъ ot B<o>ga. pače že ašte chošteši pokoiiti d<u>ša našę. vsęko ispravlenie pritčęmi. skaži namъ po činu. egože u tebe vъprašaemъ. tako že sę radzidoša^{V27} (aor.3pl.) počity. [376b-10]

b. V1žeS1-V2S2-S3žeV3-V4S4-V5-V6S6-S7V7-V8-V9-V10-V11-S12V12-V13-V14S14-V15žeS15-S16žeV16-V17-V18S18-V19žeS19-V20S20-V21S21-V22S22-V23žeS23-V24-S25V25-V26-V27.

c. 哲人は^{S1} 言った^{V1} [A] 「このようにモーセは言っている。《もし（あなた方が）私の言うことにひたすら聞き従い、すべてにわたって律法を守るなら》、《あなた方の分け前の地は、紅海からペリシテ人の海まで及び、荒野からエウフラテス川まで（及ぶだろう）。》そして私たち異邦人は、アブラハムの種（から出た者）によって祝福され、《またエッサイの根から出た者によって（祝福を受ける）。》[…] あなた方にはどのようなものと思えるか。鉄の帝国、ダニエルが（その）像の（幻の）中で述べたところの（鉄の帝国）は？」。彼らは^{S2} 答えた^{V2} 「ローマです」。哲人は^{S3} 彼らに尋ねた^{V3} 「《石が山から人の手（の助け）なしに離れた。》これは誰か」。彼らは^{S4} 答えた^{V4} 「油注がれた者です」。また（彼らは）言った^{V5} 「もし（私たちが）、預言者たちや他の証拠によって、その者がすでに来ているということを認めるとして、（これは）あなたがそう言っているわけだが、どうしてローマ帝国は今日にいたるまで権力を持っているのか」。哲人は^{S6} 答えた^{V6} [B] 「（それは）もはや存続してはいない。（それはすでに）過ぎ

去ってしまったのである。(それは) 他の(帝国)と同様に(ダニエルの) 像の姿に従って(過ぎ去ってしまったのである)。私たちの帝国はローマの帝国ではない。キリストの(帝国)なのである。預言者が言っている通りである。[…]
なぜならイザヤは言っている。《女が苦しんで産む前に、すなわち産む時が来る前に、(彼女は) 苦しみを去り、男の子を産んだ。》」再びユダヤ人たちが^{s7}言った^{v7}「私たちはセムから出たものであり、祝福された種である。(そして私たちは) 私たちの父ノアによって祝福されている。しかしあなた方はそうではない」。(哲人は) 彼らにこのことについて教え示し^{v8}、そして言った^{v9}「あなたの方の父の祝福は他の何ものでもない、ただ神を誉め称えることである。そして彼(セム)には何も属さない。なぜならそれは(こういうこと)だからである。
《主、セムの神は祝福されている。》」一方で(彼は、(そこから) 我々が出ていくところのヤベテに言った。《主なる神がヤベテを大きくされるように。そして(彼が) セムの天幕に住むように》」。そして(彼は) 預言者たちから、また他の書物から(引用して) 示し^{v10}、彼ら(ユダヤ人たち)を離さなかった^{v11}。(すなわち彼ら) 自らが^{s12}このように言う^{v12}まで(離さなかったのである)、「その通り、あなたが言われる通りです」と。(彼らは) 再び言った^{v13}「どうしてあなた方は(一人の) 人に望みをかけながら、(自分たちが) 祝福されているとしているのですか。聖書はこのような人を呪っているではありませんか」。哲人は^{s14}答えた^{v14}「それでは、ダビデは呪われているのか。それとも、祝福されているのか」。彼らは^{s15}言った^{v15}「大いに祝福されています」。哲人は^{s16}言った^{v16}「それでは私たちもこの(人)に望みをかけます。(すなわち) 彼が(望みを) かけているその人に(望みをかけるのです)。(彼は) 詩篇の中で(こう) 言っているではありませんか。《なぜなら、私の平安の人、その人に対して(私が) 望みをかけた人》、この人こそはキリスト、神です。しかし、唯の人に望みをかける人は、私たちもそのような人は呪われているとします」。(彼らは) 再び別のたとえを引いて言った^{v17}「どうしてあなた方キリスト教徒は割礼を拒むのか。キリストはこれを拒まなかったではないか。(拒まずに) 律法に従ってこれを行なったではないか」。哲人は^{s18}答えた^{v18}「なぜなら、初めにアブラハムに言

われた方、(すなわち)《これが、あなたと私の間のしるしとなるだろう》(と言われた方)、この方が、(地上に) やって来て、それを行われた。そしてその者(すなわちアブラハムの時)から、この方(すなわちキリストの時)まで、(人々はこれを)守って来た。しかし(キリストは)それ以降はそれがそのまま続くことを許されず、私たちに洗礼を与えられたのである」。彼らは^{S19} 言った^{V19}「それでは、どうして、他の人々は初め(から) 神の氣に入られたのか。(彼らは) その(洗礼という) しるしを受け入れず、アブラハムの(割礼というしるし)を(受け入れていたのに)」。哲人は^{V20} 答えた^{S20}「この者たちのうちの誰も、二人の妻を持って現れたものはいない。ただアブラハムだけがそうであった。そしてその故に、(神は) この者の(体の) 部分を切り取られ、境界を与えられ、これをもはや犯さないように(されたのである)。[…] しかしアブラハムはこのことを理解しなかった」。またユダヤ人たちは^{S21} 尋ねた^{V21}「どうして、あなた方は偶像を礼拝しながら、(自分を) 神に氣に入られる者としているのか」。イコンについて。哲人は^{S22} 答えた^{V22}「まず初めに、名前を区別することを学びなさい。(すなわち) 何が聖像であり、何が偶像であるか(その違いを区別しなさい)。そのように良く知った上で、キリスト教徒に対立することをやめなさい。[…] なぜなら聖書は、自分の息子たちや娘たちを生け贄に捧げる者たちを非難し、神の怒りをのべ伝えているが、(一方でまた) 同じように、自分の息子たち、そして娘たちを生け贄として捧げる他の者たちを誉め称えてもいるのである」。ユダヤ人たちは^{S23} 再び言った^{V23}「どうして、あなた方は、豚肉を、また兎の肉を食べていながら、神に背いていないのですか」。 (哲人は) 彼らに答えた^{V24}「第1の契約は言っている。《(あなた方は)、野の青い草(を食べるの)と同様、すべてを食べるでしょう。》なぜなら、《すべてのものは、清い人には清い。しかし汚れた人には、良心(さえ)も汚れてしまっている》からである。そして神は創世記のなかで言っている。《見よ。すべてのものは大変に良い。》(ただ)、あなた方のどん欲さのために、(神は)、それらの中から少しのもの、何らかのものを取り去ったのである。なぜなら、《ヤコブは食べて、満腹した—(神は) 言われた—そして愛されていたのに背いた。》さらに、《民

は座につき、食べ、そして飲んだ。そして（彼らは）戯れるために立った。》」
↑（そこで語られた）多くのことから私たちはこのことを要約し、小さな場所に収めた。このように、記憶のためである。しかし、これらの聖なる会話の完全な（記録）を探しだそうとする者は、これを彼の書物の中に見いだすであろう。（すなわち）私たちの教師にして、大主教（である）メトディオス、哲人コンスタンティノスの兄が翻訳し、これを8つの章に分けた（書物の中に見いだすであろう）。そこで（人は）、神の祝福から出た言葉の力、敵対する者たちに対して燃え上がる炎のような（言葉の力を）知るのである。†† ハザールの汗とその高官たちは^{S25}、これらすべての甘く尊敬に値する彼の言葉を聞くと^{V25}、彼に向かって言った^{V26}「あなたは神によって、私たちの教化のために、ここに送られたのです。（あなたは）彼によって、すべての聖書を知っており、すべてを、整然と、（我々が）満足するまで、語ってくれました。（あなたは）私たち全員を蜜の甘さをもって喜ばせ、聖なる書物の言葉をもって（喜ばせてくれました）。しかし私たちは無学な民です。しかし（私たちは）このことを信じます。このことが、そのように神から出たものであることを（信じます）。さらに、（あなたが）私たちの魂を安らかにしようと望むなら、すべての説明を、たとえをもって、私たちに順を追って話してください。（私たちが）あなたに尋ねることを（すべて話して下さい）」。

このようにして、（人々は）休息をとるために散っていった^{V27}。

以上の観察により、『過ぎし年月の物語』で様式化された語りのスタイルを作り出すために重要な役割を果たしていたSzeV構文が、『コンスタンティノス伝』の事実叙述タイプのテキストでも使用されていることを確認した。しかしそこでは、VS語順の節が基本となってSzeVが現れるという交替のパターンは観察されない。むしろ全体としてSV、VS、SzeV、VzeSという4つの語順が自由に使用されているように見える。その中で多数を占める基本語順に当たるものは存在しない。また、このSzeV構文も対話の文脈という特定の文脈で頻繁に現れるものの、事実叙述タイプのテキスト全体を規定するものではない。しかも、その対話の文脈においても、必ずしもSzeV構文が現れる

訳でもない。以上のことは、『コンスタンティノス伝』の事実叙述のテキストにおける語りが特定の文体に固定しておらず、自由に一回ごとの工夫によって語られていることを示している。

2.2.2. SzeV構文と発話動詞

対話の場面で使用されるのは何よりもまず発話動詞である。そこでSzeV構文が、『コンスタンティノス伝』では専ら対話の文脈で使用されるという観察は、次のような調査で確認することができる。(7)の表Iによれば『過ぎし年月の物語』では事実叙述タイプの主節においてSzeV構文が257例現れる。また後述の(24)の表IIに示されるように『コンスタンティノス伝』では68例現れる。そこで、それらの例で使用されている動詞を調査し、発話動詞とそれ以外の動詞に分けて集計すると次の表のような結果が得られる。『メトディオス伝』についての調査結果もここで示しておく。ただしその例はあまり多くない。

(14) SzeV構文に現れる動詞のタイプ

	発話動詞	他の動詞	総計
『過ぎし年月の物語』	36 (14.0%)	221 (86.0%)	257
『コンスタンティノス伝』	49 (72.1%)	19 (27.9%)	68
『メトディオス伝』	2 (28.6%)	5 (71.4%)	7

この表を見ると、『過ぎし年月の物語』では発話動詞に限らず他の動詞も自由にSzeV構文に現れることができるが、『コンスタンティノス伝』では何よりもまず発話動詞がSzeV構文に現れることが確認される⁷⁴。データの数はいくつか少ないものの『メトディオス伝』も『過ぎし年月の物語』と同じ傾向を示す。『過ぎし年月の物語』ではこの構

74 『過ぎし年月の物語』に現れた発話動詞36例の内訳はrešti「言う」のアオリスト29例、glagolati「言う」のアオリスト5例、nareči「言う」のアオリスト1例、povědatiのアオリスト1例である。『コンスタンティノス伝』に現れた発話動詞49例の内訳はrešti「言う」のアオリスト34例、otbveštati「答える」のアオリスト11例、vyprositi「訊ねる」のアオリスト2例、複合的発話動詞posla rekъ「使者を送って言った」(aor.+Prt.pt.)とprosi glagolje「頼んで言った」(aor.+Prt.pr.)各1例である。

文が自由に幅広い文脈で現れることができるのに対し、『コンスタンティノス伝』では特定の語彙、特定の文脈と結びついて現れ、事実叙述タイプ全体を規定する語りのスタイルを作り出す手段とはなっていないことになる。

一方、『過ぎし年月の物語』に比べ『コンスタンティノス伝』の方がSzeV構文を好むということも、発話動詞についてのもう一つの調査から分かる。すなわち同じように発話動詞が使われている場合でも、『コンスタンティノス伝』の方がSzeV構文で現れる割合が高くなるのである。次の(15)は代表的な発話動詞rešti「言う」について、1) 事実叙述タイプのテキストで、2) 主節において、3) 語順についての議論に参与する場合⁷⁵、という条件の下でどのような語順を取るかを調べた結果である。

(15) 発話動詞reštiが使用されときの語順

	SV	SzeV	VS	VzeS	小計	V	総計
『過ぎし年月の物語』	3 (3.7%)	27 (32.9%) [18.9%]	40 (48.8%)	12 (14.6%)	82	61	143
『コンスタンティノス伝』	2 (3.5%)	34 (59.7%) [40.5%]	8 (14.0%)	13 (22.8%)	57	27	84
『メトディオス伝』	2 (33.3%)	1 (16.7%) [8.3%]	3 (50.0%)	0 (0%)	6	6	12

これを見ると、『コンスタンティノス伝』では、reštiが使用される場合その60%がSzeVの形を取っていることが分かる。発話動詞がSzeV構文を非常に好んでいる証拠である⁷⁶。一方、『過ぎし年月の物語』では特にそのような傾向は見られない⁷⁷。『メトディオス伝』も『過ぎし年月の物語』と同じく、特にそのような傾向を示さない。

75 注13および下の注103を参照。

76 ただし前節で指摘した通り、対話の文脈でreštiが使われたからと言って、必ずしも常にSzeVの形をとるわけではないことも事実である。

77 それぞれの個数の下の丸括弧内の百分率は明示的な主語が現れる場合を100とした場合の比率、また特に問題のSzeV構文について角括弧の中に示した数字は主語を持たないVだけの節をも含めた全体に対する比率である。なおaSV語順の例は存在しない。

2.3. 古教会スラブ語福音書における発話動詞と SzeV 構文

前節で見たような対話の文脈における SzeV 構文の使用、発話動詞と SzeV 構文の結びつきは、実は『コンスタンティノス伝』以前に最も古いスラブ語文献としての古教会スラブ語福音書で観察される。

福音書では主として *glagolati* 「言う」と *rešti* 「言う、述べる」という 2 つの発話動詞が使用される。そして *rešti* の場合に SzeV 構文が現れる。*glagolati* のアオリスト *glagola*/*glagolaše* (aor.3sg./3pl.) は、主としてギリシア語の歴史的現在 λέγει / λέγουσιν (pr.3sg./3pl.) に対応し、発話行為の生起が特には予測できない文脈に現れて、発話行為の生起を述べるために使用される。一方、*rešti* のアオリスト *reče*/*reše* (aor.3sg./3pl.) はギリシア語の第 2 アオリスト εἶπεν/εἶπον (2aor.3sg./3pl.) に対応し、発話行為の出現の予想される文脈、すなわち対話の文脈に現れて内容的に重要な発話を導入する。そしてこのアオリスト *reče*/*reše* が SzeV 構文の形で現れるのである。次の (16) の *онъ*^{S4} *že reče*^{V4} 「彼は…言った」、(17) の *онъ*^{S3} *že reče*^{V3} 「彼（イエス）は…言った」、*i<su>s<ъ>*^{S5} *že reče*^{V5} 「イエスは…言った」である。主語として遠称の指示代名詞 *онъ* が現れることも観察される⁷⁸。

- (16) [Mt.20.20] Тѣгда пристѣпи^{V1} къ нему мати^{S1} s<y>novu Zevedeovu. съ s<y>нѣма svoima klanějašti^{V2} сѣ. i prosešti^{V3} (⇐ αἰτοῦσα) něčeso отъ nego. [21] онъ^{S4} že reče^{V4} (⇐ εἶπεν) ei “čъto chošteši.” g<lago>la^{V5} (⇐ λέγει) emu “rъci da sѣdete съě s<y>ny moě. edinъ o desnajaъ tebe i edinъ o šjujaъ tebe. vъ c<ě>s<a>rstvii tvoemъ.” [22] отъvěštavъ^{V6} (⇐ ἀποκριτεῖς) že I<su>s<ъ>^{S6} *reče*^{V6'} (⇐ εἶπεν). “ne věsta sѣ česo prosešta. možeta li piti čaša. jaže azъ imamъ piti. li krъštenie eže azъ krъštajaъ sѣ krъstiti sѣ.” g<lago>lase^{V7} (⇐ λέγουσιν) emu “moževě.”

「マタイ」20.20 そのとき、ゼベダイの子たちの母が、2 人の息子といっしょに彼（イエス）のもとに来て^{V1}、ひれ伏して^{V2}、彼に何事かを頼もうとした^{V3}。彼は^{S4}彼女に言った^{V4}「何を望むのですか」。(彼女は) 彼に言った^{V5}「私のこの

78 引用はともに Codex Marianus より。

ふたりの息子が、あなたの御国で、一人はあなたの右に、一人は左に座るよう
におことばを下さい」。イエスは^{S6}彼女に答えて言った^{V6}「あなたがたは自分が
何を求めているのか、分かっていないのです。私が飲もうとしている杯を飲む
ことができますか。あるいは私がつけられる十字架につくことができますか」。
(2人は) 彼に言った^{V7}「(私たち2人は) できます」。

- (17) [Mt.19:16] I se eterъ^{S1} → pristapъ^{V2} ← reče^{V1} (⊢ εἶπεν) emu. “učitelju blagy. čto
blago sъtvorja. da imamъ životъ věčny.” [17] онъ^{S3} же reče^{V3} (⊢ εἶπεν) emu. “čto
mę g<lagο>leši blaga. niktože blagъ tьkmo edinъ B<og>ъ. ašte li chošteši vъ
životъ vъniti. sъbljudi zapovědi.” [18] g<lagο>la^{V4} (⊢ λέγει) emu “kyję.”
I<su>s<ъ>^{S5} же reče^{V5} (⊢ εἶπεν) emu. “eže ne ubъeši. ne prěljuby sъtvoriši ne
ukradeši. ne lъžesъvědětelъ badeši. [19] čyti otca i materъ. i vъzljubiši
iskrъněago svoego ěko samъ se.”

「マタイ」19.16 すると、一人の人が^{S1}やって来て^{V2}彼（イエス）に言った^{V1}
「良き師よ。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでし
ょうか」。[17] 彼（イエス）は^{S3}その人に言った^{V3}「なぜ、私を良き（師）と呼
ぶのですか。良き方は神一人、他にはいません。もし、（あなたが）生命に入り
たいと思うなら、戒めを守りなさい」。[18] （その人は）彼に言った^{V4}「どの戒
めですか」。そこでイエスは^{S5}彼に言った^{V5}「殺さないこと、姦淫しない（こと）、
盗まない（こと）、偽り誓う者にならない（ことです）。[19] 父と母を敬いなさ
い。そしてあなたの近しい人をあなた自身のように愛する（ことです）」。

古教会スラブ語の福音書は、それぞれの語の形態ならびに語順について、可能なか
ぎりギリシア語原典に忠実に訳されている。この онъ же reče という節も、ギリシア語
の小詞 δε を伴う ὁ δε εἶπεν 「そこで彼は言った（冠詞・指示代名詞 (m.sg.N.) + 小詞 +
動詞 (2aor.3sg.)」⁷⁹ という節を忠実にスラブ語に置き換えたものである。従ってこれは

79 スラブ語の же はギリシア語の小詞 δε に対応する。

スラブ語本来の特徴というより、ギリシア語福音書の言語の特徴と考えるべきかもしれない。『コンスタンティノス伝』に現れる SzeV 構文も基本的に同じ性格を持つものと考えられる。

2.4. 直接引用タイプの語順について

次に直接引用タイプのテキストにおける語順、すなわち話言葉の語順について観察したい。次の例は、上の (13) で引いた部分に見られる直接引用の中から2箇所選んだものである⁸⁰。それぞれの発話を単位として語順を観察すると、いずれも全体として SV 語順の節が多いことが見てとれる。すなわち『コンスタンティノス伝』の言語も、『過ぎし年月の物語』と同様、話し言葉では SV が基本語順になることになる。なお『コンスタンティノス伝』では、この2つの例からも分かる通り、『過ぎし年月の物語』とは異なり登場人物の言葉、特にキュリロスの言葉の多くは、聖書からの引用部分を除いても、決して少数の節からなる短い断片的な発話ではない。それぞれが多くの節からなる長い発話であり、語順について論じる時も有効な資料となる。

(18) = [A] a. “tako Moisi^{S1} g<lago>let^{V1} (pr.3sg.) «ašte poslušajušte mene po vŕsemu chraniti zakonъ. [...].» I my jazyci^{S2} ot sěmeni Avraamlę bl<ago>s<lo>vimse^{V2} (pr.1pl.). «i ot Ieseeva korene išsedšimъ» «čaanie jazyk^{S1} narečenъ. i «světъ vŕsea zemlę^{S2} i vsěch ostrovovъ. «i slavoju B<o>žieju prosvěšteni.»^{S3} ne po tomu zakonu. ni městu pr<o>roci^{S3} vŕpijutъ^{V3} (pr.3pl.). reč<e>^{V4} (aor.3sg.) bo Zacharia^{S4}. «raduišę dzělo. dŕšti Sionova. se c<ěsa>rъ tvoi grędetъ krotokъ. [...].»^{S4} I paky. «potrebitъ oružie ot Efrema. i konъ ot Ier<u>s<a>lima. [...].»^{S5}

80 上の (13) で省略した箇所はここでは復活してある。ただしその中に含まれる聖書からの引用は、引用元を示した上で、なお一部省略した。

81 「創世記」49.10。

82 「イザヤ」42.6、「イザヤ」49.6、「使徒行伝」13.47。

83 「イザヤ」60.1-2、「ヘブル」1.3

84 「ゼカリヤ」9.9、「マタイ」21.5、「ヨハネ」12.15。Vaillant (1968b: 注X-42) では引用は「マタイ」あるいは「ヨハネ」からとする。

85 「ゼカリヤ」9.10。Vaillant (1968b: 注X-45) では、この部分のスラブ語テキストはギリシア

Iakov^{s5} že reč<e>^{v5} (aor.3sg.). «ne oskuděetъ knęz<ь> ot Iudy. ni igumenъ ot stegnu ego. [...].»^{s6} Sia vse viděšte^{v6} (Prt.pt.) skončana. i sъvrъšena. kogo inogo ždete. Danilъ^{s7} bo reč<e>^{v7} (aor.3sg.). ot agg<e>la naučenъ. «70 n<e>d<ě>lъ. do Ch<rist>a igumena.» eže estъ 400 i 90 lěť. «zapečętlěti viděnie i pr<o>roč<es>tvo.»^{s7} koe že li vy sę mnitъ želěznoe c<ěsa>rstvo. eže Danilъ vъměni vъ ikoně.” [376b-11]

b. S1V1-S2V2-S3V3-V4S4-S5žeV5-V6-S7V7

c. 「このようにモーセは^{s1}言っている^{v1}。《もし（あなた方が）私の言うことに聞き従い、すべてにわたって律法を守るなら、[...]。》そして私たち異邦人は^{s2}、アブラハムの種（から出た者）によって祝福され^{v2}、《またエッサイの根から出た者によって（祝福を受ける）。（彼は）諸国民の希望》と呼ばれ、《全地とすべての島々の光と（呼ばれている）。》こうして（私たちは）、神の栄光によって照らされるのである。》（このことはあくまでも）その律法によるのではなく、（その）場所によるのでもない。預言者たちが^{s3}呼ばわっている^{v3}通りである。なぜならゼカリヤは^{s4}言った^{v4}《大いに喜びなさい。シオンの娘よ。見よ、あなたの皇帝がやってくる。彼は柔和な人で[...]。》さらに、（こう言った）《（彼は）エフライムから武器を断ち、エルサレムから馬を（断つ）。[...]。》またヤコブは^{s5}言った^{v5}。《王はユダヤから滅び去ることはなく、指導者はその腰を（離れることはない）。[...]。》これらすべてのことが終わり、完成されたのを（あなた方は）見ている^{v6}のに、他の誰かを待っているのか。ダニエルは^{s7}言った^{v7}ではないか。（彼は）天使に教えられて（こう言った）『70週、（これが）主キリスト（の現れる）まで（の期間です）』。これは、幻と預言を封印するための490年のことである。あなた方にはどのようなものに思えるか。鉄の帝国、ダニエルが像の（幻の）中で述べたところの（鉄の帝国）は？」。

語テキストから離れているがブルガータ訳と一致しているとある。

86 「創世記」49.10。

87 厳密には引用とは言えないが「ダニエル」9.24-25を参照。

(19) = [B] a. “ne držíť^{V1} (pr.3sg.) se uže. mimo šlo^{V2} (l-part.) bo est’^{V27} (pr.3sg.: pf.3sg.).
 jakože i pročae po obrazu ikonnomu. Naše bo c<ěsa>rstvo^{S3} něs<ť>^{V3} (pr.3sg.)
 Rimŕsko. no Ch<risto>vo. jakože reč<e>^{V4} (aor.3sg.) pr<o>rokŕ^{S4}. «vŕzdvnęetŕ
 B<o>gŕ n<e>b<e>sny i c<ěsa>rŕstvo. eže vŕ věky ne istlęetŕ. [...]»⁸⁸ ne
 christianŕsko li estŕ. c<ěsa>rstvo n<y>ně. Ch<risto>vymŕ imenemŕ naricaemo.
 a Rimlęne^{S5} idolęch priležachu^{V5} (impf.3pl.). si^{S6} že ovo ot sego. ovo ot inogo
 jazyka i plemeni. vŕ Ch<risto>vo imę c<ěsa>rstvujutŕ^{V6} (pr.3pl.). jakože
 pr<o>rokŕ Isaiia^{S7} javlęetŕ^{V7} (pr.3sg.). glagolę^{V8} (Prt.pr.) kŕ vamŕ. «ostaviste imę
 vaše. vŕ sytostŕ izbrannym moim. [...]»⁸⁹ Ne sveršilo li se vse pr<o>ročŕskoe
 pror<e>čenie. jaže javę rečenaja o Ch<ri>s<t>ě. Isaija^{S9} bo skazaetŕ^{V9} (pr.3sg.:
 CompSp.pr.3sg.) r<o>ž<de>stvo ego ot d<ě>vy g<lago>lę^{V97} (Prt.pr.) sice. «i se
 d<ě>vaja vo črevę primetŕ. i roditŕ s<y>nŕ. i narekutŕ imę emu Emmanuilŕ.
 [...]»⁹⁰ i Michęja^{S10} rečę^{V10} (aor.3sg.). «i ty Vifleome. zemle Ijudova. nikako že
 menši esi vŕ vl<a>d<y>kachŕ Ijudovachŕ. [...]»⁹¹ Jeremęja že. «vŕprosite i vidite.
 ašte rodi mužesky polŕ. [...]»⁹² Isaija^{S11} bo rečę^{V11} (aor.3sg.). «preže daže bolęštija
 ne rodi. i preže daže ne pride r<o>ž<de>stvo. bolęzni izbęža. i rodi mužesky
 polŕ.» [377-12]

b. V1-V2-S3V3-V4S4-S5V5-S6žeV6-S7V7-V8-S9V9-S10V10-S11V11

c. 「(それは) もはや存続してはいない^{V1}。(すでに) 過ぎ去ってしまった^{V2}ので
 ある。(それは) 他の(帝国)と同様に(ダニエルの)像の姿に従って(過ぎ去
 ってしまったのである)。私たちの帝国は^{S3}ローマの帝国ではない^{V3}。キリスト
 の(帝国)である。(それは) 預言者が^{S4}言った^{V4}通りである。《神は天の帝国
 を打ち立てる。(それは) 永遠に滅びることはない。[…]。》今は、(これこそ
 が) キリストの帝国ではないだろうか。キリストの名をもって呼ばれる(帝国

88 「ダニエル」2.44。

89 「イザヤ」65.15-16。

90 本来は「イザヤ」7.14であるが「マタイ」1.23より引用。cf. Vaillant (1968b: 注X-61)。

91 「ミカ」5.2-3 (70人訳5.1-2)。ただし前半は「マタイ」2.6より。

92 「エレミヤ」30.6-7。

ではないだろうか)。しかしローマ人たちは^{s5}偶像に身を委ねていた^{v5}。これらは^{s6}、ある者はこの（民や種族の）、またある者は別の民や種族の（出であったのだが）、キリストの名において統治している^{v6}のである。これは預言者イザヤが^{s7}明らかにし^{v7}、あなた方に言っている^{v8}通りである。《（あなた方は）あなたの方の名を残した。（それは）私の選ばれた者たちの満腹するためである。[…。]》キリストについて明らかに述べられたすべての預言者たちの預言は成就しなかったであろうか。イザヤは^{s9}彼が乙女から生まれることを示してこのように言っている^{v9}ではないか。《そして、見よ。乙女がその胎の中に身ごもり、そして息子を産むであろう。そして（人々は）彼の名をインマヌエルと呼ぶであろう。[…。]》またミカは^{s10}言った^{v10}《そして、汝、ベツレヘム、ユダの地よ。（あなたは）ユダの君たちの中で決してもっとも小さい者ではない。[…。]》（また）エレミヤは（言った）《（あなた方は）尋ねなさい。（そうすれば）見るでしょう。（すなわち）男が（子を）産んだかどうか（を見るでしょう）。[…。]》なぜならイザヤは^{s11}言っている^{v11}。《女が苦しんで産む前に、すなわち産む時が来る前に、（彼女は）苦しみを去り、男の子を産んだ。》

ここでの観察は、話し言葉については、『コンスタンティノス伝』に見られる言語も『過ぎし年月の物語』に見られる言語も、基本的に同じ特徴を示すことを示唆している。ただし『コンスタンティノス伝』に記録されるコンスタンティノスの言葉が、スラブ語の特徴を示すのか、それともギリシア語の特徴を示しているのかについては、ここで論ずることはできなかった。

2.5. コメントタイプのテキストについて

すでに述べたように、そして次節の(24)表Ⅱでも確認できる通り、『コンスタンティノス伝』に現れるコメントタイプのテキスト部分は量的にはあまり多くない。従って、それにより何らかの有効な議論を行うことはできない。ここではコメントタイプに分類したテキスト部分の例をいくつか例示するに留めたい。

最も長いコメントが現れるのは、冒頭の М<ě>s<ja>ca fevruaria въ 14 žitije i žiznъ. i

podvizi. iže vь s<vja>tych o<t>ca našego Konstantina filosofa. prъvago nastavnika i učitelę Slověnъsku jazyku. bl<ago>s<lo>vi o<t>če. 「2月14日、諸聖徒の中にある我らの父、哲人コンスタンティノス、スラブの民の最初の指導者にして師父の一代記と生涯、そして霊の戦い。父よ、祝福を与えたまえ」というタイトルに続くI章全体である。次にその全部を引用する。

(20) a. «B<o>gъ m<i>l<o>stivyi i štedrъ»⁹³. «žadaa» na pokaanie čl<ově>če. «da byša sp<a>seni vьsi byli. i vь razumъ istinnyi prišli».⁹⁴ «ne chošet bo smrъti grěšnikomъ. no pokaania i životu»⁹⁵. ašte i naipač<e> priložit^{v1} (pr.3sg.) na zlobu. no ne ostavlęet^{v2} (pr.3sg.) čl<ově>ča roda otpasti oslableniemъ. i vь sьblaznъ neprijaznenъ priiti i pogybnuti. no na kajaždo ubo lęta i vremena. ne prestaetъ^{v3} (pr.3sg.) bl<a>godati tvorę^{v4} (Prt.pr.) namъ mnogye. jakože isprъva. taže i n<y>ně. prъvoe patriarchy. i otcy. i po tęch pr<o>roky. i po sich ap<o>s<to>ly. i mučeniky. i pravednymi muži. i učiteli. izъbiraa^{v5} (Prt.pr.) ich. ot mnogomlъvnago žitia sego. znaetъ^{v6} (pr.3sg.) bo g<ospod>ь^{s6} svoę. iže ego sutъ. jakože reče^{v7} (aor.3sg.). «ovcę moa glas moi slyšatъ. i az znaju ę. i imenem vъzyvaju ę. i po mně chodętъ i daju imъ životъ věčnyi.»⁹⁶ eže sъtvori^{v8} (aor.3sg.) vь našъ rod. vъzdvigi^{v9} (Prt.pt.) namъ učitelę sicego. iže prosvęti jazykъ našъ. slabostiju omračennyi umъ naš. pače že lestiju dъavoleju. i ne chotěvše^{v10} (Prt.pt.) «vь světě zapovědei b<o>žiih choditi.»⁹⁷ žitie^{s11} že ego javlęet^{v11} (pr.3sg.) i pomalu skazaemo. jakože běše^{v12} (impf.3sg.). da iže kto chošet to slyša. podobitisę⁹⁸ emu. bodrostъ priemlę. i lęnostъ otmętaa. jakože reč<e>^{v13} (aor.3sg.) ap<o>s<to>ь^{s13}.

93 「ヨエル」2.13。木村・岩井(1984)による。Lehr-Spławiński(1959)、Vaillant(1968b)では特に聖書からの引用という指摘はない。

94 「Iテモテ」2.4。

95 「エゼキエル」18.23或いは33.11、「IIペテロ」3.9。

96 「ヨハネ」10.27-28、あるいは「ヨハネ」10.3との合成。

97 「Iヨハネ」1.7。

98 Lehr-Spławiński(1959: 5)の再建テキストではこれがpodobitъ sę (pr.3sg.)になっている。こ
こでもその読みに従う。但しda命令法なので語順に関してデータには数えない。

«podobni mi byvaite, jakože i azъ Ch<rist>u.»⁹⁹ [365-12]

b. V1-V2-V3-V4-V5-V6S6-V7-V8-V9-V10-S11žeV11-V12-V13S13

c. 《憐れみに富み、心寛き神》は、《すべて（の人々）が救われ、真の悟りへといたるよう》、人々の悔い改めを求めるのである。（神は）たとえ（人が我が身を）甚だしく悪に差し出そう^{V1}とも、《罪人たちに死を望まず、悔い改めと命を（望んでいる）のである。》しかし（神は）人類を弱さの故に墮落し、悪魔の誘惑に陥り、そして滅びるままにはしておかれない^{V2}。そうではなく、いかなる年も（いかなる）時も、倦むことなく^{V3}、私たちに多くの恵みを行われる^{V4}。（これは）はじめから（そうであり）、いまも（そうであり）、まずはじめは族長たち、長老たち、次に預言者たち、ついで使徒たちと殉教者たち、そして義人たちと師父たちによって（そうされたのであり）、彼らをこの騒がしき生から選り出して^{V5}（そうされたのである）。主は^{S6}ご自分の者たち、彼のものである者たちを知っておられるのである^{V6}。このように言われた^{V7}通りである、《私の羊は私の声を聞く。そして私も彼らを知っている。（私は）彼らを名前で呼び、（彼らは）私に従ってくる。そして（私は）彼らに永遠の命を与える》と。（神は）このことを私たちの世代のためにも行われた^{V8}。（神は）私たちのためにこの世の師父を立てられ^{V9}、（彼は）私たちの民族を教化した。（しかし）私たちの知恵は、弱さのゆえに曇らされ、さらには悪魔の奸計によって（曇らされている）。そして（私たちは）《神の教えの光の中を歩こうとは》しなかった^{V10}。（この）彼の一代記は^{S11}、手短に述べられたものであるが、（その生涯が）どうであった^{V12}かを示す^{V11}ものであり、欲する者がこれを聞き、新しい力を得、怠惰を打ち捨て、彼にならう者となるためのものである。使徒が^{S13}言った^{V13}通りである、《私がキリストに（なろうように、あなたがたも）私にならう者となりなさい》と。

これに対して、この伝記の末尾のコメントは非常に短くあっさりしている。次の

99 「Iコリント」11.1、あるいは4.16。

(21) がそれである。最後の XVIII 章で、コンスタンティノスの死後、彼を葬った記事の後に現れる言葉であり、これによりこの伝記が閉じられる¹⁰⁰。コメントと呼ぶにふさわしい十分な内容を持っているか否かは別として、分類としてはこれもコメントタイプとせざるを得ない。

(21) a. tomu bo estъ^{VI} (pr.3sg.) *slava*¹⁰¹ i č<e>stъ^{SI} vъ věky. aminъ. [389b-17]

b. VISI

c. なぜなら、この方（すなわち神）にこそ、栄光と栄誉が^{SI}永遠にある^{VI}からである。アーメン。

この初めと終わりのコメントの間に、幾つかの短いコメントが入る。上の (13) で引いた部分にもハザールとの争論の記述の途中に次のようなコメントが現れる。

(22) a. ot mnoga že my^{SI} → se ukračъše^{V2} (Prt.pt.). ← vъ malě položichomъ^{VI} (aor.1pl.). seliko paměti radi. a iže choštete sъvvrъšenych besědъ. sich s<vja>tych iskati vъ knigach ego. obrěštete^{V3} (pr.2pl.) ě. eže preloži^{V4} (aor.3sg.) učitelъ naš i archiep<i>s<ku>pъ Mefodii. bratъ Konstantina filosofa^{S4}. razděli^{V5} (aor.3sg.) e na osmъ slovesъ. i tu uzrěvъ^{V6} (Prt.pt.) slovesnuju silu ot B<o>žia bl<a>godati.

100 次の様な事実叙述タイプのテキストの後に続く。i tako sъ rakojу vъložišta* i vъ grobъ. o desnuju stranu oltarę vъ c<e>rkvi s<vja>t<a>go Klimenta. ideže načęša togda mnoga čjudesa byvati. eže viděvše Rimlęne. bolě sę priložiša s<vja>tyni ego. i č<e>sti. i napisavše ikonu ego nad grobom. načęša světiti nad nim d<e>nъ i nošť. chvalešte b<o>ga. «proslavļęjuštągo tako že** i slavęť»***. 「そしてこのようにして（彼らは）棺とともに彼を墓の中に置いた。聖クリメント教会の祭壇の右側に（置いたのである）。そしてその時そこで、多くの奇跡が起り始め、これをローマの人々が見て、ますます彼の聖性を称え、彼に栄誉を与えようとするのだった。そして彼の像をその墓の上に描き、彼のうえで昼も夜も（ろうそくを）ともし始めた。そして（人々は）神を賛美した。《御自分を誉め称える人々をこのように讃えられた神を》（賛美したのである）」。* Lehr-Spławiński (1959: 93) では položišę、Vaillant (1968a:40) では vъložiša. ** Lehr-Spławiński (1959: 93)、Vaillant (1968a: 40) では iže. ここでも訳についてはその読みに従った。*** 「サムエル記上」2.30。必ずしも聖書本文の忠実な訳ではないが、Vaillant (1968b: 注 XVIII-15) に従って聖書引用とした。

jako i plamenъ palęšti na protivnyę. [379-12]

b. S1V1 [V2] V3-V4S4-V5-V6

- c. (そこで語られた) 多くのことから私たちは^{S1}このことを要約し^{V2}、小さな場所に収めた^{V1}。このように記憶のためである。しかしこれらの聖なる会話の完全な(記録)を探しだそうとする者は、これを彼の書物の中に見いだすであろう^{V3}。(すなわち) 私たちの教師にして大主教(である)メトディオス、哲人コンスタンティノスの兄が^{S4}翻訳し^{V4}、これを8つの章に分けた^{V5}(書物の中に見いだすであろう)。そこで(人は)、神の祝福から出た言葉の力、敵対する者たちに対して燃え上がる炎のような(言葉の力を)知る^{V6}のである。

さらに断片的なものも幾つかある。次はII章に見られるコンスタンティノスが母の乳で育てられたという記述に対するコメントである¹⁰²。

- (23) a. se^{S1} že bys<тъ>^{V1} (aor.3sg.) po b<o>žiju smotreniju. daby dobra koreni. dobra lętoraslb^{S2}. neskvernъnym mlekomъ vъzdoena^{V2} (Prt.P.pt.) byla^{V2'} (l-prt.: Cond. P.3sg.). [365b-20]

b. S1žeV1-S2V2

- c. これは^{S1}神のご判断によるものであり^{V1}、良い根からでた良い新芽が^{S2}、けがれのない乳で育てられる^{V2}ためであった。

2.6. 数量的観察

ここでは、上の2.2～2.5で文脈に基づいて観察した結果を数量的な調査により確認したい。次の(24)の表は、『コンスタンティノス伝』全体における動詞の語順を、主

101 写本ではこのslavaは抜けているがVaillant (1968a), Lehr-Splawiński (1959)に従い補った。

102 egda že rodi i m<a>ti. vъdaša i doilici. daby i doila. otročę že ne chotęše jatisę po čjužъ sъsecъ nikakože. razvě po m<a>terenъ. dondež<e> otdoenъ bys<тъ>. 「母が彼を産んだとき、(人々は)彼を乳母に預けた。彼に乳を飲ませるためである。しかし子どもは、乳離れするまで、どうしても母のもの以外の他人の乳房に身を委ねようとはしなかった」という事実叙述に続く。

節と従属節に分け、事実叙述、コメント、直接引用というそれぞれのタイプごとに数えたものである¹⁰³。コメントタイプについては、2.5に記したように出現例が非常に少なく有意義な議論の対象とするのは困難である。直接引用タイプについては、上の1.2.3で『過ぎし年月の物語』について調査した際にそうしたのと同様、1/2人称と3人称の場合を分けて数えた。しかし結果として、ここでも人称による差異は観察できなかった。(25)は結果をわかりやすく示すため、主節の場合に限ってグラフにしたものである。コメントタイプは省いた。直接引用タイプについては1/2人称の場合(B)と3人称の場合(C)が同じパターンとなることを確認した上で、両者を合計した数字に基づきDを作成した。

まず、2.2および2.4での観察結果が、この(24)の表で示された結果、(25)のAおよびDに見える結果と一致することが確認できる。同時に、上の(7)の表Iおよび(8)の図Iで見た『過ぎし年月の物語』についての調査結果との異同も明らかになる。

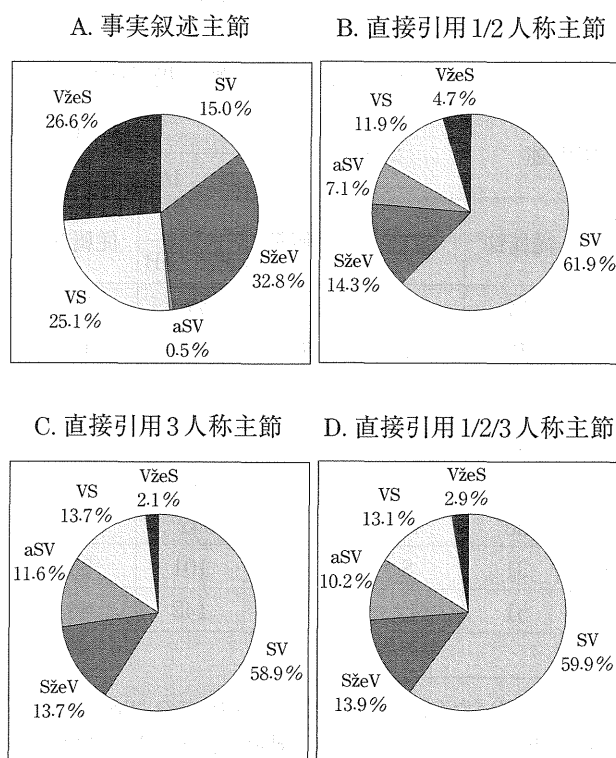
(24) 表II. 『コンスタンティノス伝』における語順、指示代名詞とテキストタイプ

	事実叙述		コメント		直接引用			
					1/2人称		3人称	
	主節	従属節	主節	従属節	主節	従属節	主節	従属節
	グラフA				グラフB		グラフC	
SV	31	14	1	1	26	11	₁ 56 ¹	₁ 58 ¹
SzeV	68 ²¹	0	2	0	6	0	₁ 13	₁ 4 ¹
aSV	1	0	0	0	3	1	11 ²	1
VS	52 ⁷	6	1	3	5	1	₂ 13	40
VzeS	55 ⁶	0	0	0	2	0	2	1
小計	207 ³⁴	20	4	4	42	13	₄ 95 ³	₂ 104 ²
V	320	31	8	7	101	53	76	66
計	527 ³⁴	51	12	11	143	66	171	170

103 この表は資料として用いたGBL所蔵MDA本No.19中の“Prostrannoe žitie Konstantina-Kirilla filosofa”に現れるすべての定動詞を対象に、節を単位に数えたものである。完了や受動文、あるいは複合的発話動詞のような複合形式は合わせて1個と数えた。また『過ぎし年月の物語』の場合と基本的に同じ原則に従って(上の注13を参照)語順に関する議論の対象とならないケースを除いてある。ただし、「3. 主語を持ちうるが意味的・語用論的な要因が語順に影響を与える可能性のある場合」について、あらたに「疑問文の場合」を加

事実叙述タイプの語順について、グラフAは『過ぎし年月の物語』についての(8)のグラフAとは明らかな違いを示している。『過ぎし年月の物語』で基本語順とされたVS語順の節の割合が減り、代わりにVzeS構文の使用が大幅に増えている。また単純なSV語順の節も若干だが増えている。話し言葉の特徴を示すaSV構文は全く現れない。その結果、全体としてSV、SzeV、VS、VzeSという4つの主要なタイプの使用が均等な割合に近づいている。多数を占める基本語順は存在しない。このことは『コンスタンティノス伝』では語順が自由であり、『過ぎし年月の物語』に見られるような様式化された語りのスタイルによって規定されていないという観察結果と一致する。『コンスタンティノス伝』では、謂わば可能なすべての語順、構文を用いて物語を語っているのである。

(25) 図Ⅱ. 『コンスタンティノス伝』における語順とテキストタイプ—主節の場合



さらにこのグラフAからは、単純なSVやVSよりもSzeVやVzeSという小詞zeを伴った構文の使用の方が多いことが見て取れる。本来ならzeを伴うのは、何らかの有標の

表現であると考えるのが自然である。しかし数の上から言えば、*že*を伴う方が無標ということになってしまう。2.2.2で見た、『コンスタンティノス伝』では小詞*že*の使用が好まれるという観察が裏付けられたことになる。それが『メトディオス伝』をも含む最初期のスラブ聖者伝の特徴なのか、それともこの『コンスタンティノス伝』の特徴なのかという点については、さらに次の章で見ることにする。

一方グラフDに示される直接引用タイプのテキストの特徴、すなわち話し言葉の特徴を対応する(8)のEと比べると、事実叙述の場合ほどには違っていないことが分かる。『コンスタンティノス伝』でも基本語順はやはりSVである。その際『コンスタンティノス伝』では、『過ぎし年月の物語』では殆どあるいは全くと言って良いほど現れなかったS*že*V構文やV*že*S構文が現れる。『コンスタンティノス伝』の言語では、話し言葉でも*že*を付けた表現が可能であり、かつ好まれることになる。

一方、表IIについて事実叙述タイプにおける遠称の指示代名詞 *онъ* の分布を見ると、『過ぎし年月の物語』では *онъ* の使用が事実上S*že*V構文と共起する場合に限られていたのに対し、『コンスタンティノス伝』ではVS語順の節、V*že*S構文の主語としても使用されるなど、より自由に現れることが分かる。すなわち指示代名詞 *онъ* も特定の様式化された語りのスタイルと直接には結びついていないことになる。

事実叙述タイプと直接引用タイプの両方の調査結果を合わせて考えると、『コンスタンティノス伝』の言語では、1) 事実叙述タイプのテキストで『過ぎし年月の物語』に見えるような語順を利用した様式化した語りのスタイルは存在しない、2) 話し言葉の基本語順はSVである、3) 小詞*že*の使用が好まれる、ことが確認されたと言えよう。一方で、この事実叙述タイプのテキストがより自由な文体で書かれているという観察

えた。これらの基準によってデータから外した節の数は全部で317個である。また「聖書引用」タイプと見なしうる節もこのデータから外したが、その数は336個であった。

なおこの表は佐藤(2007)の「(10)表II.『キリル伝』における語順、指示代名詞の使用とテキストタイプ」と基本的に同内容のものであるが、今回すべての例を数え直し、より正確な結果を出すよう努めた。その際、事実叙述タイプのSV語順のグループが佐藤(2007)の調査では42例あったのに対し、今回の調査では31と大幅に減っている。『過ぎし年月の物語』と『コンスタンティノス伝』における数量的調査を同じ基準で行うため、佐藤(2007)でSVと分類したもののうち10例を今回「分詞一名詞一定動詞」という配列により語順確定が困難な場合としてデータから除き、1例を「聖書引用」タイプに数え直したためである。

には一見反するようであるが、『コンスタンティノス伝』においても事実叙述タイプのテキストと話し言葉としての直接引用タイプのテキストの間に差異があることも分かる。事実叙述タイプのテキストはやはり書き言葉として表現に工夫をこらしていると考えられる。

2.7. 2章の議論のまとめ

本章の議論は次のようにまとめることができる。

(26) 2章の議論のまとめ

- 1) 『コンスタンティノス伝』でも、『過ぎし年月の物語』の事実叙述タイプのテキストで様式化された語りのスタイルを構成するための手段として重要であったSzeV構文が使用される。しかし『コンスタンティノス伝』におけるSzeV構文は、VS語順の節との対立の中で現れることはなく、対話の文脈という限られた範囲で発話動詞を主動詞とする場合に多く現れるという特徴を持っている。
- 2) 『コンスタンティノス伝』の事実叙述タイプのテキストではSV、VS、SzeV、VzeSという4つの語順がバランス良く使用されており、また遠称の指示代名詞 *onъ* の使用もより自由である。ここでは『過ぎし年月の物語』とは異なり、様式化された語りのスタイルは存在しない。一方で、やはり書き言葉として可能なすべての語順、構文を利用して効果的に物語を語る努力がなされていると考えることができる。
- 3) 直接引用タイプに見える話し言葉の語順は『過ぎし年月の物語』の場合も『コンスタンティノス伝』の場合もともにSVを基本とし、本質的に異ならないように見える。
- 4) 『コンスタンティノス伝』の言語では小詞 *že* が好んで使用される。これは書き言葉としての事実叙述タイプのテキストにおいても、話し言葉としての直接引用タイプのテキストにおいても同じである。

3. 『メトディオス伝』における語順と指示代名詞の使用¹⁰⁴

3.1. 『メトディオス伝』の構成とテキストのタイプ

『メトディオス伝』は885年のメトディオスの死後、あまり時をおくことなく成立したとされる¹⁰⁵。同じキュリロスとメトディオスの兄弟についての伝記でありながら『コンスタンティノス伝』と『メトディオス伝』では内容も書き方も異なっている。『コンスタンティノス伝』では、キュリロスの生涯について語る際、その生涯に起きた出来事、彼の行動を時間軸に沿って語るというより、むしろ彼自身が語った言葉、その内容を伝えることの方がより重要な目的となっている。追放された総主教ヨーアンネースとの対論、サラセン人との論争、そしてハザールの汗のもとでのユダヤ人との対決の様子が双方の主張を細かく引いて伝えられる。これに対して『メトディオス伝』では、メトディオスの生涯に起きた様々な出来事を時間的経過とともに述べていくという物語風のスタイルが取られる。その際物語の進行は早く、彼の語る内容は、『コンスタンティノス伝』におけるキュリロスの言葉ほどには重視されない¹⁰⁶。

104 以下の議論は *Žitija Kirilla i Mefodija* (1986). pp.181-246 所載 (ファクシミリ版: 183-210、転写テキスト: 212-246) の *Uspenskij sbornik XII-XIII vv.* (GIM (国立歴史博物館) *Uspenskoe sobranie*, No.4) 中の *Prostrannoe žitie Mefodia* に基づいて行った。この写本は12世紀のものとされ、『メトディオス伝』を伝える現存写本として最も古くかつ信頼されている。

105 作者はやはり不明であるが、『コンスタンティノス伝』の作者として名前の出たクリメント、そしてモラヴィア出身で兄弟の弟子となった Gorazd の名が挙がる。

106 2つの伝記の内容、スタイルの違いについて、すでに研究の初期の段階から指摘されている。Šafařík (1851) は『メトディオス伝』テキストへの序文の中で、『メトディオス伝』の現存の写本は縮約、抜粋されたものであり、事件から事件への移行が早く、前書きは長い、途中は明らかに省略されているとしている。Voronov (1877: 26-46) は『コンスタンティノス伝』と『メトディオス伝』の内容が重複せず、それぞれの伝記に現れるのが厳密にそれぞれの主人公のみであって、他の1人が現れないことに注目する。そしてこれは意図的に行われたとし、2つの伝記が同一の著者により最初から2つの著作となるように計画されたと主張する。彼は「かくして我々の考えるところでは、パンノニア伝を互いに独立して著作した異なる作者による作品と見ることは適当でない。両方の伝記に現れる証言は1人の作者による証言と見なすべきであり、両者に見られる若干の相違もこの観点から見ればべきである」(Voronov 1877: 46) とする。しかしこの同一人物による著作という説はその後の研究では受け入れられなかった。Weingart (1935) は2つの伝記について「すでに2つの伝説はビザンツの聖者伝の伝統的な図式に従っていることが指摘されている。しかしながら、両者の間には深い差異もある。それは内容に関するものではなくスタイルに関するものである」(106) としてスタイルの違いに言及した上で、両者の関係について「しかしながら構成

このような違いに応じて、テキストのタイプの分布にも特徴が見られる。既に見た通り、『コンスタンティノス伝』では事実叙述タイプのテキスト中で登場人物の言葉が豊富に、かつ長文に亘って引用される。それにより直接引用タイプのテキストに属する部分が多くなる。聖書からの引用も、『過ぎし年月の物語』におけるのとは異なり、コメントの中でなく、むしろこのキュリロスの言葉の中に現れることが多い。これに対して『メトディオス伝』ではメトディオスを始めとする登場人物の言葉が効果的に引かれ、物語を生き生きと語るのに役立つが、一方で彼の語る言葉の内容は必ずしも十分に伝えられているとは言えない。またここではロスチスラフ公や教皇ハドリアヌス2世の書簡が引用されている。これについては、下の(34)に示した数量的調査を行うにあたり、独立したタイプを立てた。しかしその分量は語順に関する議論に関与する節の数として見ると不十分で、有意義な議論の対象とはならなかった。

一方コメントタイプのテキスト部分は、『コンスタンティノス伝』では非常に限られていたのに対し、『メトディオス伝』では大きな割合を示す。冒頭の2つの章の全てがコメントタイプとして分類可能であり、これは全体の3分の1の量に当たる。ただしその内容は、メトディオスの生涯についてのコメントというより、むしろ前書きであり、神に対する賛美、感謝、神のわざの紹介という要素が大きい。その意味で『過ぎし年月の物語』のコメントとは異なる性格を持つものである。

3.2. 事実叙述タイプのテキストにおける語順と指示代名詞の使用について

事実叙述タイプのテキストについて、文脈を追いながら観察する。次は『メトディオス伝』IV章の全体で、コンスタンティノスとメトディオスがハザールのもとに遣わされた出来事が描かれている。ここでは単純なSV語順の節は現れずVS語順の節が多い。また онъ^{S5} že rekъ^{V5}「彼は言って」、sbъ^{S10} že ... přemožetъ^{V10}「この者は…打ち負かし」のようにSžeV構文も現れる。онъ^{S5}の先行詞は、間に従属節が入るため直前の節

という点から見ると、『メトディオス伝』の『コンスタンティノス伝』に対する関係は、「マルコによる福音書」が「ヨハネによる福音書」に対するようなものである。それらは異なる個性をもつ人格による作品である」(107)として、同一の著者による著作であることを否定している。

にはならないが、先行する *da pojatъ*^{V3} i *sъ soboju na pomošť* 「(コンスタンティノス)は彼を自分とともに助け手として連れて行った」という節の中で対格 *i* 「彼を」で示されるメトディオスである。このメトディオスが主格で現れるのは引用したIV章よりもさらに前の章である。従ってこれはテキスト上の照応関係において遠い位置にある先行詞を承けていることになる。一方近称の *sъ*^{S10} の指示するのは、直前の文 *povinuja*^{V9} の主語と連続して現れるメトディオスである¹⁰⁷。これは近い位置にある先行詞を指していることになる。このように見ると、この文脈における語順と指示代名詞の使用は、あたかも『過ぎし年月の物語』と同じであるように見える。しかしここで *SzeV* 構文と並んで *VzeS* 構文も同じように現れている点に注意したい。上の (24) で見た『コンスタンティノス伝』についての数量的調査でも、小詞 *že* を伴う *SzeV* 構文と *VzeS* 構文がやはり同じ程度の頻度で現れていたことも思い出される。これについては本章でも数量的に調査する。

(27) a. *priključbъju*^{V1} (Prt.pt.) *že se vřěmeni takomu*^{S1} . i *posъla*^{V2} (aor.3sg.) *c<ě>s<a>rъ*^{S2} po filosofa brata jeho vъ Kozary. *da pojatъ*^{V3} (aor.3sg.) i *sъ soboju na pomošť*. *bęachu*^{V4} (An.Impf.3pl.) *bo tamo židove*^{S4} *krъs<ti>janъskuju věru velъmi chulešte*^{V4'} . *onъ*^{S5} *že rekъ*^{V5} (Prt.pt.) *jako “gotovъ esmъ za krъstijanъskuju věru umřěti.”* i *ne osluša*^{V6} (aor.3sg.) *se. nъ šьdъ*^{V7} (Prt.pt.) *služi*^{V8} (aor.3sg.) *jako rabъ mъnъšu bratu. povinuja*^{V9} (Prt.pt.) *se jemu. sъ*^{S10} *že m<o>l<i>tvoju a filosofъ slovesy přemožetъ*^{V10} (pr.3sg.) *ja. i posramiste*^{V11} (aor.3du.) *viděvъ*^{V12} (Prt.pt.) *že c<ě>s<a>rъ i patriarchъ*^{S12} «*podvigъ*»¹⁰⁸ *ego. dobrъ na «b<o>žii putъ*»¹⁰⁹ *bědiša*^{V13} (aor.3pl.) i *da byša*^{V14} (aor.3pl.: Cond.3pl.) i *s<vja>tili*^{V14'} (l-prt.) *archiep<i>s<ku>pa na čъstъnoe město. ide že jestъ*^{V15} (pr.3sg.) *potrěba*^{S15} *takogo*

107 この *sъ*^{S10} *že m<o>l<i>tvoju a filosofъ slovesy přemožetъ*^{V10} *ja* 「この者（メトディオス）は祈りによって、一方哲人は言葉によって、彼ら（ユダヤ人）を打ち負かし」という文は、事実叙述の文脈中に挿入されたごく短いコメントタイプのテキストとして分類する可能もある。その場合は、この近称の *sъ* が主人公のメトディオスを直接指していることになる。

108 「II テモテ」 4.7.

109 「マタイ」 22.16.

muža. ne račьšju^{V16} (Prt.pt.) že unudiša^{V17} (aor.3pl.) i i postaviša^{V18} (aor.3pl.) i igumena vь manastyri. iže naricejetь sę polichronъ. jemu že jestь^{V19} (pr.3sg.) sьměra^{S19} 20 i 4 spudove zlata. a o<tb>cb obile 70^{S20} vь njemь jestь^{V20} (pr.3sg.). [104d-18]

b. V1žeS1-V2S2-V3-V4S4-S5žeV5-V6-V7-V8-V9-S10žeV10-V11-V12žeS12-V13-V14-V15S15-V16-V17-V18-V19S19-aS20V20

c. このような時^{S1}になった^{V1}ので、皇帝は^{S2}彼（メトディオス）の弟である哲人（コンスタンティノス）をハザールのもとに送るため、迎えにやった^{V2}。（コンスタンティノスは）彼を自分とともに助け手として連れていった^{V3}。そこではユダヤ人たちが^{S4}キリスト教の信仰を悪し様に言っていた^{V4}からである。彼（メトディオス）は^{S5}「（私は）キリスト教の信仰のために死ぬ用意ができています」と言い^{V5}、（皇帝の命に）逆らわなかった^{V6}。むしろ行って^{V7}、あたかも召使いのように弟に仕え^{V8}、彼に従った^{V9}。この者（メトディオス）は^{S10}祈りによって、一方哲人は言葉によって、彼ら（ユダヤ人）を打ち負かし^{V10}、（彼らを）辱めた^{V11}。皇帝と総主教は^{S12}、彼の《良き働き》が《神の道》にかなっているのを見て^{V12}、彼を説得し^{V13}、彼を叙階して、このような人物を必要^{S15}としている^{V15}名誉ある場所の大主教にしようとした^{V14}。（彼はこれを）望まなかった^{V16}ので、（彼らは）彼に強いて^{V17}、修道院の院長の職に立てた^{V18}。ポリュクロンという名（の修道院）で、そのしかるべき値は^{S19}金24升であり^{V19}、そこには70人以上の修道士たちが^{S20}住んでいた^{V20}。

しかしながら、このような『過ぎし年月の物語』とよく似た特徴を示す文脈は必ずしも多いとは言えない。次は(27)に直接後続するV章の全体である。キュリロスとメトディオスによるモラヴィア伝道の始まりから帰還までが述べられている。モラヴィアのロスチスラフ公からミカエル3世に当てた書簡テキストやミカエル3世の言葉、すなわち直接引用タイプのテキストも含まれている。しかし地の文を見ると、ここではSVの方が多く(S1V1、S2V2、S14V14)、SžeVは一回も現れない。

(28) a. priluči¹¹⁰ že se vъ ty dni Rostislavъ knezъ Slověnъskъ sъ S<vja>topъlkъmъ^{S1}.
 posъlasta^{V1} (aor.3du.) iz Moravy kъ c<ě>s<a>rju Michailu. g<lago>ljušta^{V1' 111}
 tako. jako 【¹¹²«b<o>žijeju m<i>l<o>stiju sъdravi jesmъ.»¹¹³ i sutъ vъ ny vъšъli
 učitele. mnozi křstijani. iz Vlachъ i iz Grъkъ. i iz Němъsъ. učašte ny različъ. a
 my Slověni prosta čadъ i ne imamъ. iže by ny nastavilъ na istinu i razumъ
 sъkazalъ. to dobrěi vl<a>d<y>ko posъli takъ mužъ iže ny ispravitъ vъsěku
 pravъdu.】 tъgda c<ě>s<a>rъ Michailъ^{S2} reče^{V2} (aor.3sg.) kъ filosofu Kostěntinu.
 “slyšiši li filosofe rěčъ siju. inъ sego da ne možetъ sъtvoriti razvě tebe. tě na ti
 dari mnozi. i poimъ bratъ svoi igumenъ Mefedii idi že. vy bo jesta Seluněnina. da
 Seluněne vъsi čisto slověnъsky besědujute.” tъgda ne sъmęsta^{V3} (aor.3du.) se
 otrešti. ni B<og>a ni c<ě>s<a>rę. po slovesi s<vja>t<a>go ap<o>s<to>la Petra.
 jako že reče^{V4} (aor.3sg.) «B<og>a boite se c<ě>s<a>rę čtětę.»¹¹⁴ nъ veli
 slyšavъša^{V5} (Prt.pt.) rěčъ. na molitvu se naložista^{V6} (aor.3du.) i sъ iněmi iže
 bęachu togo že d<u>cha. jęgo že i si. da tu javi^{V7} B<og>ъ^{S7} filosofu. Slověnъsky
 knigy. i abije ustroivъ^{V8} (Prt.pt.) pismena i besědu sъstavlъ^{V9} (Prt.pt.). puti se
 jatъ^{V10} (aor.3sg.) Moravъskago poimъ^{V11} (Prt.pt.) Mefeodija. načatъ^{V12} (aor.3sg.) že
 paky sъ pokorъmъ povinuę^{V13} (Prt.pr.) se služiti filosofu i učiti sъ nimъ. i trъmъ
 lětomъ^{S14} išъdъšemъ^{V14} (Dabs.Prt.pt.). vъzvratista^{V15} (aor.3du.) se iz Moravy.
 učeniky naučъša^{V16} (Prt.pt.).[105a-15]

b. S1V1-S2V2-V3-V4-V5-V6-V7S7-V8-V9-V10-V11-V12-V13-S14V14-V15-V16.

c. この頃（このようなことが）起きた。スラブの公ロスチスラフが（甥の）スヴァトブルクとともに^{S1}、モラヴィアからミハイル皇帝のもとに使者を送ってきてこう言った^{V1}【《神の憐れみにより、（私たちは）つつがなく過ごしております。》私たちのうちにも教師たち、多くのキリスト教徒が入ってきています。イ

110 本来的に主語をとらない無人称文としてデータには数えなかった。

111 複合的発話動詞 posъlati glagolę 「使者を送って言う」の後項。

112 引用された書簡の部分は【 】で囲む。

113 木村・岩井(1986: 7)に従えば「エベソ」2.5からの引用。ただし直訳ではない。

114 「Iペテロ」2.17。

タリアからもギリシアからもドイツからも（来ています）。そして様々なやり方で私たちを教えています。しかし私たちスラブの民は単純な人間であり、私たちを正しい（道に）向けてくれ、知識を示してくれるような（教師を）持ちません。だから、善き陛下よ。私たちにすべての真理を示してくれるような、そのような人を送って下さい。】この時、ミハイル皇帝は^{S2}哲人コンスタンティノスに言った^{V2}「哲人よ、この言葉を聞いているか。お前以外の誰も、これをなすことはできない。見よ、あなたのために多くの贈り物がある。あなたの兄弟、修道院長メトディオスを連れて、行きなさい。なぜなら、あなた方2人はテッサロニケの人であり、テッサロニケの人は皆きれいにスラブ語で話すからである」。 (2人は)、神（のことば）も、皇帝（の言葉）も敢えて断ることができなかった^{V3}。（これは）聖使徒ペテロの言葉に従ったのである。（ペテロは）こう言っている^{V4}、《神を恐れ、皇帝を敬いなさい》と。そして2人は（この）偉大な出来事（のこと）を聞き^{V5}、祈りに専念し^{V6}、他の彼ら（が持っているの）と同じ心を持つ人々と一緒に（祈った）。そして、ここで神が^{S7}哲人にスラブの聖書を示された^{V7}。そこで（彼は）すぐに文字を制定して^{V8}、（聖書の翻訳の）ことばを組立て^{V9}、メトディオスを連れて^{V11}、モラヴィアへの道に出発した^{V10}。（メトディオスは）再び謙遜をもって仕え^{V13}、（弟の）哲人のために働き、また彼とともに（人々を）教え始めた^{V12}。そして3年が^{S14}たち^{V14}、弟子たちを教えたのち^{V16}、2人はモラヴィアから帰ってきた^{V15}。

同様のことは次のIX章についても言える。ドイツの主教団が王¹¹⁵を唆してメトディオスに敵対させようとする場面である。ここで *онъ^{S2} že otvěšta^{V2}* 「彼は答えた」は、対話の文脈に現れる SzeV 構文として自然である。しかしこれ以降、対話の文脈に現れる典型的表現とは言えない *mnogamъ že řečъmъ^{S5} progonenamъ^{V5}* 「多くの言葉が語られたものの」という絶対与格構文で SzeV が現れる以外には、SzeV 構文は使用されない。逆に *otvěšta^{V4} онъ^{S4}* 「彼は答えた」、*řeče^{V8} онъ^{S8}* 「彼は言った」のように、対話の場面

115 Vaillant (1968b: 注 IX-1) は、モラヴィアにいたのは（王ではなく）プリンスなので、ここでの王とはドイツ王ルイのことであるとする。

で主語が交替し、SzeV構文が現れるための条件が整っていないながらVS語順が取られるケースも見られる。またこの2つの例では、『過ぎし年月の物語』でSzeV構文の主語として期待された遠称の指示代名詞 *onъ* が、VS語順の節の主語として現れていることにも注意しておきたい。

(29) a. po semъ že staryi vragъ zavıdъllyvi dobru i protivъnikъ istině^{S1}. vъzdviže^{V1}
(aor.3sg.) s<e>rdce vragu Moravъskago korolę na nъ sъ vъsěmi ep<i>s<ku>py.
jako “na našei oblasti¹¹⁶ učıši.” onъ^{S2} že otvěšta^{V2} (aor.3sg.). “i azъ ašte bychъ
vědělъ jako vaša jestъ. kromě bychъ chodılъ nъ s<vja>t<a>go Petra jestъ. da
pravъdoju. ašte li vy rъvnıja radi i lakomъstva. na staryja předělъ postupajete
čerosъ kanony. vъzbranejušte učenıja b<o>žija. bljuděte sę eda kako chotěšte
želěznu goru kostěnnъmъ těmenъmъ probiti. mozgъ vašъ izlějete.” řeša^{V3}
(aor.3pl.) jemu jaro g<lago>ljušte^{V3'} “zla dobudeši.” otvěšta^{V4} onъ^{S4} “istinu
g<lago>lju předъ c<ě>s<a>ri i ne styžju sę. a vy tvorite volju vašju na mně.
něsmъ bo lučii těchъ. iže sutъ pravъdu g<lago>ljušte mnogami mukami i žitija
sego izbyli.” mnogamъ že řečъmъ^{S5} progonenamъ^{V5} (Prt.P.pt.). i ne mogušemъ^{V6}
(Prt.pr.) protivu emu otvěštavati. Reče^{V7} (aor.3sg.) korolъ^{S7} iznicę. “ne tružajte
mojogo Mefodija uže bo sę jestъ jako i pri pěsti upotılъ.” řeče^{V8} (aor.3sg.) onъ^{S8} “ei
vl<a>d<y>ko. filosofa potъna inъgda sъrětъše ljudije řeša jemu. “čъto sę potiši”
děetъ onъ “sъ gruboju sę čadъju pъrěchъ.” o tomъ že slovesi sъpъrěvъše^{V9}
(Prt.pt.) sę razidoša^{V10} (aor.3pl.). a onogo zasъlavъše^{V11} (Prt.pt.) vъ Sъvaby.
dъrъžaša^{V12} (aor.3pl.) polъ tretъja lěta. [106c-30]

b. S1V1-S2žeV2-V3-V4S4-S5žeV5-V6-V7S7-V8S8-V9-V10-V11-V12

c. このことの後、年を経た敵、善きことに対して嫉み深く真理に敵対する者が^{S1}、
すべての主教たちと語らってモラヴィアの敵、王の心を動かし^{V1}彼に敵対させ
ようとして、(メトディオスに)「あなたは私たちの教区で教えようと言うのか」

116 写本では *oblisti* とあるが *oblasti* と直した。

と（言った）。彼は^{S2} 答えた^{V2}「もし私が（この土地が）あなた方のものだを知っていれば、私は（ここを）避けていったでしょう。しかし（ここは）聖ペテロのものなのです。本当に、もしあなた方が羨みと貪欲のゆえに教会法を犯し、古くからの境界を越えて神の教えを邪魔しようとするなら、注意して、鉄の山を頭蓋骨で貫き通そうとしてあなた方の脳味噌をぶちまけてしまわないように祈りなさい」。彼らは）激怒して彼に言った^{V3}「（おまえは）不幸な目に会うだろう」。彼は^{S4} 答えた^{V4}「（私は）皇帝たちの前で真実を語って恥じません。しかしもしあなた方はあなた方の意志を私に対して行うがよい。なぜなら私は、真実を語りながらも多くの苦しみを受け、そしてこの（地上の）生命を失ったあの世の人々よりも優れた者ではないからです」。そして多くの言葉が^{S5} 語られた^{V5}が、彼らは（彼らは）彼に対して答えることができなかったのもので、王が^{S7} そっと言った^{V7}「私のメトディオスを悩ますな。すでに炉の前にいるかのように汗をかいているのではないか」。彼は^{S8} 言った^{V8}「はい、陛下。ある時、汗をかいた哲人に人々が会い、彼に言いました『どうしてあなたは汗をかいているのか』。（すると）彼は答えます、『無学な人々と論争したのです』と」。そこで彼らは）なおこの言葉について論難した^{V9}のちに、散っていった^{V10}。（人々は）彼をシュヴァーベンに送り^{V11}、2年と半年のあいだ留めておいた^{V12}。

さらには遠称の指示代名詞 *онъ* が予測不能な位置に現れる場合もある。次はこの続きのX章である。ここで *нъ oni^{S8} ne izbyša^{V8} s<vja>t<a>go Petrova suda*。「ところが彼ら（の方）が、聖ペテロの裁きを免れることができなかった」というSV構文の主語として *oni*「彼ら(m.pl.)」が現れている。ところが良く見ると、先行する *i tako i pustiša^{V6} rekъše^{V7} Косѣлу “ašte sego imaši u sebe. ne izbudeši nas dobrě.”*「そこで（彼らは）彼を釈放し、コツェルに言った『もし、この者を自分の許にとどめて置くなら、（お前は）決して我々から逃れることはできない』」という節との間で主語は交替せず、同一の指示対象が連続して主語として現れている。これはテキスト上の照応関係としては近称ということになり、本来ならこの位置に *oni* は現れることはできないはずである。

(30) a. doide^{V1} (aor.3sg.) kъ apostoliku i uvěděvъ^{V2} (Prt.pt.) posъla^{V3} (aor.3sg.) klětvu na nę. da ne pojutъ^{V4} (pr.3pl.) mъša rekъše služby vъsi koroljevi ep<i>s<ku>pi^{S4}. donde i dъrъžatъ^{V5} (pr.3pl.) i tako i pustiša^{V6}. rekъše^{V7} (Prt.pt.) Kocъlu “ašte sego imaši u sebe. ne izbudeši nas dobrě.” nъ oni^{S8} ne izbyša^{V8} (aor.3pl.) s<vja>t<a>go Petrova suda. 4 bo ot nichъ ep<i>s<ku>pi^{S9} umъroša^{V9} (aor.3pl.). priključi že se tъgda Moravlęne^{S10} → očjuštъše^{V11} (Prt.pt.) Němъčъskyja popy. iže živęachu vъ nichъ ne prijajušte imъ. nъ kovъ kujušte na nę ← izgъnaša^{V10} (aor.3pl.) vъse. a kъ apostoliku posъlaša^{V12} (aor.3pl.) “jako i pъrvěje o<t>ci naši. ot sv<ę>t<a>go Petra kъštenije prijali to dažъ namъ Mefodija archiep<i>s<ku>pa i učiteľ.” abije že posъla^{V13} (aor.3sg.) i apostolikъ^{S13}. i primy^{V14} (Prt.pt.) i S<vja>topъlkъ^{S14}. knęzъ sъ vъsěmi moravlęny i poruči^{V15} jemu vъse c<e>rkvi. i strižъniki vъ vъsěchъ graděchъ ot того že dne velъmi načatъ^{V16} rasti učeniје b<o>žie^{S16}. i strižъnici množiti se vъ vъsěchъ graděchъ. ot того že načatъ rasti i množiti se¹¹⁷. i pogani i věrovati vъ istinъnyi B<og>ъ. svoichъ blędii otmětajuşte se toľmi pače. i Moravъska oblastъ^{S17} prostraniti načatъ^{V17} (aor.3sg.) vъse strany. i vragy svoę poběžati i sъ nepogrěšenijemъ. jako i sami^{S18} povędajutъ^{V18} (pr.3pl.) prisno.[107a-15]

b. V1-V2-V3-V4S4-V5-V6-V7-S8V8-S9V9-S10V10 [V11] V12-V13S13-V14S14-V15-V16S16-S17V17-S18V18

c. (この報せが) 教皇のもとに届いた^{V1}。そして (教皇はこれを) 知って^{V2}、彼らに破門状を送り^{V3}、彼を捕らえている^{V5}間、すべて (ドイツ) 国王の司教たちは^{S4} ミサ、すなわち礼拝を執り行つては^{V4} ならない (とした)。そこで (彼らは) 彼を釈放し^{V6}、コツェルに言った^{V7} 「もし、この者を自分の許にとどめて置くな、(お前は) 決して我々から逃れることはできない」。ところが彼ら (の方) が^{S8}、聖ペテロの裁きを免れることができなかった^{V8}。彼らのうち4人の司教が^{S9} 死んだ^{V9}のである。そしてその時 (このようなことが) 起きた。(すなわち) モ

117 このイタリック部分は写字生による筆写ミスによる反復なのでデータから外す。

ラヴィアの人々は^{S10}、彼らの間に住んでいたドイツの司祭たちが彼らにとって友好的でなく、彼らに対して陰謀をめぐらしていることを知り^{V11}、(彼ら)全員を追放した^{V10}。(そして)一方で教皇に(使者を)送って^{V12}(言った)「初めに私たちの父祖たちが聖ペテロから洗礼を受けたように、私たちにメトディオスを大司教として、そして教師として与えて下さい」。そこで直ちに教皇は^{S13}彼を送った^{V13}。そこでスヴァトブルク公は^{S14}、すべてのモラヴィアの人々とともに彼を迎え^{V14}、彼にすべての町のすべての教会と聖職者たちを委ねた^{V15}。この日以来、神の教えは^{S16}大いに成長し始め^{V16}、聖職者たちもすべての町で増え始めた。このことから成長し、増え始めたのである。そして異教徒たちも、おのれの謬言を捨てて、真の神を信仰(し始めた)。こうしてますます、モラヴィアの地も^{S17}その四囲を拡げ始め^{V17}、自分たちの敵を打ち破って負けることがなかった。彼ら自身が^{S18}常々語っている^{V18}通りである。

以上の観察は、『コンスタンティノス伝』と同様に、『メトディオス伝』の事実叙述タイプのテキストでも SzeV 構文が使用されるものの、それは特定の語りのスタイルと結びつくものでないことを示している。指示代名詞 *онъ* も自由に使われており、この語りのスタイルを構成する要素とはなっていない。一方『コンスタンティノス伝』との違いとして SzeV 構文の使用の頻度が低いように感じられる。この点については 3.4 の数量的調査で確認したい。

3.3. コメントタイプの語順について

すでに述べた通り、『メトディオス伝』では冒頭の2つの章の全体がコメントタイプに分類可能であり、これは全体の約3分の1に当たる。内容的に見ると、I章の前半は神に対する賛美と神のわざに対する感謝、後半¹¹⁸は聖書のさまざまな登場人物(預言者、使徒たち)を通して行われた神のわざの紹介と、第1回から第6回までの公会議の紹介に当てられる。そしてII章では、メトディオスの物語を始めるに当たって、メト

118 I章の後半部、聖書の要約および公会議に関する部分は、コメントではなく事実叙述(ただしメトディオスの事績について述べたものではない)に分類する可能性もある。

ディオスその人の紹介が行われる。II章の最後の部分は、連続的にIII章の事実叙述に続いていく。その箇所ではコメントタイプと事実叙述タイプのテキストの間にはっきりした境界を見つけることは難しいが、ここではII章全体をコメントタイプとする。また最終のXVII章では、メトディオスの死が述べられた後でコメントが行われる。これは『コンスタンティノス伝』におけるのと同様ごく短い形式的なものである。また途中でもXI章の導入部、XIV章で短い補足説明的なコメントがある。いくつかの例を見てみよう。

次はI章の冒頭で *M<ě>s<ja>ca maija vь 10 d<e>нь. pamět<ь> i žitije bl<a>ženago o<t>cę našeg<o> i učitelę Mefodija. archiep<i>s<ku>pa Moravьska. G<ospod>i bl<a>g<o>s<lo>vi o<t>če.* 「5月10日。至福なる我らの父にして師父、モラヴィアの大神父、メトディオスの思い出と一代記。父よ、祝福を与えたまえ」というタイトルに続く、この聖者伝全体の冒頭の部分である。ここでは、主人公のメトディオスについてのコメントではなく、神についてのコメントが行われている。内容的にはコメントというより、むしろ序言と言ったほうが相応しい。žeを使った構文は現れず、単純なSV語順とVS語順の節の使用が拮抗している。

(31) a. B<og>ъ bl<a>gъ i vьsemogai iže jestь stvorilь ot nebytija vь bytije vьsęčьskaja. vidimaja že i nevidimaja. i ukrasilь vьsękoju krasotoju juže kьto^{S1} → razmyšleja^{V2} (Prt.pr.). pomyšleї^{V3} (Prt.pr.) po malu ← ot čьsti možetь^{V1} (pr.3sg.) razuměti. i togo poznati iže jestь sьtvorilь sicę děla divьna i mnoga. «otь velikotь bo i dobroty dělь po razmyslu. i roditelь ichь mьrtvь estь»¹¹⁹ iže pojutь^{V4} ang<e>li^{S4}. trьs<vja>tyimь glas<o>мь i vьsi pravověrьnii^{S5} slavimь^{V5} (pr.1pl.) vь s<vja>těi troici. sirěčь vь o<t>ci i s<y>ně i s<vja>t<y>мь d<u>sě. eže jestь vь trьchь upostasьchь. ježe možetь^{V6} (pr.3sg.) kьto^{S6} tri lica rešti. a vь jedinomь b<o>žьstvě. prěže bo vьsękogo časa i vьřmene i lěta. nadь vьsęcěmь

119 外典「ソロモンの知恵」13.5。テキストでは最後の部分が *mьrtvь estь* 「死んでいる」とあるが Vaillant (1968a: 41) に従って *sьmotrimь estь* 「見ることが出来る」(<θεωρεῖται>) と読むことにしたい。なお Lehr-Splawinski (1959: 97) では *mađrьstvujetь sę* と直している。

umъmъ i sъmyslъmъ neplъtskъmъ. o<tъ>cъ samъ^{S7} jestъ^{V7} s<y>na rodilъ^{V7'}.
 120 jako že reče^{V8} (aor.3sg.) přemudrostъ^{S8}. «prěže vъsěchъ chъlmъ ražajetъ mę.»¹²⁰ i
 121 vъ evang<e>lii reče^{V9} samo b<o>žije slovo^{S9} přčistyimi usty. vъplъštъ^{V10} (Prt.pt.)
 se «na poslědněja lěta našego radi»¹²¹ s<ъ>p<a>senię. «azъ vъ o<t>ci a
 o<tъ>cъ vъ mně.»¹²² otъ toho že o<t>ca i s<vja>tyi d<u>chъ^{S11} ischoditъ^{V11}
 123 (pr.3sg.) jako že reče^{V12} (aor.3sg.) samъ s<y>nъ^{S12} b<o>žijemъ glas<o>mъ.
 «d<u>chъ istinъnъ iže ot o<t>ca ischoditъ.»¹²³ [102b-28]

b. S1V1 [V2-V3] V4S4-S5V5-V6S6-S7V7-V8S8-V9S9-V10-S11V11-V12S12

c. 善にして全能の神、無から有へとすべての見えるもの、また見えないものを創
 くり出され、あらゆる美しいもので（これを）飾られた方。（その美しきものは）
 誰もが^{S1}、ものごとを良く考え^{V2}、少しずつ考えてみれば^{V3}、部分的になりとも
 理解することができ^{V1}、さらに（そのような人は）このような驚くべきわざ、
 多く（のわざ）をなされた方を知ることができるのである。《なぜなら造られ
 たものの大きさと美しさにより、よく熟慮すれば、その創造者を見ることがで
 きるからである。》（この方を）天使たちは^{S4} 3倍聖なる声で歌い^{V4}、（私たち）
 すべての正教徒は^{S5}、聖三位一体、すなわち父と子と聖霊にあって誉め称える^{V5}
 のである。これは3つの位格のうちにあり、人は^{S6}（これを）3つの人格と呼ぶ
 こともできる^{V6}。しかし（これは）一つの神性の中にあるのである。なぜなら、
 あらゆる時と時間、年月よりも前に、すべての知恵と肉によらない知力の上に
 あって、父ご自身が^{S7}子を生んだ^{V7}からである。（これは）箴言が^{S8}言っている^{V8}
 通りである、《（彼は）、すべての丘に先だって、私を生む。》そして福音書で
 は、まさに神の御言葉が^{S9}、いと清らかな口を通して、肉の形を取り^{V10}、《最
 後の時に私たちのために》語られた^{V9}。《私は父のうちにおり、父は私の内に
 いる。》この父からまた聖霊が^{S11}出た^{V11}。これは子自身が^{S12}神の声によって言
 われた^{V12}通りである、《真の霊、父から出たところのもの》と。

120 「箴言」 8.25。

121 「Iベテロ」 1.20。

122 「ヨハネ」 14.11。

123 「ヨハネ」 15.26。

さらに次の (32) はI章の中程で、聖書の内容を語ったものである。ここでは単純なSV語順の節の使用が目立って多い。冒頭の *bě^{V1} Enosъ^{S1}* 「エノクがそうであった」を除き、また聖書から引用された箇所を除いても、旧訳聖書の登場人物の多くが主語になって *Avraamъ^{S5} po rozděljenii jazykъ. ... B<og>a pozna^{V5}* 「アブラハムは諸々の言語が分かれたあと…神を知り」、*Isakъ^{S9} po obrazu Ch<risto>vu na goru vъ žrtvu vъzvedenъ^{V9} bystъ^{V9}* 「イサクはキリストの姿に似せ、生け贄として山に連れて行かれた」、*Iosifъ^{S11} vъ Egyptě ljudi přepitě^{V11}* 「ヨセフはエジプトで人々を養い」、*Moisi^{S17} sъ Aronъmъ. «vъ ierěichъ b<o>žičhъ.» «B<og>ъ Faraosovъ» nareče^{V17} sě* 「モーセはアロンとともに、《神の祭司のうちで》《パロの神》と呼ばれた」というように単純なSV語順の節が連続する。また聖書そのものを主語にした *knigy^{S13} sъkazajutъ^{V13}* 「…を（指して）聖書は…としている」という節もある。

(32) a. jako že bě^{V1} Enosъ^{S1}. «iže upova» pŕvvy «naricěti imě g<ospodъ>ne.»¹²⁴
 «Enochъ» že po tomъ «ugožъ B<og>u přestavlenъ bys<тъ>»¹²⁵ «Noi pravъdnъ
 sě obrěte vъ rodě svoemъ.»¹²⁶ potopa izbystъ^{V2} vъ kovъčezě da sě by paky
 zemlě^{S3} napŕlnila^{V3} (l-prt.: Cond.3sg.) tvari b<o>žija i ukasila^{V4}. (l-prt.: Cond.3sg.)
 Avraamъ^{S5} po rozděljenii jazykъ. → zablužъšemъ^{V6} (Prt.pt.: DAbs.) že vъsěmъ^{S6}
 ← B<og>a pozna^{V5} (aor.3sg.) i drugъ sě jemu nareče^{V7} (aor.3sg.). i obětovanije
 prijatъ^{V8} (aor.3sg.) jako «vъ sěmeni tvojemъ bl<a>goslovleni budutъ vъsi
 jazyci.»¹²⁷ Isakъ^{S9} po obrazu Ch<risto>vu na goru vъ žrtvu vъzvedenъ^{V9}
 (Prt.P.pt.) bystъ^{V9} (aor.3sg.: AnP.aor.3sg.).¹²⁸ «Ijakovъ idoly tъstъnja pogubi»¹²⁹ «i
 lěstvicju vidě ot zemlę do n<e>b<e>se. Ang<e>ly že b<o>žija vъschoděšta i

124 「創世記」4.26。

125 「創世記」5.24、「ヘブル」11.5。

126 「創世記」6.9、外典「集会の書」44.17。

127 「創世記」22.18、26.4

128 cf. 「創世記」22.2、「ヘブル」11.17。聖書の内容の要約であり引用ではない。

129 「創世記」35.4。必ずしも引用とは言えないがVaillant (1968b: 注I-22) に従いここでは引用として扱う。

sъchodešta po njei.»¹³⁰ i vъ bl<a>g<o>s<lo>vleniichъ s<y>novъ svoichъ o
 Ch<rist>ě pror<o>čъstvova^{v10} s131 Iosifъ^{s11} vъ Egiptě ljudi přepitě^{v11} (aor.3sg.).
 b<o>žii sę javlъ^{v12} (Prt.pt.). Iova avъsitidiiskaago «pravъdъna istinъna i
 neporočъna»¹³³ knigy^{s13} sъkazajutъ^{v13} (pr.3pl.). iskušeniye priimъ^{v14} (Prt.pt.).
 přetъrpěvъ^{v15} (Prt.pt.) že bl<a>g<o>s<love>nъ^{v16} (Prt.P.pt.) bys<tъ>^{v16} (aor.3sg.:
 AnP.aor.3sg.) B<ogo>mъ. Moisi^{s17} sъ Aronъmъ. «vъ ierěichъ b<o>žičъ.»¹³⁴
 «B<og>ъ Faraosovъ»¹³⁵ nareče^{v17} (aor.3sg.) sę i muči^{v18} (aor.3sg.) Egiptъ b<o>žija
 ljudi izvede^{v19} (aor.3sg.) «vъ dne oblakъmъ světlъmъ. a vъ nošti stъlpъmъ
 ognъnъmъ.»¹³⁶ [103a-11]

b. V1S1-V2-S3V3-V4-S5V5 [V6žeS6] V7-V8-S9V9-V10-S11V11-V12-S13V13-V14-
 V15-V16-S17V17-V18-V19

c. エノク^{s1}がそうであった^{v1}のである。《（彼は）敢えて主の名を呼んだ最初の
 一人である。》《エノクは》その後《神の御心に適い、（御前に）移された。》
 《ノアもその世代において正しい者と認められた。》（彼は）洪水を箱船のな
 かで免れた^{v2}。（これは）再び地が^{s3}神の被造物によって満ちる^{v3}ためであり、
 美しく飾られる^{v4}ためである。アブラハムは^{s5}諸々の言語が分かれたあと、す
 べての民が^{s6}（道に）迷った^{v6}とき、神を知り^{v5}、その友と呼ばれた^{v7}。そして
 （彼は神の）約束を得た^{v8}、《あなたの種のうちにあつて、すべての民は祝福を
 受けるでしょう》と。イサクは^{s9}キリストの姿に似せ、生け贄として山に連れ
 て行かれた^{v9}。《ヤコブは妻の父の偶像を打ち毀した。（そして彼は）地から天
 へと（上る）梯子を見、神の御使がこれを上ったり下りたりするのを（見
 た）。》（そして彼は）自分の息子たちを祝福する中で、キリストについて預言

130 「創世記 28.12」

131 cf. 「創世記」 49.10. Vaillant (1968b : 注I-24) では引用のように扱っている。

132 cf. 「創世記」 41.38。

133 「ヨブ」 1.1。

134 「詩篇」 99.6 (70人訳98.6)。

135 「出エジプト」 7.1。

136 「出エジプト」 13.21。

した^{V10}。ヨセフ^{S11}はエジプトで人々を養い^{V11}、神の（人と）して現れた^{V12}。ウヅのヨブを（指して）聖書は^{S13}《正しく公正でけがれない》（人）としている^{V13}。彼は試練を受けて^{V14}、（これを）耐え忍び^{V15}、神によって祝福された^{V16}のである。モーセは^{S17}アロンとともに、《神の祭司のうちで》《パロの神》と呼ばれた^{V17}。そして（彼は）エジプトを（打って）苦しめ^{V18}、神の民を連れ出して^{V19}、《昼は明るい雲に（従って）、夜は火の柱によって（彼らを導いた）。》

そしてⅡ章で、いよいよメトディオスその人についてのコメントが行われる。この部分は物語の主人公についてのコメントとして、内容的には『過ぎし年月の物語』のコメントと似ている¹³⁷。またSV語順が圧倒的に多いところも同じである。しかしコメントの対象となるメトディオスを指すために指示代名詞は使われていない。従って近称のsbの分布についての情報は得られない。また、このコメント部分では聖書からの引用が行われていない。これも『過ぎし年月の物語』との違いである。

(33) a. po sichъ že vьsěchъ B<og>ъ milostivyi^{S1} → iže choštetъ daby vьsěchъ
čl<o>v<ě>chъ^{S2} sp<a>senъ^{V2} (Prt.P.pt.) bylъ^{V2'} (l-prt.: Cond.AnP.3sg.). i vъ razumъ
istinъny prišъlъ^{V3} (l-prt.: Cond.3sg.). vъ naša lěta jazyka radi našego o njemъ že
se ne bē^{V4} (impf.3sg.: plpf.3sg.) nikъto^{S4} že nikoli že popeklъ^{V4'} (l-prt.). ← na dobryi
činъ. vъzdviže^{V1} (aor.3sg.) našego učitelja bl<a>ž<e>nago učitelę Mefodija. jeho
že vьse dobryja děteli i podvigy prilagajuše^{V5} (Prt.pr.). sichъ ugodъnicěchъ po
edinomu ne postydimъ^{V6} (pr.1pl.) se. ověmъ bo ravъnъ bē^{V7} (impf.3sg.). ověchъ že
maly mъnni. a drugyichъ bolii. slovesъnyja dětelъju přespěvъ^{V8} (Prt.pt.) a děte-
lъnyja slovъmъ. vьsěmъ bo se upodoblъ^{V9} (Prt.pt.). vьsěchъ obrazъ na sebě
javlēše^{V10} (impf.3sg.). strachъ b<o>žii. zapovědnaja chranenija. plъtъskoju
čistotoju prilěžny molitvy i s<v>ja>tyne. slovo silъnoje i krotъkoje. silъno na

137 Ⅱ章の最後の部分は、事実叙述タイプからはっきり区別することはできない。

protivъnyja. a krotъkoje na prijemljuštaja kazanije. jarostъ tichostъ milostъ ljubъvъ strastъ i tьrьpěnije. vьse o vьsěčьskyichъ byvaja^{V11} (Prt.pr.). da by vьse priobrěhъ^{V12} (l-prt.). bē^{V13} (impf.3sg.: Cond.3sg.) že roda ne chuda. ot obojudu nъ velъmi dobra i čьstъna. znajema pьrvěje B<ogo>мъ i c<ě>s<a>гъмъ i vьseju Selunъskoju stranoju. jako že i *tělesъnyi jego obrazъ*^{S14} javlęaše^{V14} (impf.3sg.) sę. po tomu že i pьrьci^{S15} → ljubęšte^{V16} (Prt.pr.) i izdětъska. ← čьstъnyja besědy dějachu^{V15} (impf.3pl.) dondeže c<ě>s<a>гъ^{S17} bystrostъ jeho. knęženije jemu dastъ^{V17} (aor.3sg.) dьržati slověnъsko. reče^{V18} (pr.1sg.)¹³⁸ že azъ^{S18} jako prozъre^{V19} (Prt.pr.) kako i chotęše^{V20} (impf.3sg.) učitelę slověnjemъ posъlati. i pьrvago archiep<i>s<ku>pa da by proučilъ^{V21} (l-prt.: Cond.3sg.) sę vьsěmъ obyčaemъ slověnъskymъ. i obyklъ^{V22} (l-prt.: Cond.3sg.) ja po malu. [104b-12]

b. S1V1 [S2V2-V3-V4S4] V5-V6-V7-V8-V9-V10-V11-V12-V13-S14V14-S15V15 [V16] S17V17-V18žeS18-V19-V20-V21-V22.

c. これらすべてのことのあと、すべての人が^{S2}救われ^{V2}真の知恵へといたる^{V3}よう望まれる、憐れみに富みたもう神は^{S1}、私たちの時代において、いままで誰も^{S4}心にかけたことのなかった^{V4}私たちの民族のために、良き行い（をなす）よう、私たちの教師、至福なる教師メトディオスを立てられた^{V1}。（私たちは）彼のすべての善きわざと功績を、これらの神の僕に一人ずつ比べてみて^{V5}も、（何ら）恥じることはない^{V6}。なぜなら、（彼は）ある者たちとは同じくらいであり^{V7}、ある者たちよりはすこし（だけ）小さい（のみであり）、また他の者たちよりは偉大であるからである。（彼は）言葉に優れた（者たち）を行いによってしのぎ^{V8}、行いに優れた（者たち）を言葉によって（しのいだのである）。（彼は）すべての人々に似ており^{V9}、すべての人々の姿を我が身の上に表した^{V10}。（すなわち）神を畏れること、肉の清らかさによって戒めを守ること、熱心な祈りと聖性、強い言葉と穏やかな言葉、（すなわち）敵に対しては強く、教えを受け入れる者に対しては穏やかな（言葉）、激しい怒り、静けさ、慈悲、愛、恐れ、

138 写本では aor.3sg. の reče が現れているが、それでは意味が取れない。Lehr-Splawiński (1959:105), Vaillant (1968a: 45) に従って pr.1sg. の reku (reka) と読みたい。

そして忍耐（である）。すべての人を得るため^{V12}、すべての人のために、すべてとなった^{V11}のである。彼は卑しからぬ家柄の出であり^{V13}、（両親の）どちらの側からみても、むしろ非常に優れた、名誉ある、（そして）まず神によって、（次に）皇帝によって、そしてすべてのテッサロニケの国に知られた（家柄の出であった）。（これは）彼の肉の姿も^{S14}（よく）表していた^{V14}。さらには、法学者たちは^{S15}彼を子どものころから愛しており^{V16}、（彼に対する）尊敬の言葉を語っていた^{V15}ので、ついには皇帝が^{S17}彼の俊敏さ（を知り）、スラブの州を治める支配権を与える^{V17}こととなった。私は^{S18}言おう^{V18}。（これは）あたかも（皇帝が）スラブ人のもとに教師、そして最初の大主教を送ることになる^{V20}のを予見して^{V19}、（彼をして）スラブのすべての習慣を学び^{V21}、少しずつそれを身に着けさせる^{V22}ために（そうしたかのごとくであった）。

以上の観察から、『メトディオス伝』におけるコメントのテキストは、内容的には『過ぎし年月の物語』のそれとかなり性格が異なっていること、一方で語順については同じSVを基本とするらしいことが分かった。

3.4. 数量的調査

以上の文脈に基づく観察をデータの数量的調査によって裏付けてみたい。次の(34)の表IIIおよび(35)のグラフは上の(24)の表IIおよび(25)のグラフと同じように、『メトディオス伝』に現れる節について、語順に関する議論に関与するものに限り、それぞれのタイプに分けて数えた結果である。

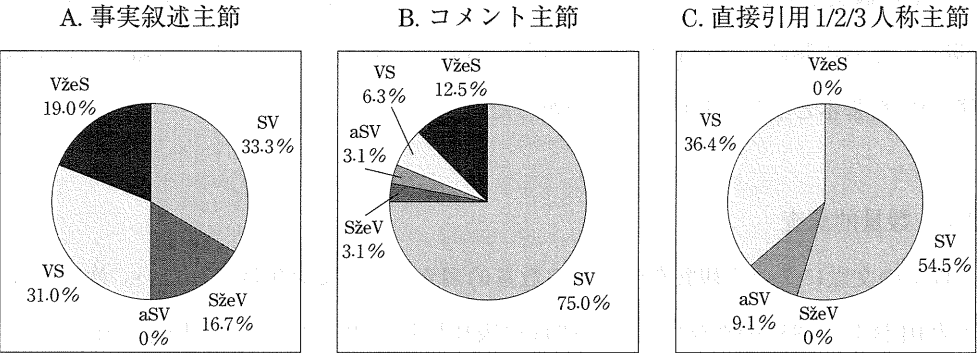
直接引用タイプ、また新たに加えた書簡タイプはいずれも実際に現れる例の数が非常に少なく、有意義な議論の対象とすることは困難である。一方コメントタイプについては、『コンスタンティノス伝』の場合と異なり、ある程度のデータが集まった¹³⁹。

139 資料として用いた Uspenskij sbornik XII-XIII vv. 中の “Prostrannoe žitie Mefodija” に現れるすべての定動詞を対象に、節を単位に数えた。ただし複合形は合わせて1個と数えた。また『コンスタンティノス伝』と同一の原則に従って（上の注103を参照）語順に関する議論の対象とならないケースを除いた。この基準によってデータから外した節の数は92個である。また「聖書引用」タイプと見なしうる節32個もデータから外した。

(34) 表Ⅲ. 『メトディオス伝』における語順、指示代名詞とテキストタイプ

	事実叙述		コメント		直接引用				書簡			
					1/2 人称		3 人称		1/2 人称		3 人称	
	主節	従属節	主節	従属節	主節	従属節	主節	従属節	主節	従属節	主節	従属節
	グラフA		グラフB		グラフC		グラフC					
SV	14 ¹	5	124	11	3 ³	2 ²	13	2	0	1 ¹	1	3
SzeV	17 ³	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1 ¹	0
aSV	0	1	1	0	1 ¹	0	0	0	0	0	0	0
VS	13 ²	8	2	11	0	0	4	1	0	0	3	3
VzeS	8	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小計	142 ⁶	14	132	22	4 ⁴	2 ²	17	3	1	1 ¹	5	6
V	118	16	58	23	12	11	4	6	6	9	6	10
計	160	30	90	45	16	13	11	9	7	10	11	16

(35) 図Ⅲ. 『メトディオス伝』における語順とテキストタイプ—主節の場合



まず事実叙述タイプについて、(35) Aのグラフを見ると、『コンスタンティノス伝』の場合と同様に語順が自由で、かつSVとVS、SzeVとVzeSの現れ方のバランスが取れていることが分かる。多数を占める基本語順は存在せず、『過ぎし年月の物語』のようにVS語順の節とSzeV構文の交代を利用した様式的な語りのスタイルも存在し得ないことになる。一方『コンスタンティノス伝』と比べてみると、zeをともなったSzeVおよびVzeS構文の使用の頻度が小さいことが見て取れる。2.6で『コンスタンティノス伝』でzeの使用が好まれることについて、それが『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』に共通する特徴、つまり最初期のスラブ聖者伝の特徴であるのか、それとも

『コンスタンティノス伝』に固有の特徴であるのかを問題としたが、これを見ると後者であることが分かる。この点については、次節でさらに論じたい。また遠称の指示代名詞 *онъ* の主語としての使用についても、それが SzeV 構文に限られるわけではないこと、VS 語順で現れるのは決して偶然でないことが確認できる。

グラフ B は『コンスタンティノス伝』ではデータの不足から論ずることのできなかったコメントタイプのテキストについての調査結果である。これを見ると、『メトディオス伝』でも『過ぎし年月の物語』におけるのと同様、事実叙述タイプとコメントタイプで語順の分布が異なること、コメントタイプでは単純な SV 語順の節が最もよく使用されることが分かる。

事実叙述タイプについては『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』の両者は、小詞 *že* の使用を好むか好まないかという点を別にすれば、共通の傾向を示す。直接引用タイプについては『コンスタンティノス伝』のデータ、すなわち (25) の D に示されるパターンで代表させることにする¹⁴⁰。一方、コメントタイプについては (35) B の『メトディオス伝』のパターンで代表することにする。このようにすれば、『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』を一体として見たスラブ聖者伝の言語と『過ぎし年月の物語』の言語を比べることが可能になる。その結果、スラブ聖者伝においても、『過ぎし年月の物語』で観察されたのと同様、同じ書き言葉でありながら事実叙述タイプとコメントタイプでは語順の使用について異なる特徴が見られることが分かる。事実叙述タイプでは、特別な語りのスタイルはないものの、4つの語順、構文ををバランスよく使用して効果的に物語を語る工夫がなされているようである。一方、コメントタイプは直接引用タイプに見える話し言葉ともある程度共通する特徴を持つ。以上により『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』の分析においても、テキストのタイプを分けて考える方法が有効であることが確かめられたと言えよう。その上で、『コンスタンティノス伝』と『メトディオス伝』の両方のデータが揃っている事実叙述タイプを比べると、両者の差異は小詞 *že* の使用を好むか好まないかという点にあることに

140 その際『コンスタンティノス伝』の言語では小詞 *že* の使用が好まれ、『メトディオス伝』では好まれないという点を考慮すれば、(35) C のグラフは少数のデータに依るものではあるが、『メトディオス伝』の話し言葉の特徴をよく反映していると考えられることも可能である。

なる。

3.5. 『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』における小詞 *že* の使用について

『コンスタンティノス伝』では小詞 *že* の使用が好まれ、『メトディオス伝』ではそれほど好まれないことが分かった。*že* が使用されるのは *SžeV* の場合と *VžeS* の場合である¹⁴¹。

SžeV 構文については上の 2.2.2 で発話動詞との共起という観点から検討し、『コンスタンティノス伝』では『過ぎし年月の物語』と比べ、そして (例は少ないものの) 『メトディオス伝』と比べても、発話動詞が多く使用されるというだけでなく、発話動詞の使用という条件を同じくした場合も *SžeV* 構文が起りやすいことを見た。

一方の *VžeS* 構文の使用についても、『コンスタンティノス伝』が *že* の使用を好むことが観察される。*VžeS* 構文がこの聖者伝で果たす機能の一つとして、物語の意味的な単位の境界、つまり章やパラグラフの境界を示すという機能の存在が観察される。上の (11) の例で現代ロシア語訳に示されたパラグラフの境界を // という記号で書き入れた¹⁴²。この章 (IV 章) の冒頭並びにこの // 記号の直後の各パラグラフの始めの部分を抜き出すと次のようになる。

- (36) a. *egda že priide^{V1} kь C<ěsa>rjugradu* 「(彼が)コンスタンティノープルに着く^{V1}と」
b. *uzrěvъ^{V17} že i tako sušta* 「彼のこのような様子を見て^{V17}」
c. *vъ čistotě že prebyvaa^{V25}* 「(彼は) 清らかさのうちにあって^{V25}」
d. *malo že s nimi vъ tom pobyvъ^{V37}* 「(しかし彼は) しばらくの間彼らとともに (あって) その地位に留まった^{V37}ものの」

ここでいずれの場合も文頭から 2 番目の語の位置に小詞 *že* が現れていることに気付

141 その他に (36) の a, c の例にあるように副詞的要素に *že* が後続する場合もあるが、議論を簡略化するため、ここではこのケースには触れないこととする。

142 注 48 参照。Vaillant (1968a) では (36) に示した 4 箇所他に、もうひとつ *slyšavъ^{V33} že logofet^{S33} otvětъ ego* 「ロゴテテス^{S33} は彼の返事を聞くと^{V33}」の箇所でも新しいパラグラフが始まっている。これも問題の *VžeS* 構文である。

く。もし文頭に動詞が現れれば、そしてもしその節に明示的主語があれば、その時は VzeS 構文が現れることになる。すなわち VzeS 構文は、このパラグラフを区切る機能と密接に結びついていることになる。このことは『過ぎし年月の物語』の事実叙述タイプのテキストで、SzeV 構文が VS の節の連続の間に適宜現れて、テキストを小単位に区切っていく機能を持つという観察を想起させる。しかし両者は次のような差異を示す。『コンスタンティノス伝』で VzeS がこのような境界記号として使われるときには、それは意味的な単位としての章、あるいはその中の（比較的大きな）パラグラフの境界（すなわちそのはじめの部分）を表す。それに対して『過ぎし年月の物語』に現れる SzeV 構文は意味的な単位を区切るのではなく、そのような単位の中でさらに小さな単位を区切り、語りにリズム感を与えるという効果と結びついているのである。

そこでこの意味的な境界を示すという機能に着目し、それぞれの聖者伝で VzeS 構文がもっぱらこの機能で使用されているか、それともさらに境界線の内側、パラグラフの内部でも使用されているかを調べてみる。Žitija Kirilla i Mefodija. (1986) 掲載の『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』の現代ロシア語訳¹⁴³および Vaillant (1968a) の校訂テキストでは、Šafařík (1851) 以来の章立てだけでなく、訳者および校訂者の判断により下位のパラグラフが分けられているので¹⁴⁴、VzeS 構文がこの章およびパラグラフ境界に現れるかどうかを調査した。結果は次の (37) および (38) に示す。

(37) VzeS 構文の現れる位置：校訂版の現代語訳によるパラグラフ境界

	境界に現れる		他の位置 に現れる
	章頭	パラグラフ頭	
『コンスタンティノス伝』	7	8	40
『メトディオス伝』	3	5	0

(38) VzeS 構文の現れる位置：Vaillant によるパラグラフ境界¹⁴⁵。

	境界に現れる		他の位置 に現れる
	章頭	パラグラフ頭	
『コンスタンティノス伝』	7	11	35
『メトディオス伝』	3	4	1

143 とともに B. N. Florja による。

これを見ると、『メトディオス伝』ではVzeS構文は何よりもまず境界画定の機能で使用されているのに対し、『コンスタンティノス伝』ではさらにパラグラフの内部でも多く使用されていることが分かる。当然、他の何らかの機能的あるいは文体的要求によって使用されていることになる。これも『コンスタンティノス伝』(の作者)がžeの使用を好むという事実の現れである。

3.6. 3章の議論のまとめ

以上の本章での議論は次のようにまとめることができる。

(39) 3章の議論のまとめ

- 1) 『メトディオス伝』でも『コンスタンティノス伝』におけるのと同様、事実叙述タイプのテキストで様式化された特別な語りのスタイルは見られない。SV、VS、SzeV、VzeSという4つの語順をとる節がバランス良く使用され、SzeV構文も『過ぎし年月の物語』とは異なりVS語順の節との対立の中で現れることはない。また遠称の指示代名詞 *онъ* の使用も SzeV 構文に限られることはない。
- 2) コメントタイプのテキストは、同じ書き言葉としての事実叙述タイプのテキストと比べると、語順の使用についてSVを主とするという意味で異なる特徴を示す。
- 3) 『メトディオス伝』では『コンスタンティノス伝』のように小詞 *že* が好んで使用されるという傾向は見られない。*že* を好んで使用するのは両者に共通する特徴ではなく、あくまでも『コンスタンティノス伝』の特徴である。
- 4) 『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』の分析を総合すると、古スラブの聖者伝についても、事実叙述、コメント、直接引用というテキストのタイプの区別に基づく分析が有効であることが確認された。

144 両者はかなりの部分で一致しているが、完全に一致するわけではない。

145 Vaillant 校訂本の『コンスタンティノス伝』テキストでは *Žitija Kirilla i Mefodija*. (1986) 掲載写本にある *že* が欠落し、結果として VzeS 構文でなくなるものが2箇所ある。すなわち *slyšavъ že c<ěsa>revъ stroitelъ*. [367-9] (Vaillant 1968a: 4) 「皇帝の高官が耳にし」、*i došedšu že emu Rima*. [387b-6] (Vaillant 1968a: 37) 「彼がローマに着くと」。これにより Vaillant 校訂版では VzeS 構文は53例となる。

4. 結語

本稿では、キエフ・ルーシにおける文章語の成立について、最初期の古スラブ語文献の言語との関係を見た。すなわち12世紀初めに成立した古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』に見られる様式化された「語りのスタイル」の起源をどこに求めることができるかという観点から、9世紀末に成立し、スラブ語で行われた著作として最初期の層に属する聖者伝『コンスタンティノス伝』および『メトディオス伝』の言語について分析した。

始めに『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』についても『過ぎし年月の物語』の場合にならない事実叙述、コメント、直接引用、聖書引用という4つのタイプのテキスト部分を分けて考えることにした。分析の結果は、古スラブ聖者伝の言語に対してもこのようなテキストのタイプに基づいた分析が有効であることが分かった。

事実叙述タイプのテキストについて、『過ぎし年月の物語』ではVS語順の節の連続とSzeV構文の交替によって成立する様式化した語りのスタイルが存在することが観察される。その際、遠称の指示代名詞 *онъ* の主語としての使用がこのSzeV構文と密接に結びついている。『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』においても、この語りのスタイルを構成するための重要な要素としてのSzeV構文が使用され、その主語として *онъ* が現れる。しかし、ここでのSzeV構文は何よりもまず対話の場面という特定の文脈で発話動詞と共に現れるものであり、事実叙述タイプのテキスト全体を規定する特定の語りのスタイルが成立するわけではない。遠称の *онъ* の使用の範囲も『過ぎし年月の物語』より広いことが観察される。

『コンスタンティノス伝』と『メトディオス伝』を比べると『コンスタンティノス伝』では小詞 *že* の使用が好まれることが観察される。『コンスタンティノス伝』では *že* を伴う構文、すなわちSzeVとVzeSは、事実叙述タイプにおいても直接引用タイプにおいても、ともに高い頻度で現れる。

以上の観察に基いてもなお、事実叙述タイプのテキストにおける一つの様式としての「語りのスタイル」を作り出したのがキエフの年代記作者たちであったと断定することはできない。なお他からの影響の可能性を考える必要がある。しかし、少なくとも

も『コンスタンティノス伝』『メトディオス伝』の言語からそれを直接受け継いだわけではないことは明らかになったと言ってよいだろう。一方で、この古スラブ聖者伝においても、その作者たちが可能な限りの手段を用いて、書き言葉としての独自のスタイルを模索していたことは疑いない¹⁴⁶。

略語表

動詞については次の略号を用いる。1sg.: 1st person singular「1人称単数」、2aor.: 2nd aorist「ギリシア語第2アオリスト」、2sg.: 2nd person singular「2人称単数」、3sg.: 3rd person singular「3人称単数」、1pl.: 1st person plural「1人称複数」、2pl.: 2nd person plural「2人称複数」、3pl.: 3rd person plural「3人称複数」、AnP.aor.: analytical passive aorist「迂言的受動アオリスト」、AnP.plpf.: analytical passive pluperfect「迂言的受動過去完了」、AnP.Prt.pt.: analytical passive past participle「迂言的受動過去分詞」、aor.: aorist「アオリスト」、CompSp.: compound speech verb「複合的発話動詞」、Cond.: conditional「条件法」、DAbs.: Dativus absolutus「絶対与格構文」、ft.: future「未来」、impf: imperfect「未完了過去」、1-prt.: 1-participle「能動分詞過去第2形(1分詞)」、m.: masculine「男性」、N.: nominative「主格」、P.: passive「受動」、past.*: past「過去」、pf.: perfect「現在完了」、plpf.: pluperfect「過去完了」、pr.: present「現在」、Prt.pr.: present participle active「能動分詞現在」、Prt.pt.: past participle active「能動分詞過去」、Prt.P.pr.: present participle passive「受動分詞現在」、Prt.P.pt.: past participle passive「受動分詞過去」。
*past. は、現在完了を構成する1分詞のみが現れ、助動詞 byti が欠けている場合を指す。

146 Wytzens (1968) は N. van Wijk の論文 “Zur sprachlichen und stilistischen Würdigung der altkirchenslavischen Vita Constantini”, *Südostforschungen* 6 (1941): 74-102. から「私は、これほど美しい文体を持ち、その作者のこれほど大きな語り手としての才能を示す、古教会スラブ語文献を他に知らない」(77)という言葉を引用した上で『コンスタンティノス伝』の文体を詳細に分析する。彼は1) 音声・音韻的現象、2) 語(語幹、語根)レベルの手法、3) 形式的な統語手段、さらには4) 漸層法やその他の描写の技術にいたるまで、さまざまなレベルの手法を詳細に分析した上で、ギリシア人がスラブ語で著作をしたと結論づける。「この決して論じ尽くすことのできない文体分析の詳細が許容する結論は次のようなものである。『コンスタンティノス伝』の作者は、伝統的なギリシア語文体論で伝承されて来た沢山の言語的技法を、スラブ語のオリジナルテキストの中で使用したのである。このことは、文献学的に訓練され、文体的に才能のあるギリシア人が作者であることを指し示している。もっとも近いところにあるのは、しばしば言われるところの推測である。すなわち、メトディオス自身が、その弟の伝記の少なくとも原初版を、その死の直後に執筆したという可能性である」(50)。ただし、彼の詳細な文体的分析においても、本稿で見たような語順の問題、また小詞 *že* の使用の問題は言及されていない。

『過ぎし年月の物語』異本テキスト

A.: アカデミー写本、Chl.: フレブニコフ写本、Ip.: イパーチャー写本、R.: ラヂヴィル写本

引用テキスト

『キリル伝』“Prostrannoe žitie Konstantina-Kirilla filosoфа” (Rukopis' poslednej četverti XV veka, Gosudarstvennaja biblioteka SSSR imeni V. I. Lenina (f. 173, No.19) in *Žitija Kirilla i Mefodija*. Moskva i Sofija (1986). 41-130.

『メトディオス伝』“Prostrannoe žitie Mefodija, pochval'noe slovo Kirillu i Mefodiju” (Rukopis' seređiny XII veka, Gosudarstvennyj Istoričeskij muzej (Uspenskoe sobranie, 4, Sinodal'noe sobranie 1063) in *Žitija Kirilla i Mefodija*. Moskva i Sofija (1986). 181-246 (但し “Prostrannoe žitie Mefodija” の部分のみを使用。)

『過ぎし年月の物語』*Lavrent'evskaja letopis'*. Vyp.1: *Povest' vremennyh let*. (Polnoe sobranie russkich letopisej izdavaemoe postojannoju istoriko-archeografičeskoj komissieju Akademii Nauk SSSR. Tom 1.) Izd. 2. Leningrad. 1926. (引用はそのリプリント版である Müller, L. (ed.) Handbuch zur Nestorchronik. Band 1. (Forum Slavicum. Band 48.) München. 1977. によった。)

「マタイによる福音書」*Quattuor evangeliorum versionis palaeoslovenicae codex Marianus glagoliticus*. Jagić, V. (ed.) Berlin-St.Peterburg. 1883. (引用は Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt. 1969 刊の Editiones monumentorum slavicae veteris dialecti 版による)

参考文献

Borkovskij, V. I. (1968) *Sravnitel'no-istoričeskij sintaksis vostočnoslavjanskich jazykov: tipy prostogo predloženia*. Moskva

_____ (ed.) (1983) *Struktura predloženia v istorii vostočnoslavjanskich jazykov*. Moskva.

Gorskij, A. V. (1843) “O sv. Kirille i Mefodii.” *Moskvitjanin* 1845, čast' III, No.6. 405-434.

木村彰一・岩井憲幸 (1984) 「コンスタンティノス一代記 (1) —訳ならびに注—」『スラブ研究』31. 1-17.

_____ (1985) 「コンスタンティノス一代記 (2) —訳ならびに注—」『スラブ研究』32. 191-215.

_____ (1986) 「メトディオス一代記 —訳ならびに注—」『スラブ研究』33. 1-16

國本哲男・山口巖・中條直樹他訳 (1987) 『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会

Lavrov, P. A. (1928) *Kyrylo ta Metodij v davn'o-slov'jans'komu pis'menstvi*. Kyjiv.

Lehr-Splawiński, T. (1959) *Żywoty Konstantyna i Metodego (Obszerne): Przekład polski ze wstępem i objaśnieniami oraz dodatkiem zrekonstruowanych tekstów staro-cerkiewno-słowiańskich*. Poznań: Instytut Zachodni.

Lichačev, D. S. (1996) *Povest' vremennyh let*. (Podgotovka teksta, perevod, stat'i i kommentarii D.S. Lichačeva, pod redakciej V. P. Adrianovoj-Peretc.) Izd. 2-e ispravlennoe i dopolnennoe. Sankt-Peterburg: Nauka.

Pogorělov, V. (1932) “Na kakom jazyke byli napisany, tak nazyvaemyja, pannonskija žitija?” *Byzantinoslavica*. ročnik 4. 13-21.

- 佐藤昭裕 (2005) 『中世スラブ語研究—『過ぎし年月の物語』の言語と古教会スラブ語』 (ユーラシア古語文献研究叢書3) 京都大学大学院文学研究科.
- _____ (2007) 「正教の受容とキリル文字文化圏の成立—古ロシア文章語形成の一断面」『京都大学文学部100周年記念論文集』 京都大学出版会 365-390.
- Slovar' (1987): *Slovar' knižnikov i knižnosti drevnej Rusi: XI - Pervaja polovina XIV v.* (1987) Leningrad.
- Šachmatov, A. A. (1908) *Razyskanija o drevnejšich russkich letopisnych svodach*. S-Peterburg.
- _____ (1916) *Povest' vremennyh let*. tom 1.: *Vvodnaja čast', Tekst, Primečanija*. Petrograd.
- _____ (1940) «Povest' vremennyh let» i ee istočniki." in *Trudy otdela drevnerusskoj literatury* IV. 9-150.
- Šafařík, P. J. (1851) "Život Sv. Konstantina řečeného Cyrilla. z rukopisu XV. století." (iv + 32), "Život Sv. Methodia. z rukopisu XVI. století." (iv + 10) in *Památky dřevního písemnictví Jihoslovanův*. Praga.
- Vaillant, A. (1968a) *Textes vieux-slaves I. Textes et glossaire*. Paris: Institut d'étude slaves.
- _____ (1968b) *Textes vieux-slaves II. Traductions et notes*. Paris: Institut d'étude slaves.
- Van Wijk, N. "Zur Rekonstruktion des Urtextes der altkirchenslavischen Vita Constantini." *Zeitschrift für slavische Philologie*. 17. 1941. № 2. 268-284.
- Voronov, A. D. (1877) *Glavnejšie istočniki dlja istorii svv. Kirilla i Mefodija*. Kiev
- Weingart, M. (1935) "Analyse philologique des légendes slaves de Constantin et de Méthode." in *Actes du IV Congrès International des études byzantines*. Sofia. (Izvestija na bălgarskija archeologičeski institut, t. IX.) 101-109.
- Weinrich, H. (1977) *Tempus: Besprochene und erzählte Welt*, 3. Auflage. Stuttgart: Verlag W. Kohlhammere. (邦訳: 脇阪豊他訳『時制論—文学テキストの分析—』 紀伊國屋書店, 1982)
- Wytrzens, Günther (1968) "Zum Stil vita Konstantini." *Cyrillo-Methodianische Fragen, Slavische Philologie und Altertumskunde. Acta congressus historiae Slavicae Salisburgensis in memoriam SS. Cyrilli et Methodii anno 1963 celebrati*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz. 43-50.